(八) 張傅潘陸の諸家

阮嵇二人、魏晋代興の際に當り、その時代は比較的に早し、若し南晋の詞人を求むれば、傅玄及び三張、二陸、兩潘、一左、蓋し其人なるべく、張華張載張協陸機陸雲、潘岳潘尼、左思、即ち是れなり。この諸人、いづれも賦と詩とを兼ね、一代の聲名を擅にしたるものなれども、左思を除いて、其他は、いづれも同一の窠臼に陷り、之を鄴下の詞人に比すれば、その間、甚しき徑庭の存するを見る。蓋し風氣の變遷は、到底爭ふべからず、措辭漸く綺靡となるに從ひ、骨力愈よ卑く、氣格愈よ下れること、數の免れざるところなり。

建安及び阮嵇二人を境界線として、その上、漢魏の詩は、主として意を造れるに反し、その下、兩晋以後の詩は、唯だ詞を造れり。換言すれば、前者は專ら內容を重じ、後者は翻つて外形を貴ぶに至りしこと、是れのみ。漢の中葉、辭賦の腐敗と同じく、晋に於ては、五古の詩體、又こゝに頹敗の兆を見むとす。蓋し漢魏以前の詩は、患難流離の餘に成れるもの多く、兩晋以後の詩は、恬安娛樂の用に供するを主としたり。凡そ患難流離の際に成れるものは、自然の勢、必ず直に胸臆を抒寫して、復たその文字の如何を顧るに暇あらず、純ら是れ一片肺腑中の語、その巧拙は、姑らく之を措き、生氣凜然、人を感ずること必ず深し。之に反して、恬安娛樂の用に供するものは、唯だ文字を鍊り、聲律を研し、肝を鏤め、肺を琢き、力めて精巧を以て人に勝たむことを求むるが故に、纖密なれども氣骨なく、秀整なれども精神に乏し。これ蓋し風氣の變遷に因つて詩格の升降を致せるものにして、實に古今その揆を一にす。この故に、たとひ大作手ありと雖も、亦た之を奈かむともするなきなり。西晋に於て一たび、かくの如き傾向を顯はせし後、齊梁に至りて、愈よ甚しく、唐に至るまで、遂に挽回せられず、その儘に降下せり。

諸家の傳、一一詳述するの煩に堪へざるを以て下に極めて簡略なる敘述を着けむ。傅玄、字は休奕、北地泥陽の人、少にして孤貧、博學にして善く文を屬し、性剛勁亮直、人の短を容るゝ能はず。晋に事へて侍中となり、奏効する毎に、或は日暮に値へば、白簡を捧げ、簪帶を整へ、踟躕して寢ねず、坐して旦を待てりといふ。玄、顯貴に及ぶも、著述を廢せず、傅子數十萬言を作る。蓋し時弊に激せしものにして、言ふところ、頗る條理あり、論衡昌言と相並ぶに足る。また數ば武帝に上書して、時務を論ぜしことあり。

而して、その詩に長ずるや晉代宗廟の樂府、皆その手に出て、且つ頗る其作に富む、然れども、聰穎の處、時に累句あり、却つて古詩に短なり。

張華、字は茂先、范陽方城の人、少時孤貧にして羊を牧す。同郡の盧欽、鄉人劉放、皆之を奇とし、阮籍亦た王佐の才となす。歷進して、尙書廣武縣侯となり、晉の儀禮憲章を制定し、詔誥又その手に成る。惠帝の世、荀勗これを忌み、出して、持節都督幽州諸軍事となし、後遂に害に遭ふ。性人物を好み、後進を奬引して倦まず。陸機兄弟の如き、皆その惠を蒙るに因つて進む。その集、今存するもの、文極めて少く、詩最も多し。然れども、筆力高からず、凌空矯捷の致を少く。張載、字は孟陽、安平の人、劍閣の銘を以て名を知らる。傅玄、又その潦氾賦を賞し、車を以て之を迎へ、後、官して弘農太守となりしが、幾もなくして、亂を避け、病と稱し、家に歸つて復た出てず。七哀の詩、最も誦すべし。その弟協、字は景陽、河間內史たり。永嘉永の初、黃門侍郎に徵せられしも就かず。尤も詩を善くし、風流調達、二張の詩文、互に長短あり、景陽の文は兄に及ばず、孟陽の詩は弟に遜ると稱せらる。

陸機、字は士衡、吳郡の人、家世吳の名族なり。身の長七尺、聲雷の如し。年二十、吳の滅

ぶや、舊里に退居し、學を積むこと十年。太康の末、弟雲とともに洛に入る。成都王穎表して平原內史となす。太安の初、後將軍河北大都督を假し兵廿萬を率ゐて、長沙王を討つや、大に敗れ、爲に罪せられて斬らる。機、天才秀逸、辭藻宏麗、張華かつて之に謂つて曰く、人の文を爲る常に才なきを恨むも、子は更に其多きを患ふ、と。葛洪又その文を評し曰く、玄圃の積玉、夜光に非ざるはなきが如く、その弘麗妍贍、英銳飄逸、亦た一代の絕たるか、と。その作、頗る多く、賦に於ては、文賦最も名あり。詩亦た頗る觀るべし。然れども、沈德潛が、意博を逞うせむと欲して、胸に慧珠少く、筆又以て之を擧ぐるに足らず、遂に間ま排偶の一家を出し、西京以來、空靈矯健の氣、復た存せず、といひ、士衡名將の後を以て、圍を破り、家を忘れ、情に稱うて言ひ、必ず哀怨多く、乃ち詞旨敷淺、但だ塗澤に工に、復た貴ぶに足らむや、といひしものゝ、やゝ酷なれども、善く其病に中る。屈宋の賦が、漢の中葉に腐敗したる、如く、兩漢の古詩は、晉に入りて、腐敗の兆、極めて明晰となれり。要するに、時勢の約束ならむのみ。機の弟雲、字は士龍、才理あり、少にして兄と名を齊うし、文章は及ばずと雖も、持論は之に過ぎ、世に二陸と稱す。官、清河內史に至り、機の敗るゝや、並に害せらる。今其集を觀るに、賦は遂に兄に及ばずと雖も、

詩は正に伯仲し、その失、亦た偶ま相似たるものあり。

潘岳、字は安仁、滎陽中牟の人、少にして才穎を以て稱せらる。後、才名世に冠たるに及び、衆に疾まれ、栖遲すること十年、出て、河陽令となる。奇才偃蹇、久しく志を得ず、後、給事黄門侍郎に遷る。性輕躁なれども、姿貌甚だ美、少時かつて彈を挾んで洛陽の道に出づるや、婦人之に遇ふもの、皆手を連ねて縈繞し、之に投ずるに果を以てし、果積んで車に滿つ。然れども、其行かつて立たず、賈謐に諂事し、賈后の爲に太子蕩を謀殺するに與りしが如き、人品の汚劣なるを見るべく、末路亦た人に誣告せられて市に誅せらる。その作、辭藻絶麗、賦には閑居、懷舊、悼亡、寡婦等あり。而して、詩品は、陸士衡の下に在りと稱せらる。潘尼は、少にして清才あり、岳とともに文章を以て知られしが、性靜退競はず、唯だ勤學著述を以て事となし、安身論を著し、以て守るところを明かにす。累進して、著作郎となり、趙王倫の位を簒するや、去つて齊王冏に從ひ、その參軍となり、永興の末、中書令となる。時に三王戰爭、皇家多故、尼、職顯要に居り、從容たるのみ、憂虞及ばずと雖も、而かも備さに艱難を嘗む。永興中、太常卿に遷り洛陽の沒せむとするや、鄕里に還らむとし、賊に遇うて、前ひを得ず、病んで卒す。詩賦の作、諸子の

中に在りて最も劣る。

張傅潘陸の諸家、固より是れ、得易からざるの才なれども、ともに時習の移すところとなるを免れず、況んや、此より下なるものをや。張茂先の詩は、古しへより見女の情多くして風雲の氣少しと稱す。この一語、以て斷案となすべく、その雜詩の篇「朱火靑無光、蘭膏坐自凝、重衾無暖氣、挾纊如懷冰」と云ふ如き、寒夜燈下に孤坐するの神理を刻劃して殆んど盡せりと雖も、天然の致、空靈の妙、地を拂ふと云ふも、決して過言に非ず。又情詩の篇「巢居知風寒、穴處識陰雨」と云ふ如き、只だ之のみを誦する時は、如何にも善く理想を極め、たしかに名句と稱すべきに似たれども、之をその粉本たる漢の蔡邕飲馬長城窟「枯桑知天風、海水知天寒」に比すれば、氣象の大小、語句の强弱、音節の高低、果して如何ぞや。傅休奕の詩は、妍媚宛轉の趣なり、尤も樂府に長じたれども、ひとり氣骨の一點に於ては、全く講究せざりしに似たり。潘安仁は、貌を以て名あり、陸士衡は才を以て名あり、然れども、その專ら英華を煥發し、膏澤を塗飾し、綵を剪つて花と爲し、絶えて生韵少きに至つては、諸家實に一轍に出づ。この體、一たび行はれて、建安の詩格、全く撕滅に歸せり。これ唐朝以前、律語の歷史に於て、最も注意すべ

き一大現象なり。

諸家の詩、畧ぼ上に述べたるが如く、漢魏を崇拜する者の眼中より論定すれば、殆んど言ふに足らざれども、亦た必ずしも、棄つべからざるものあり。何となれば、詩は必ずしも氣骨にのみ偏すべからず、質直切實なるもの、獨り詩にして、華靡柔麗なるもの、詩に非ずといふの理、果して何處にかある。諸家亦た何ぞ嘗て詩人に非ざらむ。又、何ぞ嘗て大家たらざらむ。六朝緣情綺語の一體、四人實に之が祖たり、唐代溫李新聲の一派、四人實に之が源たり。その他、後世詩人の排偶駢儷を以て奇巧を逞うし、新異を競ふもの、實に四人を以て模範と爲さゞるなし。善いかな、劉勰の言に曰く、奇を酌めども其眞を失はず、華を翫べども其實を墜さずむば、顧盼して、以て辭力を驅るべく、咳唾して以て文致を窮むべし、と。東晉以後、六朝の詩を讀み、若しくは學ぶもの宜しく、この數語を三復し以て眞訣に當つべきなり。

(九) 東晉の三詩傑

張、傅、潘、陸、四家綺靡の音、一たび起りてより、雄健俊奮の作、復た得べからず、詩格漸く卑下に趨き、殆んど底止するところを知らず。この時に方り、左太沖の挺拔、劉越石の清剛、郭景純の豪儁あり、能く遺般の風氣に浸潤せられず、漢魏を陶冶し、氣骨を煮錬す。予は、王、左、漁洋に倣うて、之を東晉の三詩傑と呼ばむとす。

左思、字は太冲、貌寢にして口訥、辭藻壯麗、性交遊を好まず、唯だ閑居を以て事とす。かつて齊都賦を作り、一年にして成るや、復た三都を賦せむと欲し、思を搆ふること十年、門庭藩溷、皆筆紙を著け、一句を得れば即ち疏す。賦成るや、豪貴の家、競うて傳寫し、洛陽の紙價、爲に貴きに至る。はじめ、陸機洛に入り、此賦を作らむと欲し、思が方に之を作るを聞き、掌を撫して笑ひ、又書を弟雲に與へて云ふ、この間、傖父ありて、三都賦を作らむと欲すと聞く、その成るを須つて、當に酒甕を覆ふべきのみ、とずてにして、其賦を觀るや、歎服して、加ふる能はずとなし、遂に筆を輟めたりといふ。三都の賦、妙は妙なれども、これを班固、張衡等に比すれば、固より及ばず、時すでに降るが故のみ。思をして重からしむるものは、斷じて詩に在り。ひとり思に於てのみならむや、晉

人皆然り。謝靈運は、左太冲の賦、潘安仁の詩、古今に比なし」といひしが、これ紗燈と鳧鐘とを同一視したるものにして、且つ比擬不倫なるを免れず。鍾嶸謂ふ、陸機より野なりと雖も、潘岳よりも深し、と。亦た篤論に非ず。沈德潛曰く、太冲胸次高曠にして、筆力復た雄邁、漢魏を陶冶し、自ら偉詞を製す、故に是れ一代の作手、豈に潘陸輩の比埒するところならむや、と。この論、頗る肯綮に中れり。或は、その稍や粗にして村氣人を撲つを覺ゆといふものあれども、これ張傳潘陸輩を看るに慣れたるが故ならむ。その作、詠史招隱の諸篇に至つては、詞偉にして、格高く、優に千秋の絶唱と稱するに足るべく、その自ら謂ゆる、振衣千仞岡、濯足萬里流」の二句、直に移して、その總評に充つべし。

劉琨、字は越石、中山魏昌の人、年二十六にして司隸從事となり、石崇が金谷園中に賓客を引欵するに預り、文詠頗る當時に許さる。時に秘書監賈謐、朝政に參管し、京師の人、心を傾けざるなく、潘岳、陸機以下、皆之に事へ、琨亦た其間に在り、號して二十四友といふ。琨、官は侍中太尉幷幽薊三州諸軍都督に至り、志常に晉室に存し、戎狄、國家の恥を雪がむとし、而かも謀遂に成らず、後、王敦の爲に、殺さる。その詩、託意雄深、直に胸臆を攄し、悲壯慷慨、頗る其人と爲りに類す。鍾嶸之を中品に置く、不滿の意あるものゝ如し。而して元遺山の論詩絶句に云ふ、曹劉坐嘯虎生風、四海無人角兩雄、可惜並州劉越石、不教橫槊建安中、と。その意、劉越石をして、建安の時に生れ、曹子建劉公幹等と相並び、一たび、其才を角せしめざりしを恨むに在り。これ洵に越石の價値を知るもの、予は之に左袒せむと欲す。沈德潛曰く、越石英雄失路、萬緒悲凉、故に其詩、筆に隨ひ、哀音を傾吐して次なし、讀者何ぞ語句の間に於て之を求むるを怨むと。その作、重贈盧諶の一首の如き、之を證して餘あり。

郭璞、字は景純、聞喜の人、博學高才、詞賦に工なり、時に郭公といふものあり、卜筮に精しく、璞之に從つて遊び、青囊中の書を得たり。是に由つて、五行卜筮の術を聞知し、占驗甚だ多く、洞林、新林、卜韻爾雅注數十篇を撰し、また三蒼方言、山海經、楚辭を注し、詩賦數十萬言、地を避けて江を過ぐ。東晉の元帝、之を重んじ、以て著作郎となす。王敦の反して病むや、璞をして、之を筮せしむ。璞曰く、明公事を起さば、禍必ず久しからず、と。敦大に怒つて曰く、卿の壽如何。璞曰く、命今日中に盡きむ、と。敦之を斬る。その死や、まことに慘なりといふべし。璞の詩に於けるや、建安以後、稀に覯るところなり。鍾嶸

曰く、潘岳を憲章し、文體相輝き、彪炳蔚ふべく、はじめて、永嘉平淡の體を變ず、故に中興第一と稱し、翰林以て詩の首となす。但だ游仙の作、辭に慷慨多く、玄宗に乖遠す、乃ち是れ坎壈詠懷列仙の趣に非ざるなり、と。璞を以て中興第一となすは可なれども、之を以て潘岳を學ぶものとなし、又游仙の題意に乖くを云々するは斷じて非なり。蓋し晉の中葉、江左偏安の後、老莊虛無の學、大に行はれ、詩人亦た皆玄風を宗とせざるはなく、潘陸華麗の風、こゝに又一變して、浮誕散漫の一路に入りぬ。袁彥伯、孫承公の如き、特にその尤なるものにして、鮮明緊健、能く凡俗を脫すと雖も、その辭趣、皆一揆に出で、虛玄の旨に惑溺せざるもの少し。ひとり景純、復かに之と撰を異にす。その游仙の詩十四章、名は游仙と云ふと雖も、實は阮籍の咏懷、左思の詠史と同意にして、千古に並傳すべきものなり。沈德潛曰く、游仙の詩、本と託あつて言ふ、坎壈詠懷は、その本旨なり、鍾嶸、その列仙の趣少きを貶するは、謬れり、と。やもふに、その之を以て題を命ぜし所以、當時の弊風を矯正せむとし、故らに襲用せしものならむのみ。かの「左挹浮邱袖、右拍洪崖肩、借問蟬蛻輩、寧知龜鶴年」といふ如き高潔なる詩想は、古今獨步を推すべく、中興第一の稱、決して過譽に非ず。

（一〇）陶淵明

魏晉以後の詩、始に綺靡豐褥となり、次に浮誕虛玄となり、その變、すでに極まり、又變すべきなく、三詩傑の力を以てして、頹瀾を既倒に廻す能はず。こゝに於てか、天は特に一大偉人を下し、晉詩をして、百代の重きをなさしめき、是を陶淵明となす。

陶淵明、字は元亮、或は云ふ、潛字は淵明、潯陽柴桑の人。曾祖侃、晉の大司馬たり。淵明少にして、高趣あり、博學にして、善く文を屬し、穎脫不群、眞に任かせて自得し、かつて五柳先生傳を著して、自ら況す。親老ひ、家貧なるや、起つて、州の祭酒となりしも、吏職に堪へず、少日自ら解いて歸る。州主簿に召ども、就かず。躬耕自ら資し、遂に羸疾を抱く。江州刺史檀道濟、往いて候し、之を起さむとす、應ぜず。後、鎭軍建武參軍となり、親朋に謂つて曰く、聊か絃歌して、三徑の資となさむとす、可ならむかと。執事者、之を聞いて、彭澤令となす。歲終、郡、督郵を遣して、縣に至るに會し、吏請うて曰く、束帶して、これを見るべし、と。淵明歎して曰く、我豈に五斗米の爲に、腰を折つて、鄉里の小兒に向はむや、と。即日綬を解いて職を去り、歸去來を賦す。著作郎に徵されしが、就かず。淵明、性頗る淡、音律を解せざれども、無絃琴一張を蓄へ、酒適する毎に、輒ち撫弄して、其意を

寄す。貴賤之を造るもの、酒あれば、輙ち設く。淵明もし先づ醉へば、便ち客に語るらく、我醉うて眠らむと欲す、卿去るべし、と。その眞率、かくの如し。自ら曾祖晉世の宰輔たりしを以て、身を後世に屈するを耻ぢ、宋の高祖王業漸く隆なるより、復た仕へず。元嘉四年、將に復た徴命せむとするや、會ま卒す、時に年六十三、世に靖康先生と號す。

淵明の少時、固より英氣に富みて、功名に意ありしと雖も、宗社の末運は、之をして一代の隱逸たるに終らしめたり。熟ら之を考ふるに、彼は情の人なるが故に、始に悲觀せり。家貧にして給せず、乞食の詩を賦せしことすらあり、耕植以て飢を支ふるに足らず、加ふるに、幼稚室に滿ち、餅に儲粟なく、生生資するところ、其術を見ず、終に微官を求むるの止むを得ざるに至り、而かも、之を終へずして止むべきに、名家の胄裔を以てして、時に遇はず、こゝに於て、「貧士」を歌ひ、「士不遇」を賦し伯牙と莊周とを呼び、此士難再得、吾行欲何求と吟ぜしことあり。之に次いて、晉主恭帝飲酒掩殺の悲劇は、如何に遺民の心を傷ましめけむ、述酒の詩、隱語を以て暗寫し、意を寓するところ慢奥たり。彼れ是に至つて、全く意を世に得ざるなり。乃ち荆軻を詠じて、千載有餘情といひ、或は商山の四皓を想ひ、讀史九章に微旨を洩らし、遂に饑食首陽薇、渴飲易水流

といふに至る。亡國の遺民は、穢土を泣けり。而して、彼、如何に安心立命を求めたる。

こゝに於て、彼も亦た清談家の如く、老莊の哲理を取り、善く其旨に通ぜしが、その悟徹するところの深き、到底曲士輩の比に非ず。乃ち現世を逆旅と呼び、死を本宅に歸るといひ、死後の安樂界を想像しては、得失不復知、是非安能覺、千秋萬歲後、誰知榮與辱といひ、その處世の法を說くや、縱浪大化中、不喜亦不懼、應盡便須盡、無復獨多慮と歌ひ、有形有爲の沈濁界を脫離し、無形無爲の自由界に參透し、天地と並び、神明とともに往く。これ清談家の夢視せざるところ、彼が樂天主義の基礎に外ならず。

樂天主義の淵明は、支那に於ける田園詩人の開祖たりき。彼は、世外の閑地に肥遯し、高尙なる趣味を以て天然を察し、溫かなる情感を以て之と同化せり。そも田園は、人界の最も平穩なるところにして、天然の粹美を靜觀すべき好個の樂園（パラダイス）なり。若し之を以て、趣に乏しといはゞ、蕭散淡遠の美たるを解するの趣味なく、徒に變化を好み、遂に幽妙を悟り得ざる癡呆子のみ。凡そ天然に對する愛は、人類の心意に存する善の不變の表彰にして、之より受くべき感情は、誠實にして且つ神聖なり。個中の消息は、東籬採菊の一詩に於て遺憾なく表現されたり。曰く、採菊東籬下、悠然見南山、山

氣日夕佳、飛鳥相與還、此中有眞意、欲辯已忘言、と。

淵明は、詩人たるに必要なる豐富なる想像力を有せり。その上古を追想するや、桃花源といへる仙境は、彼れ一家のユートピヤとして描寫されたり。而して是れ、實に南方文學原始の理想を其儘に取り來りしものにして、老子の篇末に見え、莊子の胠篋篇に見えしものと異なるなしと雖も、かばかり一層現實的に構成せしは、その想像力の結果に非ずして何ぞ。

要するに、淵明の樂天主義は、厭世より一轉し、人生を疎外し、宇宙と契合せむと欲せしものなり。然れども、情の人は、あくまで眞摯にして、遂に現世を忘るゝ能はず。だとへば、風雨陰寒の夜、創痍奇痛を生じ、終夜眠るを許さゞるが如く、その念、一たび國家に還及するとき、悲哀凄凉、自ら堪へず、窮通靡攸慮、顧領由化遷、撫已有深懷、履運增慨然と歌ひ、乃ち去つて醉鄉に逍遙し、何以稱我情、獨酒且自陶、千歲非所知、聊以永今朝と吟ずるに至る。彼れ偃蹇世と接するを欲せず、然れども猶ほ其心を平かにする能はず、或は事物是非相感發し、酒に托して逃る」といひし韓愈の言、穿てりといふべし。夫れ智と情と常に相戰ふもの、未だ全く悟徹せず、こゝに於てか常に詩あり。

予は、淵明の人物及び思想を論じ、こゝに其詩が一の主義を以て貫かれ、理想のほのめかされたるものあるを斷言す。彼は、支那に於ける最始の詩人なり。その詩、百五十首に滿ずむしろ貧なりと雖も、文學の價値は、固より、質に在つて量に在らず、試に其最も至れるものに就いて論ぜむ。彼は光風霽月の懷を以て、山川清淑の氣を鍾め、邱壑煙霞の眞情と妙趣とを抒寫せむとす、故にその宗とするところは、天然に在り、詩材を求むる、復かに前人と異なれり。かくの如くして、天機に任かせ、興會を主とし、筆意に隨つて下り、一點の俗氣なく、一個の廢字なく、全く澁滯窘束の苦を離れ、自在に文字を運旋し、巧を弄し奇を衒ふの失なく、たとへば、大匠の斧斤を運らす如く、繩削を煩はさずして自ら規矩に合し、一も間然するところなきは、彼が獨得の壇場を推すに足るべし。更に體制上より立論すれば、その四言は、優に高致あり、直に三百篇の後に追隨すべく、五言は、體整にして意洽ねく、ともに古體の上乘なり。東坡は、「吾、詩人に於て好むところなきも、獨り淵明の詩を作ること多からず、然れども質にして實は綺麗にして實は腴、曹劉鮑謝李杜の諸人より、皆及ぶなきなり」といひ、黃山谷は、「謝康樂、庾義城の詩、鑪錘の功、餘力を遺さず、然れども、未だ彭澤數仞の

牆を窺ふ能はざるもの、二子、俗人その工拙を贊毀するに意あり、淵明は直に寄す、これを持して淵明を論ずる、亦た以て、その關鍵を知るべきなり」といひ、その他、古今諸家の評語、一々擧げず、要するに、淵明の詩、前に古人なく、後に來者なし、唐代王孟韋柳の諸家、才學を以て、その風神を摸倣し、僅に其性の近きところを得て罷み、而かも遂に天籟と人籟との別あり、その樸質、或は及ぶべし、その神奇は、終に及ぶべからず。

淵明の詩、特に選を施すべからず、而して、賦には、感士不遇閒情あり、又、古文に長じ、一縷の命脈を衰微の日に維持す、その功、尤も偉なり、歸去來辭の如き、歐陽修、かつて激賞して、「晉に文章なし、唯だ淵明歸去來辭一篇のみ」といへり。桃花源記・五柳先生傳・孟府君傳及び疏祭文皆觀るべし。群輔錄、或は其著と稱すれども、信ずべからず。昭明太子、かつて曰く、その文章は不群にして、辭彩精拔、跌宕昭彰、ひとり衆類を超え、抑揚爽朗、之と興京するなし。素波を橫へて傍流し、青雲を于して直上し、時事を語れば、指して想ふべく、懷抱を論ずれば、曠にして且つ眞なり。貞志休まず、道に安んじ、節に苦み、躬耕を以て恥を爲さず、財なきを以て病と爲さゝるが如きは、大賢篤志道と汙隆するよりは、孰か能く此の如くならむ」と、公論定まるあり、復た何の疑ふところぞ。

第三　六朝文學

(一)　佛敎の影響

吳晉宋齊梁陳、相繼いて江左に國せしを以て、之を六朝と稱し、普通に漢魏六朝と連呼す。然れども、魏、晉は合せて前章に論じたるを以て、こゝには、謂ゆる南北對立の時代を以て、假りに六朝となさむとす。蓋し、六朝の特色、この間に於て、最も彰著なるものあり、名は必ずしも當らずと雖も、幸に深く咎むるなからむのみ。

六朝に特異とするところは、佛敎の流行とその影響とに在り。兩晉の淸談、或は高人逹士の玩弄物たるに適すと雖も、老莊虛無の說、專ら退嬰主義を旨とし、一般の敎義となすべからず。佛敎の之に代る、豈に故なしとせむや。他なし、大なる宗敎は、殆んど根柢より一國の民心を刷新し得べければなり。げにや、佛敎の傳來は、支那思想界を變動せしめし一大勢力にして、その由來、亦た古し。後漢明帝の時、迦葉摩騰竺法蘭の二人、優塡王、造るところの佛像及び四十二章經を携へ、遠く西域より來り、洛陽に入るや、明帝之を迎へて白馬寺に居らしめ、梵經を飜譯して、萬民に示さしむ。

漢末佛教の礒譯すべて三百部、少しと爲さず。下つて三國に及ぶや、康居國の沙門康僧會、建康に至り、舍利を感得して、孫權に說く。權、大に感じ、爲に建初寺を建つ。これ江南佛教の隆盛に赴きし第一歩なりき。その後愈よ盛にして後趙の石勒・前秦の苻堅の如き、ともに之を信奉し、次いで、後秦の姚興に至れば、龜茲國の沙門鳩摩羅什を尊敬して、國師となし、經論を譯せしめ、僧尼を度すること數千萬、而して、前後秦の兩朝、譯出せしところの經論は、三藏百餘卷の多きに達し、元魏の孝文帝の時、又新に一千餘卷を增せり。南朝の國を傾けて佛教に奉ずる、決して之に遜らず。梁武の佞佛、長く史上に傳へ、然る後、隋唐の世、僻遠の地、寺院を見ざるなきに至れりき。

佛教の影響は非常なりき。淺近膚薄なる老莊虛無主義は、こゝに消滅するの止むを得ざるに至り、道教中の或者は、佛者と爭論を試みしも、全く失敗せり。かくの如くして、佛教の感化は、思想界に及び、遂に文辭の上に隱見するを見る。周顒・劉善經・高侯詠・王斌を經、梁の沈約に至りて、はじめて大成したる四聲譜の如きは、實に悉曇聲韵の學より起りしものにして、その作に係る懺悔の文の如きは、王巾の頭陀寺碑文とともに、佛教崇信の念、頗る著しきを表示するものなり。その他、六朝文士の制作、浮屠氏の分子を含まざるもの、幾んど希に、その例、一一こゝに擧ぐるの煩なるに堪へず。これより先、廬山東林寺の慧遠が山西巖下般若臺精舍に創めたる白蓮社は、緇素百廿三人を集めたるものにして、その間、聲譽高きもの、十八賢の稱あり。謝靈運、一時の才學を以て、江左の冠となり、才を負ひ、物に傲りたるも、猶ほ慧遠を見れば、容を改め敬を致し、頻りに、その社中の人たらむを欲し、而かも得ざりしといふ。虎溪三笑は、世の傳ふるところ、その交るところの文士、皆一時の選にして、陶淵明の如き、亦た數ば招致せられたるも、竟に反應して之を謝せりといふ。知るを要す、佛教は、當初に於て全く文士輩に慰安を與へ、その皷吹の力によりて、愈よ盛行に赴きしを。

佛教流布の結果は、多くの場合に、厭世の動機を與ふれども、深邃高尙なる教理は、容易に凡衆に解知せられず。こゝに於てか、一轉して、現世快樂主義に入らむとす。而して、六朝の間、這般の傾向を激成せしに就いては、他に又頗る注意すべき事あり。顧みれば、漢魏以後、思想紛亂の根本的原因は、その一面に於て、矛盾せる儒道二教の衝突に歸すべし。而して、この矛盾を調和するに有力なるものは實に佛教に外ならず。元來佛教は、數ば言へる如く、南方思想に酷似せしものにして、その初、相輔相助の緊

密なる關係を有したりしが、佛教大乘の思想は、敢て現世を否定せざるを以て、儒教と契合し易き性質あり。こゝに於て、佛教は、漸を以て、支那化し、來世を論ぜむよりは、むしろ現世を究め、この肉身を如何にすべきかといふ問題に逢着し、厭世教は、一變して、樂天教を形成するに至り、儒佛二教は、互に讓歩し、佛教の倫理觀は、未だ十分ならず、且つ到底漢族の特性に適合せざるを以て、儒教を認許し、自ら退いて形而上學的もしくは神學的方面に限りしと同時に、儒教は、佛教の流布を公認し、その宗教的儀式を葬祭に行ふを許したり。佛教の基礎、かくの如くして、愈よ固く、その流行の結果として、寺を建つるに輪奐の美を窮め、佛を飾るに五彩を以てし、此世からなる極樂淨土に、五官の快感を受け、以て未來の冥福を求めむとし、同時に又印度の文化を傳へて、之を融會するに至れり。六朝亂離の間、詩歌音樂建築等、諸種藝術の興隆を見る、亦た自然の勢のみ。然れども、注意すべきは、均しく現世快樂主義といふも、六朝の淫柔は、遂に西漢の豪奢に似ざるの一事にして、要するに、山水佳麗なる江南風氣の感化に外ならず。されば、その文字の如きも、奢華侈靡、後には愈よ纖巧となり、やがて極微となりぬ。李太白曰く、自從建安來、綺麗不足珍、と。以て證となすべきなり。

(二) 謝顏鮑の三家

詩は魏晉を經、宋に至つて一變せり。他なし、性情愈よ隱れ、聲色大に開け、形式的方面に注意したるの極、修辭的技工特に發達したるの謂のみ。古人が、詩は、宋より一大變す、氣變じて韶かに、色變じて麗しく、體變じて整ひ、句變じて琢けり、蓋し古に於て漸く遠くして、律に於て漸く開けたるなり、といへるは、頗る肯綮に中るの言を推すべく、王世懋が、古詩、兩漢以來、曹子建出てゝ、始めて宏肆となり、漸く情態を生ず、これ一變なり。これより作者多く、史語を入る、然れども、經語を入るゝこと能はず。謝靈運出てゝ、易辭莊語、用を爲さゞるなく、剪裁の妙、千古宗と爲す、又一變なり。中間何庾工を加へ、沈宋麗を增し、變態未だ極らず、七言なほ閒雅を以て致となす、といへるは、更に切實なり。要するに、宋代謝靈運出てゝ、建安以後の文運、又面目を革めしなり。

謝靈運は、陳郡陽夏の人、少にして學を好み、博く群書を覽、文章の美、江左逮ぶなしと稱せられ、康樂侯に襲封し、邑二千戶を食む。その性、豪奢を喜び、車服鮮麗、衣裳器物、多く舊制を改む。人と爲り、偏激にして、多く體度を愆り、志を得ざるを以て、常に憤志を懷き、終に族を以て東歸し、游娛宴集、夜を以て晝に繼ぐ。性尤も山澤の游を喜び、從

者數百人、木を伐り徑を開き、その間に嘯傲して詩を賦す。百姓驚援、或はその異志あるを疑ふものあり。その後臨川の內史となるや、有司之を糾して收めむとす。靈運兵を起して逃避し、詩を作つて曰く。韓亡子房奮、秦帝魯連耻、と。幾もなくして、追討して擒にせられ、廣州に徙され、すでにして棄市せらる。靈運の一生、すでにかくの如く、固より取るに足らず、然れども一種の別才、亦た能く天然の詩人たりき。

その詩之を一概して、彫章琢句、詞彩絢爛、殆んど目を眩せむとす。鍾嶸曰く、興多く才高く、寓目即ち書す、內に乏思なく、外に遺物なし、その繁富、宜なるかな。然れども、名章迥句、處々に間起し、麗典新聲、絡繹として奔會す。たとへば、青松灌木を拔き、白玉塵沙に映ずるが如く、未だ高潔を貶するに足らざるなり、と。康樂の詩は、慘澹たる經營に成り、洗鍊の後、彫琢の痕を止めざるところ、偶ま其妙を見るべきなり。沈德潛乃ち曰く、前人康樂の詩を評して、東海帆を揚げ、風日流和なりといへり、これ甚だ允ならず、大約經營慘澹、深を鉤し、隱を求め、而して、一に自然に歸す。山水閑適、時に理趣に遇ひ、匠心獨り運らして、規少し、さきには建安諸公、すべて屑しとするところに非ず、況んや士衡以下をや、と。修辭を生命となし、而かも斬新の構想、比較的に少きは、主として時勢の影響と人物の性癖とに因らずむばあらず。

康樂の詩、完璧に乏しと雖とも、名句固より算なし。白雲抱幽石、綠篠媚清漣の如き、着語何ぞ悠曠なる。猿鳴誠知曙、谷幽光未顯、巖下雲方合、花下露猶泫の如き、何等の清芬。その他池塘生春草、園柳變鳴禽といひ、林壑斂暝色、雲霞收夕霏といひ、密林含餘清、遠峰隱半規といひ、雲日相輝映、空水共澄鮮といひ、野曠沙岸淨、天高秋日明といひ、春晚綠野秀、巖高白雲屯といふ如き、洵に必傳を推すべし。その詩、對句に富み往々にして首尾を一貫するものあり、初唐沈宋律詩の源、正に此に在り、後に沈約四聲八病を唱ふるに及び、自然に發達して、現時見るところの定式を確立するに至る。

康樂は、陶淵明に次ぐ天然の詩人なり。然れども、兩者自ら別あり、陶詩は、自然を含下し、及ぶべからざるところ、眞に在り、厚に在り、謝詩は追琢して、自然に返り、及ぶべからざるところ、新に在り、俊に在り。千古並稱、固より不可となさざれども、陶詩の高きところは、排せざるに在り、謝詩の勝れたるところ、排に在り、終に一籌を遜る。

謝靈運と同時に、顏延之あり、顏謝と稱す。その人と爲り、偏激にして、酒過あれども、肆意直言、身を居くこと淸約、財利を營まず、布衣疏食、郊野に獨酌し、その適意の時、傍

に人なきが如し。蓋し、その人格、靈運と頗る相似たれども、幾分高き者あり、然れども、詩は却つて相及はず。湯惠休、かつて二家を評して曰く、謝は芙蓉水より出づる如く、顏は錯彩鏤金の如し、と。之に次いて、其失は、鍾嶸が「體裁綺密、情喩淵深、却つて虛散なり、一句一字、喜んで古事を用ひて、彌よ拘束せらる」といひし如く、塡綴の工、往々にして、眞氣を傷けむとす。たゞ其作に係る五君詠、秋胡行の如き清眞高逸の趣を見る。

謝顏二人の間に立つものを鮑明遠となす。その長は、樂府に在り。五丁山を鑿つて開くが如く、人世未だ有らざるところ、後、太白往々にして之に效ふと稱せらる。次いで、その五言は、彫琢の處、謝と相似て、自然の趣、少しく足らずと雖も、高きものは、遠く機雲に軼し、上は操植を追ふ。杜甫かつて俊逸の二字を以て之を許す、公論移易すべからず。若し其失を求むれば、筆力矯健、之ありと雖も、動もすれば、巧を尙ぶの極、險俗の弊に陷らむとするに在り。當時顏謝並稱すと雖も、謝鮑二人、實に其冠たり。

その他、宋人にして、集を存するもの、何承天、傅亮、袁淑、謝惠連、謝莊等あり、孝武帝、南平王鑠、謝瞻、鮑令暉、吳邁遠、王微、王僧達、沈慶、陸凱、湯惠休等、間ま其作を傳ふ。然れども、一味鏤刻、自然の致を失ふもの、比々として是のみ。

(三) 謝朓及び齊の諸家

齊の永嘉體は、之を宋の元嘉體に比して、綺靡は纖巧となり、麗は艷となり、色澤益す濃にして、性情の眞、却つて遠からむとす。然れども、その傳ふべきもの、謝朓あり、

謝朓、字は玄暉、陳郡陽夏の人、かつて宣城大守となりしが故に、世に謝宣城と稱す。薄倖の才人、亂世の排擠搆陷に抗する能はず、三十六にして獄死せり。その詩、後人の贊稱を得たるは、蓋し稀に見るところ。梁の武帝、特に之を重じ、三日讀まざれば口の臭きを覺ゆといひ、簡文帝は之を推して、文章の冠冕といひ、沈約は、二百年來、この詩なしといひ、李白の仙才、その詩を論ずる、眼中古人なきに拘らず、ひとり之に就いては、三四稱服して措かず、蓬萊文章建安骨、中間小謝又清發といひ、解道澄江靜如練、令人長憶謝玄暉といふに至る。沈德潛又曰く、玄暉靈心秀工、名句を誦する毎に淵然冷然、筆墨の中、筆墨の外、別に一段の深情妙理あるを覺ゆ、と。その詩、專ら發端に工にして、起筆千鈞の力あり、唐代岑參、高適諸人の規撫するところ、自から法門を開くと雖も、往々にして、首尾貫徹せず、龍頭蛇尾の誚を貽すものあり。鍾嶸は、意銳にして才弱といへり。試に之を康樂に比するに、能く清なるも、厚なる能はず、詩品むしろ其下に

在り、大謝小謝の目、殆んど爭ふべからず。その作るところ、玆山亘百里、合沓與雲齊といひ、大江流日夜、客心悲未央といひ、洞庭張樂地、瀟湘帝子遊といひ、餘雪映青山、寒霧開白日といふ如き、皆誦すべきなり。

謝眺と同時に王融あり、好んで艶句を作り、刻飾塗澤、聲色を以て人に勝たむことを務む、然れども、神氣に乏しく、觀るべきもの、多からず。王儉・張融、又集あり。劉繪・陸厥・江孝嗣等、少作あり、すべて省略に從ふ。

謝詩に對して、齊代文章の秀を以て博ふべきものを孔稚圭となす。字は德璋、會稽山陰の人、少にして學に涉り、美譽あり。外兄張融と情趣相得、又王思遠・何默と欵交して、世務を樂まず。居宅幽雅、山水の間に營み、凡に憑つて獨坐し、傍に雜事なく、門庭の內、草萊剪らず、中に蛙鳴あり。官、太子參車事散騎常侍に至る。かつて、汝南の周顒、鍾山に隱れしが、後詔に應じ、出て丶山陰令となり、此山を經るや、稚圭、北山移文を作つて、之を却く。歸震山、評して曰く、此等の文字活潑、畫工景を描いて眞切なるが如く、美女情を傳へて婉媚なるが如く、眞に一世を驚倒せしむ、と。四六の妙、正に此に極まる。然れども、その頗る彫琢に過ぎたるところ、偶ま以て時好を窺ふに足るべし。

(四) 梁陳の作家

梁の文學に於けるや、南北朝、第一となす。上に武帝・文帝・元帝あり、昭明太子は文選を著し、劉勰は文心雕龍を作り、鍾嶸は詩品を選び、ともに六朝文學を品騭し、その精華を煥發せり。梁書文學傳に曰く、高祖聰明にして文思區屬に光宅す、旁ら儒雅を求め詔して異人を採る。文章の盛なる、煥として俱に集る。御幸ある毎に、輙ち群臣に命じて詩を賦せしめ、その文善きものは、賜ふに金帛を以てし、闕庭に詣つて詩頌を獻ずるもの、或は引見す。その位に在るものは、沈約・江淹・任昉、並に文采妙絕を以てす、と。然れども、鏤刻の工、愈よ甚しく、渾厚の意に乏し。況んや、沈は聲律に拘はり、江は摸擬を事としたるに於てをや。詩の變、將に極まらむとす。顧みれば、東晉の末、淵明あり、次いで兩謝を出せしと雖も、文章宮闈に入りし後は、再び繙陸綺靡の故習に歸れり。

梁の武帝、少くして學に篤く、儒玄に洞達し、萬機の間、手に卷を輟らず、晚年に及びては、正法を信じて、梵典に耽り、亦た頗る造詣するところあり、古しへの人君、恭儉莊敬、藝能博學、帝の如きは、蓋し稀なり。梁の君臣、文學の才多きは、全くその餘澤、之を然らしめしのみ。その詩、風華を以て勝ち、なほ幾分渾厚の處あり、西洲曲・河中之水歌の

如き、ともに傑作と稱するに足るべく、宛轉たる聲調、初唐諸家刻苦模して止まず。

昭明太子、名は統、字は德施、武帝の長子なり。天監五年、立つて太子となる。性仁孝にして寛和、能く衆を容れ、常に才學の士を引き納れて、賞愛倦むことなく、篇籍を討論し、古今を商搉して、繼ぐに文章著述を以てす。東宮の藏書、殆んど三萬卷、名才並び集る、晉宋以來、未だ之あらず。大通三年、三十一にして薨ず。かつて遠く周秦以來の雜文を編次して、文選といひ、大に時に行はる。その詩文、亦た甚だ美なり。後に簡文帝、躬らその遺厚を編次し、序を作つて、其十四德を頌す、翩々たる濁世の佳公子たるに近し。

簡文帝、好んで艶曲を作つてより、江左之に化し、因つて宮體の目あり。沈德潛曰く、詩、蕭梁に至つて、君臣上下、唯だ艶情を以て娛となし、溫柔敦厚の旨を失ひ、漢魏の遺音、蕩然として地を掃ふ。溫柔敦厚、果して詩の本領なりや否やは、姑らく之を措き、格力愈よ卑きは、爭ふべからざる事實なり。その臨高臺に、草樹無參差、山河同一色といふ如き、神遠く語警、まことに稀に見るところ、登高の神理を極盡せしに庶幾しと雖も、之を後世杜甫の俯視但一氣、焉能辨皇州に比すれば、殆んど言ふに足らず。元帝、その人、取るに足らずと雖も、著すところ、孝德傳忠臣傳あり、詩文雜著、亦た多し。

武帝時代、名あるものを沈約・江淹・范雲・任昉の四家となす。概ね前朝の遺臣にして梁に事ふ。約、字は休文、吳興武康の人、官、左光祿太夫侍中少傅に至る。淹、字は文通、濟陽考城の人、散騎常侍左衛將軍に至る。雲、字は彥龍、吏部尚書に至る。昉、字は彥章、樂安博昌の人、新安太守となり、官に卒す。古人「沈江は體料に饒かにして性情に乏しく、范任は性情に足りて體料に短し」といひしが、その雄を稱すべきは、沈約なり。沈德潛曰く之を鮑謝に較れば、性情聲色、ともに一格を遜ると雖も、蕭梁の間に在りては、亦た大家を推す、邊幅尚ほ濶く、詞氣尚ほ厚く、能く古詩の一派を存するを以てなり」と。その詩、名句に富み、氣格やゝ高きもの、亦た之ありと雖も、聲律に拘はりしが故に殆んど後世の律詩に近きものあり。漢魏の古詩と初唐沈宋體との連鎖として、亦た特に、研究を値す。江淹は、力を修飾に用ひたれども、風骨未だ高からず、范任は道ふに足らず。

次は庾肩吾、字は子愼、八歲にして、詩を賦し、兄於陵に友愛せらる。太宗藩に在るとき、之を賞接し、東宮に居り、文德省を開いて、學士を置くや、先づ其選に充て、後、官度支尚書に至る。その詩聲色臭味、ともに備はり琢句に巧なりと稱す。陸時雍、之を評して曰く推鍊精工、氣韻香美、當に是れ聲律の絕技たるべし、と。然り、その秀朗の風神は、愈

よ唐律を促進せしものなり。その後、柳惲・何遜あり、艷靡の習を去り、その本素を摭寫せむを力めしが、知らず識らず、偶ま時好を逐ふの跡なき能はず。

その他、梁代集を傳ふるもの、陶弘景・丘遲・王僧孺・陸倕・劉孝標・王筠・劉孝綽・劉潛・劉孝威・吳均あり。王籍・劉峻・孫虞義等、亦た作あり。

陳の作家には後主を始め、陰鏗・徐陵・張正見・江總等あり。鏗、字は子堅、武威の人、梁の湘東法曹參軍となり、侯景の亂に値ひ、後、陳に入る。陵、字は孝穆、東海剡の人、左光祿大夫太子少傅に至る。佛を好み、且つ一代の文宗たり。正見、字は見頤、清河東武城の人、梁の彭澤令、陳に事つて、尚書度支郎に至る。總、字は總持、濟南考城の人、尚書令に至る。如上の諸家、大抵梁の餘風を傳ふ。就中、陰鏗は何遜の流亞にして、世に陰何と稱す。然れども、琢句の工を競うて、氣格骨力、甚だ卑し。後に杜甫、頗學陰何苦用心といひ、李侯有佳句、往々似陰鏗といひしが、特に其句を賞するのみ、決して其格を取るに非ず。徐陵は、玉臺新詠の著を以て名あり、その詩たゞ綺褥。江總は狎客のみ。陳の後主の詩、頗る輕靡、愁多明月下、淚盡雁行前といひ、妖姫臉似花、含露といひ、その多くは、宮中妃嬪の品評に關す。その他、沈炯に集あり、何胥・章鼎・陳昭・劉昶等、又作あり。

(五) 樂府及び北方の詩

齊梁陳、三代の詩、すでに上に述べたる如しと雖も、當時の樂府、特に軍中馬上に用ふる横吹曲の一體は、武人の詞、多きに居り、音に鏗鏘なるもの多く、一種の異彩を放ち、婦人群中、丈夫を見るの感あり。企喩歌・隴頭歌辭・折楊柳詞の如き、即ち是れなり。若し夫れ、木蘭の詩に至りては、古今稀に見るところ。この詩、普通に梁詩といひ、胡應麟は、その句格と篇中に可汗の字あるとの二因を以て之を晉代の作となせり。然れども、沈德潛の證言、亦た捨つべきに非ざるを以て、予は必ずしも晉梁の別を爲さず、唯だ六朝中葉の作といはむと欲す。而して、その高きものは、上、漢魏に逼り、平かなるものは、下、齊梁を兆す」といへるは、蓋し動かすべからざる公評なり。その本事の如きは、ここに縷述せず、中間の數解、乍ち胡地征戍の苦を敘し、「朝辭爺孃去、暮宿黃河邊、不聞爺孃喚女聲、但聞黃河流水鳴濺濺、朝辭黃河去、暮至黑水頭、不聞爺孃喚女聲、但聞燕山胡騎聲啾啾」といふに至りては、情景兩語、雙關の妙あり、聲調宛轉、まことに歌行の絶調を推すべし。されば唐子西は、「杜子義、木蘭に本づく」といひ、沈德潛は、「杜少陵の草堂一篇全く此詩の章法に用ふ」といひ、或は、「木蘭長にして妙、此に熟せば、歌行の法、他に

求むべからず、杜詩多く是より悟入するに似たり」とさへいへり。更に全篇の價値に至ては、「事奇にして詩奇なり、卑靡の時、之を得たるは、鳳凰の鳴き慶雲の見はるゝ如し」といへるもの、最も中れりとなすべし。その他、漢魏の小樂府は、變じて五言四句、二十字となり、專ら即興應酬に用ひられ、蕩子浪婦が信口道情の具となりしが、その篇幅、短くして、餘意あるが故に、往々にして、沈痛なるものなり、能く一種の古音を保てり。この體、やがて平仄を論ずるや、乃ち絶句となる、これ最も注意すべきなり。

北朝に於ては、魏の高允、溫子昇、齊の邢邵、魏收等皆集を傳へ、常景、古人を詠ずるの作、又觀るべく、胡叟、胡太后、祖珽、鄭公超、蕭慤、顏之推の輩、その作を傳ふ。而して、最も稱すべきは、北齊斛律金の敕勒歌、僅々二十七字、その高古の神趣、直に漢人の遺響なり或は曰く、雄勁蒼莽、自ら是れ北音、迥かに齋梁綺靡の習と別なり。漢魏歌謠の一派、こに至つて響を絶つ。僅に廿七文字、風雲の氣を含む如し。その中、三言、四言、七言、相錯り、歌行の結篇、立章、鍊句、換韵、開合、頓折の諸法を併せて、皆備はる。唯だ一首、下半部の文選に敵すべきなり。敕勒は短くして妙、木蘭は長くして妙、この二歌に熟せば、歌行の法、他に求めざるべし」と。以て、その價値を知るべきなり。

(六) 庾信

北方の詩人、固より多からず、その見るべきは、周の庾信、もと北人の種に非ずして、梁の庾肩吾の子なり。信、字は子山、南陸新野の人、幼にして俊邁、群書を博覽し、尤も春秋左氏傳に善く、身の長八尺、腰帶十圍、容止頎然として人に過ぐ。はじめ、徐陵とともに東宮に出入し、詩文ともに綺艷、世に號して徐庾體といふ。信、後に流寓して、北に赴くや、周人の重んずるところとなり、開府儀同三司に擢てらる。陳氏の起るや、流離の人、皆赦して歸さる。周の孝閔帝、文學を好み、信と王褒とを留めて遣らず。大象の初、疾を以て職を辭し、尋いで卒す。信、位望通顯なりと雖も、常に鄉關の思あり、かつて哀江南賦を作り、以て意を致す、淒怨にして悲壯なり。王褒は略ぼ相似たるも、遂に及ばず。

信は、河朔文學をして重からしめしものなり。否、此の如く言ふは、其志に非ずと雖も、河朔の景象に感化されしは、固より爭ふべからず。公平に云へば、必ずしも、河朔江淮の別を論せず、六朝の大詞宗たるべきなり。その作、はじめ、齊梁の宮體に沿へども、後には、乍ち一變し、蒼凉蕭瑟の一體を以て、其勝を擅にせり。杜甫が庾信文章老更成といひ、清新庾開府といひしもの、決して過褒に非ず。杜甫の信に於ける、猶ほ李白の

謝朓に於けるが如し。胡應麟乃ち說を爲して曰く、供奉の宣城に僻するや、明艶合ふを以てなり。工部の開府に僻するや、沈實合ふを以てなり」と。凡そ陳隋間の詩人、だゞ名句を得むと欲するのみ、而して、信や、ひとり琢句の中に於て、復た淸氣に饒なり、故に能く流俗の中に拔出す、まことに軒鶴鷄群に立つものといふべし。史氏、その淫放輕險、却つて北方の文章を累せしをいふ、誤れりといふべし。

その詩、頗る淸麗あり、謝朓に似て、更に僞逸、詠懷最も觀べく、樂府又莊重なり。沈德潛かつて信の名句を列擧して曰く、步虛詞の漢帝看桃核、齊侯問棗花、山池の荷風驚浴鳥、橋影聚行魚、和宇文內史の樹宿含櫻鳥、花留釀蜜蜂、匍行の塞迴翻榆葉、關寒落雁毛、法筵の佛影胡人記、經文漢語翻、酬薛文學の羊腸連九阪、熊耳對雙峰、和人の早雷驚蟄戶、流雪長河源、園庭の樵隱恒同路、人禽或對巢、淸晨臨流の猿嘯風逾急、鷄鳴潮欲來、冬狩の鷙雉逐鷹飛、騰猿看箭轉、和人の絡緯無機織、流螢帶火寒、咏畫屛の石險松橫植、巖懸澗竪流及び、愛靜魚爭樂、依人鳥入懷、夢入堂內の日光釵影動、窓影鏡花搖の如き、少陵の謂ゆる淸新なるものか、と。張溥曰く、唐人の文章、徐庾を去ること、最も近く、形を窮め、態を寫すや、摸範これより出づ、と。鐵案山の如く、復た搖動すべからず。

(七) 隋の詩人

六朝轉瞬の興亡、陳滅して隋興り、隋倒れて唐起る。隋に於ける唯一の詩人を煬帝となす。帝亦た荒淫驕奢を以て國を亡ぼせしと雖も、之を陳の後主に比すれば、幾分豪健の處あり、その詩に見はるもの、又かくの如し。帝、はじめ藝文を講習し、專ら梁陳の餘風を慕ひしが、位に即くに及び、其體を一變し、專ら雅頌を存せむと欲す。然れども、復古の功、未だ全からず、その格、僅に成つて、精萃未だ備らず。飮馬長城窟、白馬篇の如き、その集中に在りては、ともに傑作を推すに足るべく、當時摸範とせしところなり。その七言は、全く唐律と異なるなく、沈宋の體、この時すでに成るに近し。

帝の外に楊素あり、武人にして、且つ奸雄の資あるに拘はらず、その詩格、頗る淸遠、世外の高士に似て、頗る異とすべく、山齋獨坐の如き、その一例なり。次に盧思道、薛道衡、李德林、牛奇章等、その集を傳ふれども、殆んど言ふに足らず。

六朝の詩、頹靡甚しきこと、かくの如く、初唐の四傑、王楊盧駱、亦た其風を傳へて冶麗の習に沿ひ、沈宋二人、之に附和す。後に陳子昂出でゝ、その格、漸く蒼古、張九齡、之に次いで、その詞、更に沈雄、而して、李杜の二大詩聖は出てぬ。

(八) 古文の命脈

魏晋の間、なほ二三文章の家あり。梁齊以下は、駢儷の陋習、正に其極に達し、全く觀るに足るものなし。而して、古文一縷の命脈は、却つて北方に存せり。周主、宇文泰、性朴素を好み、丞相たりし時、干戈騷擾の中に在りて、獨り善く儒術を尊崇したりしが、位に即くに及び時文の綺麗浮華を患ひ、之を革めむと欲し、蘇綽をして、書の大誥に倣うて詔勅を作らしめ、畢く群臣を會し、文筆皆之に依るべきを命じたり。その文、太だ森嚴、その語、亦た一々時弊に中る、疑もなく、四六は、こゝに一頓の衝挫を受けぬ。ひとり惜むらくは、周祚久しからず、因つて、全く古に復する能はざりしや。隋の周に代りて、南北を混一するや、李鍔といふ者あり、上書して曰く、江左齊梁、事弊彌よ甚しく、貴賤賢愚、唯だ吟詠を努め、遂に復た理を遺し、異を存し、虚を尋ね、微を逐ひ、一韵の奇を競ひ、一字の巧を爭ひ、連篇累牘、月露の形を出てず、積案盈箱、唯だ是れ風雲の狀、世俗此を以て、相高くすと。四六の弊を攻むるもの、漸く多きを見るべし。

梁より隋に至るの間、姚察最も文名あり。その梁陳二史を撰するや、散文單行を用ひ、明畿詳晰、頗る觀るべし。その子思廉、善く父の業を紹述せしを以て、唐初に名あり。

(九) 六朝の雜著

六朝には、思索家なし。故に諸子者流に、劉邵の人物志、傅玄の傅子、葛洪の抱朴子、孝元帝の金樓子、僧祐の宏明集等ありと雖も、漢代の諸家に比して、更に下れり。謂ゆる小說としては、拾遺記、述異記、續齊諧記、搜神記、同續、還冤記等あれども、佛老の盛行に伴うて生じたる迷信に本づき、妖跡怪談を集錄せしものにして、荒誕殊に甚しく、文辭亦た瑣碎、遂に詳論を値せず。その他、求法高僧輩の紀行の如き、歷史地理上、至大の價値あれども、文學としては、觀るに足らず。

天然を描寫するもの、詩人として陶謝あり、之に對する文士、未だ出てず。酈道元の水經注、聊か觀るべし。水經は元と地理書の一種にして、支那河流の狀勢を記す。その作者、或は桑欽といへども、實は詳ならず。之に注せしもの、始め郭璞あれども、今傳らず。道元の注、亦た散佚せしと雖も、淸朝の學者、力を盡して整理せしにより、今幸に存す。その文字甚だ流暢にして、明媚愛すべく、且つ曲折自在、本文を離れて優に翫賞を値す。若し夫れ綠水平潭、淸潔澄深、俯見游魚、類若乘空といふ如に至りては、柳宗元小石潭記の粉本となりしものにして、亦た以て、豹の一斑を窺ふに足るべし。

（一〇）批評文學の興起

こゝに六朝文學を終るに臨み、特筆大書すべきことあり、批評文學の興起、即ち是にして、能く當代を重からしめ、文學上に又新生面を開きし功、決して、沒すべからず。そも支那に於ける文藝批判の發達は、むしろ頗る遲々たりき。先秦時代の諸子百家、互に辨難攻擊を逞うし、甲論乙駁、結んで解けず、その間、荀子の非十二子、莊子の天下篇等ありと雖も、單に學風上の批判に止まり、毫も文藝上の事に關せず。次いで、漢代詞人多く輩出するや、互に評隲を爲せしことあり、司馬遷の史記、論贊中、往々詞人の文藻を評價し、揚雄、劉向、時に指を此に染め、西京雜記の中、時に前漢賦家の個人評を、載す。後漢に至りては、班固の漢書及び西都賦の序の如きものを始とし、僅に二三之あるを見るも、なほ言ふに足らず。建安前後、鄴下の文物、一時の盛を極めたる時、人は互に詞藻を以て相重ぜむとす。こゝに於て、魏の文帝の典論は、騷壇の要求を充すべく現はれぬ。これ眞正の意義に於ける批評文學の權輿なり。その後、曹子建に與楊德祖書あり、應瑒に文質論あり、陸機に文賦あり、摯虞に文章流別あり、李充に翰林論あり。その論ずるところ、未だ以て研鑽の典據となすに足らざれども、歷史的價値は、斷じて否定すべからず。梁に至りて、劉勰の文心雕龍あり。古今を商搉し、群籍を苞羅し博攻旁稽盡さゞるなく、眞に至寶となすべし。

こゝに注意すべきは、劉勰その人、かの文選の作者なる昭明太子と極めて親密なる關係あり、東宮舍人として、その左右に奉侍し、頗る寵遇を受けたりといふ事實にして、更に重要なるは、この二人の著書が、ともに文學研究上、必須なる位地を有し、兩々相待て決して離すへからざること是れなり。げにや、秦漢より梁に至るまでの製作を各體の下に配列したる文選と、同じ時代を通じての文體の批判及び修辭論を以て成れる文心雕龍とを併觀するときは、前半期の支那文學は、畧ぼ之を尋繹するを得べく、一は製作を主とし、一は談理を主とし、互に裨補して、始めて完璧を見る。

文心雕龍、篇を分つこと四十九、序、志を合せて五十、卷を分つこと十、その中、一より六に至るまでを上篇となし、七より十に至るまでを下篇となせり。上篇は、彼が自ら綱目明矣といへる如く、主として文體論を以て成り、下篇は毛目顯矣といへる如く、重に修辭論を以て成り、多少體系的なる處、大に推奬すべし。上篇の劈頭、原道の一篇、文章は人間の必然的產物なるを論じ、徵聖は聖を師としてその文辭を學ぶべしと

いひ、宗經は儒家諸經の價値を論じ、正緯は緯書の妄取るに足らずと雖も文章に助あるを論じ、辨騷は楚辭の價値と儒家の經典との異同を論じ、次いで明詩樂府詮賦等、いづれも前代文學の歷史的研究より出て、最も參核に資すべし。之に次いで、下篇に於ては神思の一篇、著作の動機を論じ、體性情采に於て、文學の美的價値とその種類とを論じ、最後に聲律章句麗辭等に及び、修辭學上の法則を論定せり。

その論の正否は、こゝに詳論せず。終に臨て、その文體を考へむに、これ正に六朝の特色たる四六を以て成れるものにして、采を敷き文を擒ふるの妙、典を使ひ詞を措くの巧、綢繆羅織、金を經とし、翠を緯とし、一匹の錦繡、人目を眩せしむ。然れども、彼が四六を用ひしを難ずるは酷なり。その著をして世に行はしめむとせば、勢、この體を要し、且つ自ら四六の大渦中に立つもの、未だ其弊を痛切に感せざればなり。

文選の後塵を逐ふもの、徐陵の玉臺新詠あり。雕龍と步武を接せむとせしもの、鍾嶸の詩品あり。並に前二書に下ること數等なれども、亦た必須の寶典たるを失はず。詩品は、漢魏六朝の詩家百餘人を、上中下の三品に分ち、その傳統と文學的伎倆とを評す。その見、或は穩ならず、その文、時に艱なれども、雕龍と相待つて、其用を爲すべし。

第三期　中世文學

第一　唐代文學

(一)　文學隆盛の理因

有唐の世三百年は、支那に於ける文學極盛時代なり。然れども、依然として、魏晉六朝の餘風を承け、特に律語は前後無比と稱せらる。散文も其間に於て、漸次復古の氣運を見るに至りしと雖も、遂に相及ばず。

何故に、詩は唐に於て、かくの如く盛なりしか。歷代の天子、之を嗜好せしは、その理因の一なれども、更に其大なるものは、詩その者が、一種の採士法となりしに因る。加ふるに、開寶前後、隆昌の世に在りては、兼ねて又名士の玩弄物にして、太平の粧飾品たりき。唐代の文學をして、跛足的發達をなさしめしもの、洵に故ありとなす。而して、五言の一體は、六朝の間、すでに其變を極めたるを以て、七言の新體、一般に行はれ、これも亦た、時代の遞降に從つて、其變を極盡し、仍つて支那律語の鉅觀をなしぬ。

唐代詩の盛なる、實に此の如しと雖も、ひとり、遺憾とすべきは、その發達、唯だ形式

に止まり、內容に於ては、特に刷新を見ざりしこと、是なり。その此に至る所以、漢族の實際的傾向、長く累をなし、文學の獨立的價値を認めざりしに本づくや、言を俟たずと雖も、當時社會狀勢の影響、亦た決して、少しとせず。蓋し六朝の後に唐あるは、なほ戰國の後に漢あると同じく、闔國統一の大勢は、偶ま國民に休息の時期を與へしのみ、開寶前後、國運の盛は、武帝時代と同じく、外は武を四境に輝かし、內は奢を宮掖に盡し、物質的饒富に滿足を求めつゝある間、又精神的生活を爲すの意あらざるなり。四傑沈宋の七言近體は、司馬相如一輩の辭賦と、恰も其揆を一にし、その咏題も、亦た、酷だ相似たり。加ふるに、兩漢より六朝を通じて、儒家が唯一の事業たりし訓詁注疏は、太宗の世、顏師古が繆闕の讎正と孔穎達が義疏の撰定とを以て、終局となし、因つて、儒教は全く凝滯し、佛道二教は、依然として互に上下し、後に宋代理學の勃興を見るまでは、三教並存の結果、人をして、選擇に惑はしめ、之を一般に言へば、未だ信仰を確立せしむるに及ばず、故を以て、詞人文士、亦た見地低く、理想乏しく、その賦するところ、大抵即興の作、遂に詩の位置を高むるに及ばず。然れども、天寶の亂は、漢族千古の運命を轉向せしめし一大事變にして、これより五代の末に至るまで、幾んど二百年間、その亂離の甚しき、又六朝に過ぐ。こゝに於てか、興亡盛衰の感、榮枯消長の思、自ら詩に見はれ、之をして、沈鬱悲壯ならしめ、魚龍百變、幻怪極まらざるの盛觀をなさしめ、さきに漢魏六朝を經て、五言古體の上に及ぼせし同一の變化を、唐の一代三百年に於て、全く成し盡さしめたり。唐詩の百代に冠たる所以、豈に偶然ならむや。

唐の一代を通じて、臺閣の名臣、山野の隱士、咸な詩人ならざるものなく、その典據たる乾隆御撰の全唐詩、全部九百卷、二千三百餘家、四萬八千九百餘首を收錄す。然れども、此書は千年後に成りしものにして、其間に湮滅したるもの、決して少からざりしを疑はず。後世の評家、唐詩を論ずるもの、左の四期を分つを常とす。

(一) 初唐——高祖武德元年より玄宗開元の初に至る、凡そ一百餘年
(二) 盛唐——玄宗開元元年より代宗大曆の初に至る、凡そ五十餘年
(三) 中唐——代宗大曆元年より文宗太和九年に至る、凡そ七十餘年
(四) 晚唐——文宗開成元年より昭宣天祐三年に至る、凡そ八十餘年

盛晚の別の如き、議論なきに非ざれども、要するに、唯だ便宜といはむのみ。この中盛中の二期を以て最盛となし、李杜韓白の四家を出せり。

(二) 近體の創定

五七言の興起は、漢初に在り、而して、魏晉六朝の間、聲律未だ嚴ならず、篇幅亦た拘束なく、その體、頗る古、故に後世之を古體といふ。その後、梁の沈約、一たび、四聲八病の說を出してより、律詩の胎芽、はじめて生じ、その作に係る、八詠の如き、純然たる後世五言律の祖なり、鍾嶸、その浮音多くして、切響少く、漢魏以來、渾雄勁亮の氣、爲に泯滅せしことを慨して、其非を鳴らすに力めたりと雖も、風氣遂に制遏すべからず。陰鏗、何遜、庾信、徐陵、ともに才思を馳騁し、競うて新麗を事とするや、五七言律詩、漸く其體を成すに庶幾し。然れども、猶ほ古詩を作るの餘を以て、偶ま八句の新調をなせしのみにして、未だ別に一格をなすに意あらず。唐の陳杜沈宋輩に至りて、その聲音を研揣し、體勢を穩順し、六朝以前の古詩と、判然分れて別途となり、律體こゝに成る。律とは、聲律を尙ぶの謂、嚴羽が「風雅頌すでに亡び、一變して離騷となり、再變して西漢五言となり、三變して歌行雜體となり、四變して沈宋律詩となる」といひしもの、中れり。

律の短きものは、普通八句中の四句を對句となし、他の四句を散體となすものにして、之を敷張したるものを長律もしくは排律といひ、その句數、毫も限束するところなし。排の字義に就いては、後世議論頗る多けれども、こゝには述べず。蘊つて、今律體の平仄圖式を觀るに、縱橫に音節上の規律あり、支那に於て始めて觀るを得べき最も秀美なる律語なり。蓋し、詩律は雕鏤の餘、巧に過ぐるの嫌なしとせず、之を一概して、詩の律あるは、なほ文の駢儷あるが如く、その流行は、むしろ詩の不振を意味するとはいへ、その中、亦た頗る作用あり。要するに、排律は、律を以て古詩を兼ねたるもの、その至難、言を俟たずと雖も、排奡縱橫、動盪變化の妙實に言說の外に在り。唯だ惜むべきは、唐の詩を以て士を取るや、之を以て科場の試式に中て、謂ゆる試律なるものの起つてより、その體、後世の八股時文と、一の擇ぶなく、腐爛の極、長しへに完全なる發達をなさざりき。おもふに、今日謂ゆる漢詩の生命は、この體に在るや必せりと雖も、才の難き、未だ容易に之を望むべからざるを奈せむ。

唐初創制の詩形、律の外に、絕即ち絕句あり。之を合せて近體といひ、以て古體と分つ。絕の聲調は、律と同じく、唯だ四句を以て、之を遣るのみ。普通は、散語を主とすれども、或は前後二句、もしくは全句、對語を以て成れる者あり。こゝに於て、律を截ちしに由つて出て、絕は即ち截の義なりといふものあり。然れども、前にも云へる如く、五言

絶句は、漢魏小樂府の五言四句に本づきしものにして、最も人口に膾炙せる「鵲砧今何在、山上復有山、何當大刀頭、破鏡飛上天」の如き、其祖となすべきものなり。この類の作、はじめ、皆隱語を用ひ、子夜歌、閨前溪、讀曲の諸歌辭、皆然らざるなく、齊梁以後、淫哇風を成せしとき、蕩子浪婦が信口道情の具となり、因つて大に行はれ、その聲律を論ずるや、遂に絶句となる。されば、律は古詩の變にして、絶は樂府の變なり。五絶の源すでに古く、七絶亦た自ら其間に出づ。大業の末年、煬帝の巡遊度なきを刺りしと傳ふる「楊柳青青著地垂、楊花漫漫攪天飛、柳條折盡花飛盡、借問行人歸不歸」の一首の如き、宛然たる盛唐人の手筆、絶句の創制、むしろ律の前に在るを知るべし。

律は科試として行はれしが、絶句は樂府として、決して之に遜らざりき。王漁洋曰く、開元天寶已來、宮掖傳ふところ、梨園弟子歌ふところ、邊將進むところ、旗亭唱ふるところの絶句のみ。故に王之渙の黃河遠上、王昌齡の昭陽日影の句、今に至つて之を艶唱す。而して、王右丞の渭城朝雨、流傳尤も廣く、好事者、譜して陽關三疊となすに至る。唐三百年、絶句を以て場を擅にす、即ち唐三百年の樂府なりと。之を一概して、唐詩は體、古今を兼ね、至大の進捗をなせしなりき。

(三) 初唐の四傑

唐初の詩人は、なほ六朝の末、纖巧の習氣を脱する能はず、宛轉たる風調、固より稱すべしと雖も、氣格未だ高からず。ひとり、魏徵が開國佐命の功臣を以て、述懷の一首を出したるは、すでに唐詩の源頭に立つものにして、當時に在つては、まことに異數を推すべく、太宗亦た其集を傳ふ。同時に虞世南、褚遂良、王績等、時に所作あり然れども、之を一概すれば、希徵玄澹の音、未だ昭代の雅頌となすに足らず。次は謂ゆる四傑にして、王勃、楊炯、盧昭鄰、駱賓王、即ち是れ。ともに高宗、中宗の朝に當り、なほ舊套を脱せざるも、婉美宏麗、往々にして規度を見る。

王勃は、滕王閣の序「潦水盡而寒潭清、煙光凝而暮山紫」「落霞與孤鶩齊飛、秋水共長天一色」の名句を以て併せ傳へらるゝ、天才にして、字は子安、隋の文中子の孫、絳州の人、麟德の初、對策して朝散郎を授けらる、年未だ冠に及ばざるなり。沛王その名を聞き、署府の修撰となし、その後、鬪鷄の檄を作りしを以て、高宗の怒に觸れ、斥けられて府を出て、劍南に客たり。次いで再び官に仕へて、又罪に當り、父福時、坐して交趾令に貶せらる。勃、往いて之を省せむとし、その途、鍾陵を經て、閣序の撰あり。尋いで、海を渡る

や、溺れて死す。時に年僅に二十九。集三十卷、又周易發揮及び次論等あり。推步曆算、論ずるところ、少からずといふ。聰警想ふべきなり。楊炯は華陰の人、少にして神童に擧げられ弘文館學士となり。武后の初、梓州參軍に貶せられ、盈川の令に終る。政を爲す殘酷、人に指斥せらる。集三十卷。昭鄰、字は昇之、范陽の人、鄧王府典籤を授けらる。後新都尉に拜せしが、風疾を得、太白山に入りて藥を餌し、疾愈よ甚しきに及び、具茨山に徙り、その終に癒えざるや、親屬と訣れ、潁水に投じて死せり。著はすところ、幽憂子三卷、集二十卷。駱賓王は、義烏の人、少にして善く文を屬し、帝京篇を作るや、當時以て絶唱となす。然れども、落魄行なく、好んで博徒と遊ぶ。高宗の末、長安主簿となりしが、贓に坐して臨海丞に謫せられ、怏々志を失ひ、官を棄てゝ去り、その後、徐敬業兵を擧ぐるに及び、署して附屬となし、檄を天下に傳へしむ。武后之を讀み、「一抔之土未乾、六尺之孤安在」といふに至り、瞿然として曰く、此人を失ふは、これ宰相の過なり、と。敬業の敗るゝや、賓王亡命して終るところを知らず、集十卷。後宋之問、之に靈隱寺に遇ひ、樓觀滄海日門對浙江潮の一聯を請ひ得たりといふ。

四傑互に面目を異にす、王の才あつて數奇なる、楊の俗氣あつて虛傲なる、盧が幽憂の情殷なる、駱が功名の心燃るが如き、各其性行を異にし、境遇を異にし、從つて、人格の反映たる詩に於て、姿趣を異にせり。四傑の當時、裴行儉といふ者あり、鑒識に長ず、かつて曰く、士の遠を致すは、器識を先にし、文藝を後にす。勃等文才あるも浮淺なり、豈に爵祿の器ならむや。楊子やゝ沈靜、應に令長に至るべし、餘は終を全うするを得ば幸のみ、と。この豫言は、不幸にして適中せり。然れども、是れ世路經歷の上に就いて云へる者にして、詩人の大官に至らざる、古來自ら然り。若し夫れ、四傑人物の高下、文章の價値に至りては、全く之と相反せり。楊炯は、四人合稱せらるゝに慊らず、「我、盧の前に在るを愧ぢ、王の後に居るを耻づ」と云ひ、後に崔融、特に此言を稱し、炯の文思、懸河注水の如く、之を酌めども竭ざるを云ふと雖も、實は四傑の最下位に在るべき者なり。公平に之を論ずれば、才思の清奇は王勃を推べく、人物の純潔は、盧昭鄰を擧ぐべく、他の二人は、ともに其次に在り。

杜甫かつて曰く、王楊盧駱當時體輕薄爲文哂未休、爾曹身與名俱滅、不廢江河萬古流、と。然り、四傑は依然四傑なり。初唐の騷壇、固より之に敵するものあらず。陸時雍、かつて之を評して曰く、王勃は高華、楊炯は雄厚、昭鄰は清藻、賓王は坦易、子安それ最も

傑か、調、初唐に入り、時に錦色を帶ぶ、と。王盧の作、ともに佳、而して、楊駱二人、常に一種慣用の癖あり、之を以て、長しへに誚譏を免るゝ能はず。楊は好んで古人の姓名を連用せしを以て點鬼簿と稱せられ、駱は好んで數字を以て對となせしが故に、算博士と呼ばる。詩家襲用の弊、二人その俑を作りしものなり。

四傑世を同うせしを以て、大體の規度、頗る近く、その作中、互に酷似するもの亦た少からず。然れども、同一題を詠じ、各自性格の異と才思の大小とを表顯したるは、最も注意すべきなり。盧の長安古意と駱の帝京篇と、ともに是れ、帝都を賦せしものにして、七言を以て之を出し、兩漢賦體を用ひて、京師の壯麗を鋪陳する舊習に沿ひしものなり。長安古意の結、「節物風光不相待、桑田碧海須臾改、昔時金階白玉堂、只今惟見青松在、寂寂寥寥揚子居、年年歲歲一床書、獨有南山桂花發、飛來飛去襲人裾」といへる、は、盧が厭世的感想を最も明晰に表出したるものにして、帝京篇の末、「已矣哉、歸去來、馬卿辭蜀多文藻、揚雄仕漢乏良媒、三冬自矜誠足用、十年不調幾還廻、汲黯薪瀚逾積、孫弘閣未開、誰惜長沙傅、獨負洛陽才」といへるは、駱の功名的野心を描き出せしものに外ならず、而かも盧は意を重んじ、駱は詞を重んず、詩品の高下、亦た容易に判知すべし。

(四) 陳子昂

六朝艷冶の習、四傑なほ之に沿ふ。若し夫れ、時習を一掃し、直に建安の體に接せしめ、唐詩の皷吹に與つて力あるものを擧ぐれば、陳子昂、蓋し第一たるべし。

子昂は、梓州射洪の人、家世豪富、年十八にして、未だ書を讀まず、他日感悔して學に向ひ、尤も善く文を屬し、はじめ、感遇詩三十首を爲るや、京兆司功王適、之を奇とし、由つて名を知られて進士に擧げらる。武后の時、麟臺正字に拜し、數ば上書し、大に稱せらる。後、武攸宜の契丹を討つや、その管記となりしも、謀用ひられざるを以て、官を解いて歸る。縣令段簡、宿怨を以て、之を獄に投じ、遂に憂憤して死す。年四十三。子昂、編躁にして、威儀なきも、文辭宏麗、甚だ當時の重んずるところとなる。集十卷、今に傳ふ。

その集中、最も傑作を推すべきは、感遇の詩三十八首にして、殆んど阮籍の咏懷に次ぎ、優にその力量を見るべし。子昂かつて曰く、文章の道、弊るゝこと五百年、漢魏の風骨、晉宋傳ふるなし、然り而して、文獻徵すべきものあり、僕かつて暇あるとき、齊梁間の詩を見るに、彩麗繁を競ひ、而かも興寄すべて絕ゆ、每に永嘆して古人を思ふ。ひとり恐る、逶迤頹靡、風雅作らざるを、これが故に、常に耿耿たるなり、と。亦た以てその

抱負を見るに足る。故に王士禎曰く、魏晉の風骨を奪ひ、梁陳の俳優を變ずるは、陳伯玉、最も大。張九齡、之に繼ぎ、李太白、亦た之に繼ぐ、と。沈德潛、亦た此言あり。その作、簡勁峭直、氣魄骨力、ともに高く、はるかに、四傑の上に出づ。

子昂は、ひとり詩に於て重きを爲すのみならず、その文を作るや、駢儷に染まず、善く古文一脈の命を保ち、遙かに韓柳二家の前驅をなせり。韓愈は、國朝盛文章、子昂始高蹈といひ、柳宗元は、張說は著述に工に、張九齡は比興を善くす、兼備するは子昂のみ、といへり。馬端臨、その文、偶儷卑弱の體を脱せざるをいひ、之を抑ゆるは、誤れり。但し表序は猶ほ時習に沿ひ、論事奏疏の類、疎樸古に近く、體に依つて、別なき能はず。而して、子昂が武氏に媚付し、大周受命頌等を撰し、又明堂大學を興さむを請ひし如き後人の譏斥を免れず。故に王士禎、かつて其詩を激賞せしに拘らず、文に就いては、乃ち曰く、この集の傳、特に詞彩を以て珍とせらる。たとへば、蕩姫佚女、色藝を以て一時に冠たるも、禮法を以て繩すべからざるが如し、と。然れども、その手腕と聲價とは、斷じて、復た爭ふべからず。

(五) 沈宋二家

沈佺期、字は雲卿、相州內黃の人。善く文を屬し、尤も七言の作に長ず。進士の第に擢んでられ、長安中、通事舍人に累遷し、考功郎給事中に轉ぜしも、張易之に交るに坐して、驩州に流さる。後、台州錄事參軍に遷り、神龍中、召し見て、起居郎修文館直學士に拜し、中書舍人太子少參事を歷、開元の初に卒す。かつて宴に侍するや、帝、學士等に詔して、回波を舞はしむ。佺期、弄辭を以て、帝を悅ばしめ、詔して、牙緋を賜ふ。同時に宋之問あり、佺期と名を齊うし、且つ律體を拗めしを以て、世に沈宋と稱す。

之問、字は延清、一名は少連、汾州の人、上元二年の進士。偉貌辯給、甫めて冠するや、武后召して楊炯と習藝館に分直せしめ、尙方監丞に累轉す。后、龍門に遊び、從臣に詔して、詩を賦せしむ。左史東方虬の詩、先づ成る。后、錦袍を賜ふ。之問俄頃にして獻ず、后之を覽て嗟賞し、更に袍を奪つて賜ふ。後、北門學士を求めしも、齒疾あるを以て許されず。遂に明河篇を作る。その末、明河可望不可親の句あり。時に張易之、昵寵甚し。之問心を傾けて、之に媚附し、爲に溺器を奉ずるに至る。易之敗るゝに及び、瀧州に貶せられしが、逃れ歸つて、張仲之の家に隱れ、仲之が武三思を殺さむを謀るや、乃ち變を告げ、

因つて罪を贖ひ、鴻臚簿に擢てられ、考功郎に遷され、後、又太平公主に媚びて、知舉せられ、賄賂狼藉、越州長史に下遷す。剡溪の山水を窮歷し、酒を置いて詩を賦し、日に遊宴し、賓客雜遝。睿宗即位、その悛悟の心なきを以て、欽州に流し、御史劾奏するや、遂に死を賜ふ。二人皆集あり、世に行はる。

沈宋二人殆んど唾すべき小人物たるに至りては、人をして覺えず嗟嘆せしむ。才子傳、記するところに據れば、宋之問、かつて其婿劉希夷が「年年歲歲花相似、歲歲年年人不同」の句を見、之を乞うて得ず、乃ち土囊を以て壓殺したりといふ。然れども、之問の才は、劉に比して、むしろ優れるが如く、沈德潛、之を辨じて、之問の品、下流に居るに因つて、惡を以て之に歸せしなりといへり。之を孰れにするも、完人に非ざること、言を俟たず。然れども、詩に至りては別才あり。佺期、かつて詩を以て張說に贈るや、說曰く、沈三兄の詩清麗、須らく讓つて第一に居るべきなり、と。徐堅又之問の作を評し、良全美玉の如く、施すところとして可ならざるなきをいへり。唐書本傳又曰く、魏の建安の後、江左に訖るまで、詩律屢ば變じ、沈約、庾信に至り音韵を以て相婉附し、屬對精密、之問佺期に及びて、又靡麗を加へ、聲病を回忌し、句を約し篇に準し、錦繡文を成すが如く、學者之を宗とし號して沈宋といふ。語に曰く、蘇李前に在り、沈宋肩を比す、と。その當時に聲望ありしこと、以て概見すべきなり。

予をして忌憚なく、言はしめば、沈宋二人の性格、すでに上に述べたるが如く、その高潔の想に乏きは、理固より當に然るべきところ、加ふるに、字句聲律に局促せしを以て、雄渾獨出の氣象、復た求むべからず。然れども、六朝以來、因襲的構想の外、唐詩の新聲を唱へしは、文學史上、不朽の名譽を荷ふものといふべく、その功、決して沒すべからず。之を一概すれば、唐三百年の風氣、陳子昂之を始め、聲調は沈宋之を成す。前者は內容に關し、後者は形式に關すと雖も、必ずしも、亦た輕重の別を設くべからず。二人の友に杜審言あり、襄陽の人、隰城尉となり、才高きを恃んで世に傲るを以て、嫉まれ、神龍の初、張易之に通ずるに坐し、一たび絳州に流されしが、後、入つて修文館直學士となる。その人物詞藻、亦た沈宋と頗る相似たり。詩聖杜甫は、其孫にして、はるかに其上に出づ。

(六) 初唐の諸家

初唐は、纔に風氣を開きしのみなれども、如上諸人の外、なほ傳ふべきもの、頗る多し。劉希夷は、公子行・白頭翁を以て、今に世に知らる。字は庭芝、汝州の人、少にして文名あり、好んで宮體の詩を爲り、詞旨悲苦。その白頭翁を作るや、一聯に云ふ、今年花落顏色改、明年花開復誰在、と。すでにして、自ら悔ゐて曰く、この詩讖なり、石崇の白首同所歸と何ぞ異ならむ、と。乃ち更に一聯を作る、云ふ、年年歲歲花相似、歲歲年年人不同、と。すでにして又嘆じて曰く、この句復た仍ほ向きの讖に似たり、然れども、死生命あり、豈に復た此に由らむや、と。即ち兩つながら之を存す。詩成るや、未だ周歲ならず、奸人の殺すところとなる。或は宋之問、之を害すといふこと、前に述べたるが如し。

李嶠、前には王勃・楊烱と接し、中ごろ崔融・蘇味道と名を齊うし、晩に諸人盡く沒するや、文章宿老を以て目せられ、學者法を取る。武后の朝、鳳閣鸞臺平章事となり、罪を得て盧州に卒す。後に玄宗特に蜀に幸せむとするや、花萼樓に登り、樓前水調を善くするものをして、歌を奏せしむ。歌に曰く、山川滿目淚沾衣、富貴榮華能幾時、不見只今汾水上、惟有年年秋雁飛、と。帝慘愴、時を移し、侍者を顧みて曰く、誰か此を作る。對へて曰く、故の宰相李嶠の詞なり、と。帝曰く、眞才子なり、と。曲を終るを待たずして去る。これ嶠が汾陰行の結にして、集中第一の鉅製たり。

この他、蘇味道・郭振・崔融・李適・蘇頲・張說・孫逖等、その作、頗る多し。張九齡、一代の名相を以て、長く位に在るを得ず。その作、感遇十二首、詩人比興の義に本づき、微旨幽婉、行品太だ醇。阮藉・陳子昂に嗣ぐ。李邕は、碑版を以て名あり、その詩、未だ至らずと雖も、亦た世に稱せられ、王翰は蒲萄美酒の一絕を以て、千古に傳ふ。

初盛兩唐の間に、吳中の四士あり。その中、賀知章は、狂客の稱あり、張旭は、草聖の名あれども、詩に於ては、未だ重を爲さず。包佶亦た然り。ひとり、張若虛に至りては、春江花月夜の一首を以て、不朽に足る。そも春江花月夜は、陳の後主が荒淫の日、孔範・江總等、諸狎客と俱に唱和せし樂府の曲名にして、特に艶麗の稱あり。若虛之を假りて、題となし、專ら題中五字の義を演繹して、三十六句の長篇となす。通篇蟬聯、流暢圓美、その千回萬轉、變化極なくして、到底題意に歸着せるは、たとへば、龍の珠を爭ふ如く、雲を穿ち、霧に入り、或は正、或は側、而して、龍の睛と龍の爪とは、決して珠を離れざるが如く、匣劍帷燈、陸離廻映、その値、豈に趙氏の璧のみならむや。

(七) 李白

唐の開元天寶は、玄宗の治、正に極り、又衰替に變ぜむとする時にして、歴史は、こゝに一大轉向期を爲せり。而して、唐詩は、太平の澤に煦濡せられ、俄然隆興して、その極點に到達せり。李杜二人、即ち是なり。

李白、字は太白、隴西成紀の人、或は曰く蜀の人、或は曰く山東の人。少にして、逸才あり、志氣宏放、飄然として超世の心あり。はじめ岷山に隱る。益州長史蘇頲、見て之を異として、曰く、この子英特、相如に比すべし、と。天寶の初、長安に至りて、賀知章を見る。知章その文を見、嘆じて曰く、子は謫仙人なり、と。玄宗に言ひ、金鑾殿に召見して、頌一篇を奏せしむ。帝、食を賜ひ、親ら調羹を爲す。詔あり翰林に供奉す。白、なほ酒徒と市に飲む。一日、帝、沈香亭子に坐し、意感ずるところあり、白を得て、樂章を爲らしめむと欲し、召して入る。而して、白、すでに醉ふ。左右水を以て、面に注ぎ、稍や解くるや、筆を援つて文を成す、婉麗精切。帝、その才を愛し、數ば宴して見る。白、常に帝に侍し、醉うて高力士をして靴を脱せしむ。力士素より貴之を恥ぢ、其詩を摘して、楊貴妃を激す。帝、白を官にせむと欲す、妃輙ち沮んで止む。白、自ら親近に容れられざるを知り、懇に山に歸らむことを求む。帝、金を賜うて放ち還へす。乃ち江湖に浪跡し、終日沈飲。安祿山の變永王璘、江陵に都督となり、辟して、僚佐となす。すでにして、璘、亂を謀り、兵敗るゝや、白坐して夜郎に長流す。赦に會して、還るを得たり。族人陽冰、當塗令たり、白往いて之に依る。代宗即位、左拾遺を以て召す、白すでに卒す。集三十卷、今に傳ふ。

白の產地は、詳ならずと雖も、少より、蜀に在り、其地の感化を受けしは、殆んど爭ふべからず。その人と爲り、あくまで南人的性格を有し、熱血に富み、功名の志、老に至つて猶ほ燃ゆるが如く、倜儻にして縱橫を喜び、任俠を爲し、かつて數人を手刃し、財を輕んじ、施を重んじ、產業を事とせず、さながら戰國時代の人物の如し。故を以て、魯仲連、張良の人と爲りを慕ふと傳ふ。かつて、書を安州の裴長史に上つて曰く、五歲にして六甲を誦し、十歲にして百家を觀、經を橫へ、籍に枕し、制作倦まず、今に至るまで三十春、以爲へらく、士生るれば、桑弧蓬矢、四方を射る、故に大丈夫必ず四方の志あり、と。乃ち劍に杖いて、國を去り、親に辭して遠く遊び、南は蒼梧を極め、東は溟海に接す、と。その晩年、永王璘の幕下に參し、爲に罪を得て、夜郎に流されしも、亦た此念の爲に誤られしものなり。然れども、到底その志を遂ぐる能はざるを見るや、去つて、道家の說

を尋ね、強ゐて自ら功名心を抑へ、その性をして酒落豁達ならしめ、浮世の苦艱を忘れむと欲せり。前者即ち功名的野心と、後者即ち出世間的願望とは、氷炭も啻ならざるものにして、その一身は、實に矛盾の凝固體なり、こゝに於て、胸中の煩悶を拂はむが爲に、酒を縱にし、杜甫をして、李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙といふに至らしむ、その一生を通じて、常に此の如きのみ。

白や、一片の仙骨、その性豪雋、純然たる氣の人なり。而して、其才實に天授、功名の心、急なるの時、或は家國興亡の感を述べしことあれども、その詠ずるところは、多く天然に在り、風月草木に在り、神仙虛無に在り、故に氣韻を以て勝り、縱橫至らざるところなく、而かも期せずして法に協ひ、森嚴犯すべからざる規度あり。趙甌北、かつて之を評して曰く、詩の及ぶべからざるところ、神識超邁に在り、飄然として來り、忽然として去り、雕章琢句に屑屑たらず、亦た鏤心刻骨に勞勞たらず、自ら天馬空を行いて羈勒すべからざるの趣あり。若し、その沈刻を論ずれば、杜に如かず、雄驚は亦た韓に如かず、然れども杜韓を以て之に比較すれば、一は力を用ひて痕迹を免れず、一は力を用ひずして觸手春を生ず、これ仙と人との別なり、と。

その詩、すでに氣韻を主とす、故に意を對偶等に用ひず、近體よりも古體に於て其長を擅にせり。樂府は、最も得意とするところにして、集中凡そ百五十首の多きに上る。王世貞曰く、太白の古樂府は、杳冥悄怳、縱橫變化、才人の妙を極む、然れども、自ら太白の樂府なり、と。遠別離、蜀道難、梁甫吟、烏夜啼、烏棲曲、將進酒、襄陽曲、鳴皐歌等、最も其妙を見る。五古は、古風五十九首を以て第一となし、阮籍の咏懷、陳子昂の感遇と正に其科を同うし、才に矜らず、氣を使はず、風格俊上と稱す。次に七古は、憶舊遊、寄譙郡元參軍の類を以て冠冕となし、神氣自ら暢びて、情文並びに高く、沈德潛が太白の七言古、想、天外より落ち、局自ら變生す、大江風なく波浪自ら湧き、白雲空に浮び風に從つて變滅す、これ殆んど天授、人の及ぶべきに非ずといへるもの、固より中れり。次に律詩は、その數、極めて少く、五律七十餘首、七律十首に過ぎざれども、自ら工麗にして、その中、一種英爽の氣を含むところ、最も及び難しと爲す。若し夫れ、絕句に至りては、實にその擅場を推すべく、眼前の景、口頭の語、而かも絃外の音、人をして神遠からしむ、要するに、李白の詩に於ける、猶ほ莊周の文に於けるが如く、古今稀に見る天才の作品なり。他の賦及び文に於て、亦た間ま觀るべきものあり。

(八) 杜甫

太白の星精と影を連ね當時の詩界に輝映せしものを杜甫となす。字は子美、審言の孫、襄陽の人なり。天寶の初、進士に應じて第せず。後、三大禮賦を獻ずるや、玄宗これを奇とし、召して文章を試み、京兆府兵曹參軍を授く。安祿山、京師を陷れ、肅宗位に靈武に即くや、甫、賊中より遯れて、行在に赴き、左拾遺に拜せられしが、房琯を論救せしを以て、出されて華州司戸參軍となる。關輔饑亂、同州同谷縣に寓居し、身自ら薪を負ひ、粮を采るも、餔糊給せず。これに久うして、召して、京兆府功曹に補せられしも、道阻して赴かず。嚴武の成都に鎮するや、奏して、參謀檢校工部員外郎となし、緋を賜ふ。武、甫と世舊、待遇甚だ厚し。乃ち成都浣花里に於て、竹を種え、樹を植え、江に枕んで廬を結び、酒を縱にして、其中に嘯歌す。武の卒するや、甫依るところなく、乃ち東蜀に之き、高適に就かむとす。すでに至れば、適卒し、是歲蜀帥相攻殺し、其地大に擾る。甫、家を携へて、亂を荆楚に避け、扁舟峽を下り、未だ舟を維がず、江陵亦た亂るゝや、乃ち湘流に泝沿し、衡山に遊び、耒陽に寓居して卒す。年五十九。元和中、偃師の首陽山に歸葬す。その集、詩文合せて六十卷あり。杜甫の人物は、全く李白と同じからず。北人的にして世

間的、情に於て極めて厚く、一飯君を忘れざる忠誠は、世上稀に見るところ。天寶以後、諸方に流寓し、その間、君を思ひ國を憂ひ、偏狹躁急、遂に其性を爲すに至り、常に不平を絶えず、慷慨淋漓、時事を悲み、兼ねて自己の不遇を哭す。故を以て、其作は詩史と呼ばれ、當時紛亂せる社會內面の事情を審かにするを得べし。

杜甫は天才に非ず、その詩は、專ら思力を以て得たるものなり。趙甌北曰く、その眞本領は、なほ少陵語中、「語不驚人死不休」の一句に在り、蓋しその思力沈厚、他人設いて七八分に到るに過ぎざるもの、少陵必ず設いて十分に至り、甚しきは十二三分に至れるものあり。その筆力の豪勁、又以てその才思の至るところに副ふに足る。故に深人淺語なし、と。要するに、經營慘澹、千錘萬鍊の後に、成れるものにして句法、字法、章法、篇法に於て、あらゆる變化を曲盡し、且つすべての委趣を描出せしに因り、古今の詩を集めて大成せしものと呼ばる。然れども、その當行本色は、沈鬱雄奇に在り。登樓の一律、花近高樓傷客心の如き、すでに豹の一斑を知るに足るべし。

試に各體に關する沈氏の評語を擧げ、以て私見を述ぶるに代へむ。その五古は、長篇、意本と連屬す、而かも學問博くして力量大、轉接痕なく、端倪を測るなく、轉た連屬

せざるに似たるもの、千古以來、渠の獨歩に讓る」といはれ、その七古は「建章の宮、千門萬戸の如く、鉅鹿の戰、諸侯皆壁上より觀、膝行して前み、敢て仰視せざるが如く、大海の水、長風波を皷し、泥沙を擧げて、怪物を舞はしめ、靈鼉畢く集るが如く、盛唐諸家に列して、獨り大宗と稱す」といはれ、五律は「杜詩近體、氣局濶大、事を使うて曲切、人の及ぶべからざるところ、尤も錯綜意に任かし、變化を嚴密の中に寓するに在り。これ千古を凌轢するに足る」といはれ、次に七律は、最も得意とするところにして、杜の七言律、及ぶべからざるもの四あり、學の博きなり、才の大なるなり、氣の盛なるなり、格の變ずるなり、五色藻繢、八音和鳴、後人如何か髣髴せむ」といはる。ひとり絶句の一體、たとひ之を辯護する者なきに非ずとするも、到底粗率の誚を免れず、之を李白に比すれば、殆んど后婢の別あり。括言すれば、古に於ては、李杜二人ともに長じ、近體に於ては、杜の律、李の絶、人各能あり、不能あり、終に之を兼ぬる能はず。之を一概して、境地多變、趣致極まらず、これ即ち後人の典型となりし所以、韓白諸家の如き、皆その後塵を步するものに外ならざるなり。

之を其集に見るに、一首として不可なるものなしと雖も、五言には、赴奉先北征、七

古には洗兵馬、七律には秋興、諸將、詠懷古蹟等、最もその本領を見るべし。

李杜の二家、偶ま時を同うし、訂交傾蓋、互に深く相許し、而かも、その性行、その思想、その詞章を異にしたるは、亦た一奇となすに足るべし。李は仙の如く、杜は聖の如く、彼は出間的にして、此は世間的、此は理想派にして、此は實際派、彼は道教の感化を受け、此は決して儒教の見地を離れず、彼は氣を以て勝り、此は情に於て篤く、彼は一氣呵成にして、此は苦心經營、彼は自然の間に放吟し、此は時事に感慨す。彼は時に樂天なれども、此は常に悲觀し、彼は放縱にして、彼は狹窄。故に彼は縹緲空靈の趣を以て其勝を擅にし、此は沈鬱頓挫の致を盡せり。一言すれば、彼は海にして、此は山、才を以てせば李、力を以てせば杜、その異、大抵かくの如し。

二家の優劣に就いて論ぜしもの、古來時に之ありと雖も、要するに、十分ならず。縹緲空靈と沈鬱頓挫と、姿致の異なる、人各好むところに從はむのみ、必ず軒輊を加ふべきに非ず。むかし、元稹、杜甫の碑文を作り、その中に於て「李は尙ほ杜の藩籬を窺ふ能はず、況んや堂奧をや」といひ、杜をして、九鼎大呂の重きを爲さしめしと雖も、これ畢竟李を知らざるものにして、韓愈が直に之を斥け「不知群兒愚、那用故謗傷」といへ

るもの、誠に其當るを覺えずむばあらず。次に杜は一飯君を忘れざるに反し、李は時に神仙に惑ふといひ、強いて之を甲乙せむとするものあれども、これ亦た儒教的見地より打算せしものにして、斷じて、審美的批判に非ず。止むなくむば、二家作詩の遲速を以てせむか、李は杜甫の歌へる如く、一斗詩百篇、筆飛ぶが如くして、語々皆豪を極めしに反し、杜は李がかつて戯に嘲けりし如く、借問山何太瘦生、只爲從前作詩苦、刻意經營、固より尋常ならず、然れども、製作の遲速は、必ずしも作品の價値と關せず、又た以て論なきなり。之を要するに、兩者決して優劣を論ずべきに非ず。凡そ偉人は、自己の何者たるを知ると同時に、天空海濶の雅量を以て、容易に他の美に服するものにして、二家の交情、亦た頗る親密なりき。李白の晩年夜郎に流さるゝや、杜は夢李白の一首を作り、他に天末懷李白、贈李白の諸作あり、次に李集を檢すれば、沙丘城下寄杜甫に思君如汶水、浩蕩寄南征といひ、他に魯郡東石門送杜二甫の一律あり、兩賢終に相厄することなかりしを見るべし。

(九) 王維及び盛唐諸家

日月を繞つて無數の星辰羅列する如く、秦華二嶽の間に幾多の丘陵起伏する如く、李杜同家の諸家、亦た決して凡流に非ず、その中、直に二家に追隨し得べきものを王維となす。字は摩詰、河東の人、書畫に工にして、俊才あり、開元九年、進士第に擢てられ、太樂丞に調せられ、坐累して濟州司倉參軍となり、右拾遺、監察御史、左補闕、庫部郎中を經て、吏部郎中に拜せられ、天寶の末、給事中となる。安祿山の兩都を陷るや、賊に得られ、藥を服し、陽つて瘖し、菩提寺に拘へらる。祿山、凝碧池に宴するや、潛かに詩を賦して、悲悼す。行在に聞こえ、後僞官に任ぜし罪を赦され、累遷して尙書右丞に終り、秘書監を贈らる。維、詩を以て、開寶の間に名あり、寧薛諸王、駙馬豪貴の家席を拂つて迎へざるものなく、宋之問輞川の別墅を得るや、山水絶勝、道友裴廸と舟を浮べて往來し、琴を彈じて詩を賦し、嘯咏終日、又佛を奉ずるに篤く、晩年長齋禪誦したりといふ。代宗の世、その弟縉、詩六卷、文四卷を上る。今に之を傳ふ。殷璠謂ふ、維の詩、詞秀にして調雅、意新にして理愜、泉に在つては珠を成し、壁に著いては繪を成す、と。東坡亦た云ふ、維は詩中に畫あり、畫中に詩あり、と。その人すでに佛に篤く、又南畫の祖として

丹青の技に長ず、その玄機を帶び、且つ色澤の潤を以て、勝を李杜以外に擅にするものの、豈に偶然ならむや。

李杜王の三家、王漁洋は之を仙聖佛に比し、徐而菴は之を天地人に比し、予は別に之を魏蜀吳に比せむとす。然れども、李杜の二家と王とは、截然として別あり。李杜二人、一は飄逸、一は沈鬱、その詩風、大に異なりと雖も、ともに均しく根柢を重んぜしに反して、王は獨り興會を以て、主となし、才の清を以て百代の名を成せり。其詩は、すべての體式、すべての委趣を存し、古今兩體ともに觀るべく、就中對仗の精當は、世に七律の正宗を以て目せられ、高華なるは「雲裏帝城雙鳳闕、雨中春樹萬人家」の如く、清遠なるは「漠漠水田飛白鷺、陰陰夏木囀黃鸝」の如く、俊爽なるは「護羌校尉朝乘障、破虜將軍夜度遼」の如く、其變固より窮らずと雖も、その本色は、「返景入深林、復照青苔上」といひ、「深林人不知、明月來相照」といふの類、短章斷句、清腹の致を極めし者に在り。分明是れ陶淵明が、一種深樸淵茂、純ら自然を宗とせしを學びて、一片の天機、妙品正に上の上を極めしもの、その自ら清旨微言を含有するは、一に滄浪嚴羽の謂ゆる、空中の音、相中の色、水中の月、鏡中の象、言盡くるあつて意窮なきものに當り、又司空表聖の謂ゆる、水中の鹽味、酸鹹の外に在りといふものに合契す。近世の王漁洋は、神韻派の開祖、杜甫の五律を目して變調と爲し、古詩選に於て一首を載せざるに反し、その唐賢三昧集を選ぶや、王維の作を以て、其卷を壓せり。要するに、王維は、神韻の源頭に立つものにして、李杜に於て見るべからざる一種の妙致を發揮せり。維と略ぼ相似たるもの、同代の孟浩然儲光羲あり、更に下つて、韋應物柳宗元あり。知るを要す、陶詩の高調は、一種の別格となり、有唐三百年の詩壇に搖曳したることを。

盛唐の諸家他に有名なるものを擧ぐれば、王昌齡は、情の篤深を以て推され、その絶句は李白に敵すべしといはれ、長古には「箜篌引」の一首、最も見るべし。次に高適、岑參の悲壯、李頎常建の超凡をはじめ、「海日生殘夜、江春入新年」の王灣、「黃鶴一去不復返白雲千載空悠悠」の崔顥、「黃河遠上」の王之渙、早朝の一律を以て唐詩中興の實を擧げし賈至の如き、いづれも、一時の傑たるに負かず。その略傳の如きは、餘白なきを以てこゝに述べず、決して、之を鄙として然るに非ざるなり。

(一〇) 劉長卿及び大曆十才子

中唐詩人の冠冕を劉長卿となす。字は文房、河間の人、開元二十一年の進士、至德中監察御史となり、淮西鄂岳轉運使に知たり。誣奏せられて、潘州南巴尉に貶し、辨ずるものありて、睦州司馬に除し、隨州刺史に終る。その詩調頗る雅暢、五言に於て尤も神妙、響を王維に嗣ぐ。故に權德輿推して五言の長城となし、皇甫湜は「詩未だ劉長卿の一句あらず、すでに宋玉を呼んで老兵となす」といへり。長卿又かつて自ら謂ふ、今人前に沈宋王杜あり、後に錢郎劉李ありと稱すれども、李嘉祐・郎士元、何ぞ予と並驅するを得むや、と。その抱負の大を見るべし。高仲武、之を斥けて、詩體新奇ならずと雖も、亦た能く鍊飾せり、大抵十首以上は、語意稍や同じく、落句に於て尤も甚しく、これ其短なりといひしが、その倨傲を憎み、錢郎を揚げむが爲にせしものにして、斷じて、篤論に非ず。故に王漁洋は曰く、中興高步屬錢郎、拈得維摩一瓣香、不解雌黃高仲武、長城何意貶文房と。その人、時盛唐に及ぶ、錢郎と異なるもの、固より故ありとなす。

これに次ぐは、大曆の十才子にして、吉中孚・韓翃・錢起・司空曙・苗發・崔峒・耿湋・夏侯審・李端・盧綸、即ち其人なり。評するものは曰く、錢起は體製新奇にして理致清贍なり。盧綸は、三河の年少、風流自ら賞するが如し。吉中孚は、神骨清虛にして、吟詠高雅、宛然たる神仙中の人。耿湋は、才思俊爽にして、意思不群なり。韓翃が興致繁富なるは、芙蓉の水を出づるが如く、司空曙の屬調幽閑なるは、新華の日に笑ふが如し。この餘、崔夏李苗の四人、亦た皆詞采炳然として觀るべし、と。十才子の外、郎士元あり、錢起と名を等うして、錢郎と稱せられ、顧況・張繼・戴叔倫・李益等、また詩名あり。然れども諸家の作、渾成の妙、遂に一籌を盛唐に輸するものあり。佳聯佳句は、之ありと雖も、概して佳篇に乏し。こゝに於てか、洪響すでに滅びて、繊音乃ち起り、かの錦江春色來天地、玉壘浮雲變古今といへるが如き雄健なる格調は、全く求むるに由なからむとす。故に嚴滄浪は曰く、詩を論ずるは、禪を論ずるが如し。漢魏晉と盛唐との詩は第一義なり、大曆以還の詩は、小乘禪なり、すでに第二義に落つ。晚唐の詩は、擊聞辟支果なり。漢魏晉と盛唐との詩を學ぶものは、臨濟下なり。大曆以還の詩を學ぶものは、曹洞下なり、と。

然らば、唐の詩は、大曆に盡きしか曰く否、元和長慶の間に於て、一たび中興の盛を見たり。而して、是れ韓白二家の力なり。文章家としての韓愈は、別に詳論するところあるべく、こゝには先づ詩人としての彼に就いて聊か略評を試みむ。

（一一）韓愈の詩及び其門下

李杜二家は、支那律語の最高頂なり、但し李は天縱の仙才、到底學ぶべからずと雖も、杜は猶ほ規矩の尋ぬべきものあり、その本色は、沈鬱に在れども變化固より多く、拓開すべき餘地少からず。故に韓愈は驚くべき學識才力を以て、杜が奇險の處を覬ひ、白居易は、愼密の苦心經營を以て、その平明の處を窺へり。

趙甌北、かつて韓愈を論じて曰く、たゞ少陵奇險の處、尙ほ推擴すべきあり、故に一眼に覬ひ定め、これより山を開き道を通じ、自ら一家を爲さむとす、これ昌黎注意の在るところなり。然れども、奇險の處、亦た自ら得失あり。蓋し少陵の才思到るところ、偶然これを得、而して、昌黎は、專ら此を以て勝を求む、故に時に斧鑿の痕跡を見る、有心と無心と異なればなり、と。韓愈の詩、字法句法、必ず刻劃奇を出さむとするの極、往々にして、修辭の末技に流る、但だ特に見るべきは、經營の餘、巉削蒼古に入るものと、融會の後、雄厚博大に歸するものとに在り。前者の例としては、衡嶽廟あり、後者の例としては、石鼓歌あり。而して、愈の才は、古に長するが故に、元和聖德詩琴操等、一種の神解あり、南山詩の如きは、境地に切實ならざるを病み、聯句の如きは、篇章の段落明晰ならず、律絕に於て一二誦すべきものあれども、決して本色に非ず。要するに、愈の特色は、その別調を拔きし、格力に在るべきなり。

韓門秀才多し。之を詩に見るに、孟郊東野の如き、推重尤も到れり。かつて其詩を評して曰く、その高きこと、魏晉に出で、懈らざれば、古に及ばむ、その他は、漢氏に浸淫す、と。また曰く、昔年曾讀李白杜甫詩、長恨二人不相從、吾與東野生並世、如何復能躡其蹤、我願化爲雲、東野化爲龍と。然れども、後世頗る異論あり。東坡は「夜讀孟郊詩、細字如牛毛、孤芳雜荒穢、苦語餘詩騷、要當門僧淸、未足當韓豪」といひ、隱居詩話には「孟郊の句蹇澁窮僻、琢削暇あらず、眞に苦吟して成る」といひ、嚴羽は「孟郊の詩刻苦、之を讀む人をして懼ばさらしむ」といひ、元遺山は「東野窮愁死不休、高天厚地一詩囚、江山萬古潮陽筆、合在元龍百尺樓」といひ、翁覃溪は「唐人の詩、皆讀むべくして、ひとり讀むべからざるものは、孟郊の詩なりといへり。然れども、征婦怨に「君淚濡羅巾、妾淚滿路塵、羅巾長在手、今得隨妾身、路塵如得風、得上君車輪」といひ、結愛に「結妾獨守志、結君早歸意、始知結衣裳、不如結心膺、坐結行亦結、結盡有年月」といふが如き、纏綿の思、喩意殊に妙、奇闢生新、その專ら寒瘦を以て、之を律する、蓋し誤れり。賈島の如きは、論ずるに足らず。

李賀字は長吉、千古の鬼才を以て其名を恣にし、弱齢二十七にして夭死せしと雖も、其集なほ儼存す。韓愈曰く、雲烟綿聯、その態を爲すに足らざるなり。水の迢迢、その情を爲すに足らざるなり。春の盎盎、その和を爲すに足らざるなり。秋の明潔、その格を爲すに足らざるなり。風檣陣馬、その勇を爲すに足らざるなり。瓦棺篆鼎、その古を爲すに足らざるなり。時花美女、その色を爲すに足らざるなり。荒國陵殿、梗莽邱隴、その怨恨悲愁を爲すに足らざるなり。鯨吸鱉擲、牛鬼蛇神、その虛怪荒誕を爲すに足らざるなり。と。長吉の詩、變化此の如く、鬼趣はその獨闢に係ると雖も、未だ其妙を完うするに及ばず。李憑箜篌引、鷹門太守行、金銅仙人辭漢歌、將進酒、美人梳頭歌の如き、集中の傑作にして、ともに、鬼趣却つて少し。盧仝は賀の瑰詭に比しむしろ怪誕、月蝕の詩、最も名ありと雖も、有所思、樓上女兒曲、秋夢行の如き、本色に非ざれども、又佳作を推す。之に繼ぐものは劉叉、氷柱雪車の二詩を以て稱せらる。

張籍は韓愈の門弟子中、交情最も懇篤なるものなれども、又白居易と善く、その平麗の處、頗る相似たり。居易かつて曰く、張君何爲者、業文三十春、尤工樂府詞、舉世少其倫と。王建亦た晩に韓門に遊び、ともに樂府を善くし、當時張王並び稱せらる。

（一二）白居易及び元稹

白居易、字は樂天、太原邽の人、貞元中、進士の第に擢んでられ、校書郎に補せられ、元和の初、制策に對して等に入り、盩厔尉集賢校理に調せられ、尋いで、召して翰林學士左拾遺となり、贊善大夫に拜せられしが、事を言ふを以て、江州司馬に貶せられ、忠州刺史に徙り、穆宗の初、徵して、主客郎中知制誥となり、復た外を乞うて、杭蘇二州の刺史を經たり。文宗即位、秘書監を以て召し、刑部侍郎に遷り、俄に病を移して、太子賓客に除せられ、東都に分司となり、河南尹に拜せられ、開成の初、起されて同州刺史となりしが拜せず、太子少傅に改められ、會昌の初、刑部尚書を以て致仕し、卒して、尚書右僕射を贈られ、謚して文といふ。居易自ら醉吟先生と號し、亦た香山居士と稱す。先に、同年の元稹と酬咏して、元白と號し、後に劉禹錫と酬詠して劉白と稱す。其集を名づけて、長慶といふは、穆宗の年號に取るなり。之に續いて、後集、別集等あり、皆世に傳ふ。

居易の詩固より得失あれども、卓然一家をなすに至りては、固より異論なし。乾隆御批の言に曰く、蓋し六義の旨に根柢して、溫厚和平の意を失はず、杜甫の雄渾蒼勁を變じて、流麗安詳となし、その面貌を裝はずして、その神味を得たるなり、と。その詩、

甚だ解し易し。蓋し當時の詩、大曆十才子の窠臼に陷らざるを勉むるの極、動もすれば漢魏を擬し、甚しきは詩經の雅頌を模し、强いて自ら高しとす。この間、居易が專ら俗耳に入るを主としたるは、一種の反動に外ならずと雖も、亦た以て慧眼卓見を推すに足る。故を以て、その詩、大に世に行はれ、上は王公より、下は野人田婦に至るまて之を玩誦せざるなし。要するに、居易その人、純然たる國民詩人に外ならず。かつて、その友元稹に與ふる書に記して曰く、長安より江西に至る三四千里、凡そ鄉校佛寺逆旅行舟の中、往々其詩を題するものあり、士庶僧道婦婦處女の口、往々にして、其詩を誦するものあり、と。軍使高霞寓、妓を邀へて客に侑む。妓曰く、我、白學士の長恨歌を學び、得たり。豈に他の比ならむや、と。これに由つて價を增せり。漢南主人、客を宴す。諸妓、香山の至るを見て曰く、これ秦中吟長恨歌の主至る、と。元稹また長慶集に序して曰く、觀寺郵堠牆壁の上、書せざるなく、王公妾婦牛童馬走、口道はざるなく、繕寫摹勒して市に衒賣するに至る。また雞林の賈人、市に求むる、頗る切にして云ふ、その國の宰相、每に百金を以て一篇に換ふ、甚だ僞なる者あれば、亦た能く之を辨ず、と。居易の詩は、支那のみならず朝鮮に行はれ、更に樂浪海を越えて、わが島帝國に及び、王朝時代の文學、その影響を受けしこと、歷々として指示すべし。かくの如きは、稀に見るところ、豈に偉ならずとせむや

然れども、居易の詩、亦た其失なくむばあらず、彼は其字を樂天といへる如く、その性格、また樂天的にして、極めて和平簡易なり。故を以て、豪放高古精深等の趣を解せず。その格を取る、太だ高からず。後世に至り、元輕に對して、白俗と呼ばれしもの、亦た自ら其故なくむばあらず。然れども、予は、彼が萎微せる中唐の詩壇を革新し、一派の別調を立てしを多とせずむばあらず。

居易の詩、今存するもの三千八百四十首、數を以てせば、唐賢第一に位す。精勵刻苦、乃ち然りと雖も、詩材を取ること、甚だ卑く、汎く之を詩にしたるもの、その主要なる理因たり。然れども、渠も亦た一代の名家、多少深厚の精力ありしを以て、古體に於て、能く其巧を恣にするを得たり。長恨歌は八百四十字、琵琶行は六百十四字、遊悟眞寺詩は一千三百字、支那に於ては稀に見るの長篇なり。次に新樂府、秦吟中等、ともに傑作を推すべく、律絕に於ても、不用意に出てしもの、却つて觀るべきものあり。

杜甫一人を標準として韓は更に高きを欲し、白は更に卑きを欲し、各才力を以て

經營せる結果、今や意象に於てよりも、修辭に於て意を致すの傾向を生じ、內容よりも、外形を主とするに至らむとす。詩壇の遞次的變遷は、常に同一なり。過ぎたるは猶ほ及ばざるが如く、韓白二人、之を一概して、杜甫に及ぶ能ばざること、辯を待たず。

白居易の友に元稹字を微之といふものあり、千古の神交今に、之を傳ふ。その詩風は、頗る居易と相似て、實は蕪蔑玉に倚つて、百代の名を庶幾したるものゝ如く、加ふるに其人と爲り、輕薄の才子、李賀張祜の輩、皆これに因つて仕進を妨げられしといふ。然れども亦た一時の盛名を擅にし、元才子の名、宮闈に高く、その作るところ、連昌宮辭は、長恨歌と同じく開元天寶の間、掖庭の遺聞を叙せしものにして、聯璧と稱せらる。趙甌北曰く、元白二人、才力本と相敵す。然れども、香山洛に歸てより以後、益す老幹枝なきを覺え、心に稱つて出で、筆に隨つて抒寫し、幷に文を求め、好を見はすの意なく、しかも風趣橫生、一噴一醒、少年の時、微之と各才情工力を以て勝を競ひしものに較ぶれば、更に一籌を進む、故に白は自ら大家たり、而して、元稹や次なり、と。稹の作、他に會眞記あり、後章別に略論するところあるべし。

（一三）中唐の諸家

韓白二人を友として劉禹錫あり、字は夢得、中山の人。貞元元年の進士、監察御史となる。後、王叔文に黨して、朗州に貶せられ、召して還されて復た播州に刺となり、連州に易へ、又夔州・和州に徙り、入つて主客郎中となる。裴度薦めて翰林學士となし、太子賓客に遷り、會昌の間、檢校禮部尚書を以て卒す。禹錫素より詩を善くし、晩節尤も精、白居易と唱酬す。居易かつて其詩に叙して曰く、彭城の劉夢得は、詩豪なるものなり、その鋒森然、敢て當るもの少し、と。又言ふ、その詩の在る處、神物の護持するあるべし、と。禹錫の詩、體、今古を兼ねて、衆美を備へ、詞氣豪逸、才氣縱橫。就中金陵懷古「千尋鐵鎖沈江底、一片降旗出石頭」の一聯と、石頭城「山圍故國周遭在、潮打空城寂寞回」の一首とは、絕調を以て、千古に流傳するものなり。

これと前後して、權德輿・楊巨源・羊士諤・歐陽詹・呂溫の如き、皆詩を以て家を成すものにして、その集、皆存す。元和の風氣、固より大曆に過ぎ、諸家骨力やゝ高しと雖も、修辭に意あるに至りては、皆一途に出で、その後、晩唐に至りて爛熟し、大雅の正聲、愈よ求むるに難からむとす、時勢亦た然るのみ。

（一四）三十六體

晩唐は、國家の衰替とともに、その詩も亦た太だ振はず。その初に在りて、最も名あるものを李商隱・溫庭筠の二家となす。韓白及びその門生が修辭を事としたる傾向は、こゝに至つて、愈ゝ彰著となり、この二人、實に修辭を以て、その生命となせりき。

李商隱、字は義山、懷州河南の人、開成二年、進士の第に登り、弘農尉に調せらる、王茂元、書記を表掌し、子を以て之に妻はし、侍御史に除せらる。令狐楚、その詩才を愛し、奏して集賢校理となし、後、檢校吏部員外郎となり、滎陽に歸つて卒す。商隱はじめ文を爲る、瑰邁奇古、令狐楚の府に在るに及び、楚本と章奏に工なるを以て、因つて其學を商隱に授く。儷偶長短し、かも繁縟之に過ぐ。その詩に至りては、殊に然りとなす。玉溪生詩三卷あり。溫庭筠、本名は岐、字は飛卿、太原の人、少にして敏悟、才思艶麗、韵格清拔、工に詞章小賦を爲り、商隱と相並び溫李と稱す。然れども、行檢輻なく、數ば進士に舉げられて第せず。思神速、試に入りて官韵を押して、賦を作る毎に、凡そ八叉手にして成る、時に溫八叉と號す。徐商の襄陽に鎭するや、署して巡官となせしも、志を得ず、去つて江東に歸る。後方城尉に貶し、再び隋縣尉に遷つて卒す。金荃集あり。

商隱もと杜を學び、その嫡嗣と稱せらるゝも、僅に典麗博大の趣を得たるのみ、特色は、却つて艶麗綺縟に在り。その作、大抵典故を以て成り、自ら之に苦心せしが故に、楊烱の如く點鬼簿と呼ばれ、また別に獺祭魚と稱せらる。錦瑟の一律、その證となすべく、諸家の箋釋、紛々として殆んど適從するところを知らず。故に元遺山は望帝春心托杜鵑、佳人錦瑟怨華年、詩家總愛西崑好、獨恨無人作鄭箋といひ、王漁洋は、獺祭曾驚博奥殫、一篇錦瑟解人難、千秋毛鄭功臣在、尙有彌天釋道安といへり。要するに、商隱は刻苦せる修辭家のみ。これに反して、溫庭筠は、修辭の天才なり。二家天分の異なる、なほ李杜の如し。庭筠の所長は、樂府に在り。その奇艶なるものは、古今獨歩にして、太白なほ且つ及ぶ能はず。その規度は、自ら大小あれども、辭賦に於けるも司馬相如と、幾んど相似たるものあるが如し。然れども、唐の末、溫李を出したるは、建安の後、張傅潘陸を出せしと同じく、當時に在つて新聲と呼ばれ、大に世に行はれし結果、愈ゝ詩壇を頽廢せしめたり。溫李の外に、段成式あり、三人の排行、ともに十六なるを以て、三十六體の目あり。宋に及びては西崑體と稱せられ、東坡以前の詩壇を風靡せりき。

(一五) 晩唐の諸家

晩唐の詩人、溫李並稱し、商隱と杜牧とを合せて李杜といふ。牧又別に小杜の目あり。その詩豪縱にして氣骨あり、晩唐纖柔の調と自ら異なれりと雖も、惜いかな、家數小なるを以て、遂に一勢力となるを得ず。牧と略ぼ趣を同うせしものを張祜・趙嘏の二人となす、ともに親交ありしものにして、詩風亦た酷だ相似たり。

その他、徐凝・李德祐・熊孺登・李涉・李紳・鮑溶・殷堯藩・沈亞之・施肩吾・姚合・項斯・薛能・李頻・玉等、詩頗る多し。鄭嵎は、津陽門の長句一百韻を以て世に傳へ、古錦を碎いて花樣なほ存するの趣あり。許渾・劉滄は、七律を善くし、懷古の一體を以て、特に名ありと雖も、漸くにして千篇一律ならむとす。これに次いで、名あるものは鄭谷にして、少時すでに一代風騷の主を以て囑望せられ、楊子江頭の一絶、善く千古たり。他に方干・羅隱・司空圖・韋莊・杜荀鶴等あれども、風格愈よ下り、皮陸の唱和、いたづらに篇什の富を誇るのみにして、その詩、極めて粗笨なり。和凝・王仁裕・陳陶・徐鉉等に至りては、時、すでに五代に入り、殘山剩水、復た觀るに足るものなく、その間、傳ふべきもの、ひとり韓偓あるのみ。

(一六) 韓偓

韓偓の晩唐に於けるや、後世固より異論ありと雖も、斷じて、特色を推すべし。偓、字は致光、京兆萬年の人、龍紀元年、進士の第に擢んでられ、河中の幕府に佐たり。召して、左拾遺に拜せられ、諫議大夫に累遷し、翰林學士・中書舍人・兵部侍郎を經、朱全忠に附かざるを以て、濮州司馬に貶し、再び榮懿尉に貶せられ、鄧州司馬に徙り、天祐二年、原官に復せしも、召に赴かず、南、王審知に依つて卒す。翰林集一卷・香匳集三卷あり。

偓の創意に作る謂ゆる香奩體の本色は、專ら閨閤の情事に關し、艶靡の體を以て之を遣るものにして、唐末に之あるは、猶ほ六朝の中葉、梁陳の宮體あるが如し。唯だ儒教主義を持守する詩論家は、これを排すること極めて甚し。沈德潛曰く、詩は本と六籍の一、王者これを以て民風を觀、得失を考ふ、艶情の爲に發するに非ざるなり。三百以後、離騷美人の思を興し、平子定情の詠ありと雖も、詞は之を男女の義に關し、實は君臣友朋に關す。子夜讀曲、專ら艶情を詠じてより、唐末の香匳體、抑も亦た甚しく、風人を去ること遠く、淫哇私褻、概して闕如に從ふ。然れども、香匳集中、觀るに堪へざるものは、殆ど絶無にして、この評の如き、斷じて苛酷といはざるべからず。かの繞

廊倚柱堪惆悵、細雨輕寒花落時といひ、正是落花寒食夜、夜深無伴倚空樓といひ、若是有情爭不哭、夜來風雨葬西施といひ、桃花臉裏汪汪淚、忍到更深枕上流といひ、此身願作君家燕、秋社歸時也不歸といふが如き、艶は艶なりと雖も、決して穢褻に非ず。蓋し韓偓は昭宗の朝に立ち、中流の柱となりし骨鯁の臣にして、朱全忠の專横を恐れず誠忠國に奉ぜしもの、要するに情摯にして思深く、自ら時に艶情を詠ぜしものにして、毫も累となすに足らず。若し夫れ、感事三十四韵の「晉讒終不解、魯瘠竟難痊、祇疑誅黄皓、何曾識翻先、嗟蕘翻醜正、養虎欲求全、萬乘烟塵裏、千官劍戟邊、斗魁當北拆、地軸向西偏、哀董非徒爾、師昭豈偶然、中原成劫灰、東海遂桑田」の數聯を誦すれば、慷慨悲憤さながら別人の手に出でし如く、後世の文天祥と雖も、恐らくは及ばず。次に「千村萬落如寒食、不見人烟空見花の一絶を見れば、亂後の光景に對し獨立蒼茫、淚を揮うて詩を詠ずる孤臣零丁の狀、宛然目に睹るが如し。予は詩に於てよりも、人物に於て、韓偓を取らむとするものにして、こゝに千古の寃を雪ぐ所以なり。

才子傳に、沈存中の言を引き、香匳集を以て、和凝の作となす。然れども、他に傍證なきものは信ずべからず。予は、依然として、之を韓偓に歸せむと欲す。

（一七）釋道閨秀の詩人

唐代風氣の盛なる、ひとり士人のみならず、方外の釋道、閨閣の粉黛、詩を以て名を成すもの、亦た少からず。皎然・廣宣・貫休・齊己の如きは、姑らく之を措き、その最も特色あるは、寒山・拾得の二人に若くはなし。この二人、貞觀中、相次いで、跡を國清に垂れ、隨處に吟嘯せり。寒山の詩存するもの、三百三首、すべて佛教大乘の思想を以て一貫したる宗教的若しくは哲學的詩歌にして、專ら時態を嘲罵し、流俗を驚勵す。その他、眞覺の證道歌、又觀るべく、語錄頌偈の類は、一一擧げず。

道士には呂洞賓ありて、その詩篇々劍氣あり。就中、「獨上高樓望八都、黑雲散殘月輪孤、茫茫宇宙人無數、幾個男兒是丈夫」、「朝遊北海暮蒼梧、袖裏青蛇膽氣粗、三入岳陽人不識、朗吟飛過洞庭湖」の如きは、雄放高古、大空を横絶するの概あり。

閨秀にして詩の多きもの、薛濤・魚玄機・花蘂夫人あり。殊に花蘂夫人の宮詞一百首は、王建の作と並稱せらる。夫人もと蜀主孟昶に幸せられ、蜀の亡ぶや、宋の太祖、これを召して詩を詠ぜしむ。夫人直に吟じて曰く、君王城上竪降旗、妾在深宮那得知、十四萬人齊解甲、更無一個是男兒、と言ふ莫れ、蛾眉氣慨なしと。その流傳、亦た故あり。

(一八) 韓柳以前文章の三變

唐代律語の盛かくの如く、之に伴つて、未だ四六駢儷の一體を棄つるに及ばず。太宗が自ら筆を下して晋書陸機の論贊を作り、又この體を用ひたるが如き、以て一代の好尚を豫察すべく韓柳二家の出づるに及び、復古の氣運はじめて觀るべし。

然れども、韓柳二人、亦た文王を待たずして起りしものに非ず、この大勢を作る爲に、その前、多少の先驅者ありしを忘るべからず。今これを細觀するに、唐代の文章、韓柳の前、凡そ三變せり、その最も初に出でゝ、陳隋以來の陋習を脱せしものを陳子昂と爲す。其詳は、前に述へたり。これ唐初文體の第一變、次は張說、玄宗の初年に出づ。その文、未だ超出せずと雖も、宏茂を以て波瀾を廣むと稱せらる。これ、第二變。天寶以還は、元結尤も毅然として、排偶綺縟の習を變ぜり、晁公武謂へらく、その文、古鐘磬の如く、俗耳に諸はず、と。高似孫曰く、その文、奇古にして踏襲せず、と、また獨孤及あり、趙翼その勝れし處、先秦西漢の風ありと稱す。他に蕭穎士、李華、梁肅等あり、これ第三變。蓋し武德貞觀より以來、この三變を經、文章次第に古に近かむとし、自然の風氣は遂に韓柳二人を出したるなり。

(一九) 韓愈

韓愈字は退之、南陽の人、幼にして孤、嫂鄭夫人に養はれ、刻苦學を爲し、年八歲、始めて書を讀み、文を爲るを知りてより、日に數千語を記し、長ずるに及び盡く六經百家の學に通じ、貞元八年、進士の第に擢んでられしも、才高く、又直言を好み、累りに貶黜せらる。はじめ監察御史となり、上疏して時事を論じ、陽山令に貶せられ、元和中、再び博士となり、比部郎中史館修撰に改められ、考功知制誥に轉じ、中書舍人に進み、又庶子に改められ、裴度の淮西を討つや、請うて行軍司馬となり、功を以て、刑部侍郎に遷る。憲宗すでに吳元濟を平げてより、志氣驕盈、その佛に迷ひ、佛骨を宮中に迎へむとするや、書を上つて、之を諫め、因つて譴せられて潮州に刺史とし、又袁州に移る。その書は、有名なる佛骨表、是れなり。穆宗即位、召して國子祭酒、兵部侍郎に拜し、王廷湊に使して歸るや、吏部に轉じ、時宰の構ふところとなり、罷めて兵部侍郎となり、尋いて吏部に復し、卒せしとき禮部尚書を贈り、謚して文といふ。集四十卷あり。

韓愈は、古今東西を通じて、稀に觀るの大人物といふべく、その多面的にして、而かも均しく偉大なる、殆んどその匹を絕つ。然れども、その本來の面目は、儒教の維持者

たるに在り、自ら周孔の忠臣羽翼を以て任じ、孟子の正傳を得たりと稱す、故を以て獨立的思索は、むしろ極めて少く、唯だ儒家の古義を敷張し、當時の社會を革新せむと企圖せしのみ。その作に係る原道、原性、師說以下十數篇、奥衍閎深、孟軻揚雄と相表裏し、六經を佐伯すと稱せらるゝも、實は淺近平易なり。かくの如き性格と操守とは、詩人たるよりも、むしろ文士たるに適したるものにして、その詩は、畢竟緒餘の小技のみ。その論ずところは、專ら理に在り、固より、駢四儷六の技工を爲すに暇あらず、傳ふるものは、梁獨の徒に從つて遊ぶといへども、その學問見地より、自ら此に向はざるを得ざりしなりき。故に自ら曰く、上は姚姒を窺ひ、下は百家に逮び、故常を主とせず、有らざるところなく、妙ならざるところなく、大にして之を化し、妙にして之を新にし、臭腐にして之を神奇にす、と。かくの如くして、主として經傳を取り、兩漢は馬遷揚雄を取るのみ、決して其下に逮ばず。その意を文辭に用ふるの勤にして且つ苦なるや、前人を踏襲せざるを主とし、陳言を去るを以て第一となす。然れども、矯揉の極、動ずれば激に失し、古文の體段、復た舊に非ず、篇章字句の法、亦た隨つて壞ると稱せらる。唯だ愈の自信に篤きや、方ち曰く、古文直に何ぞ今の世に用あらむ、然れども、以て知者の知を俟つのみ、と。又曰く、力を用ふる深きものは、その名を收むるや遠し。もし皆世と沈浮すれば、自ら樹立せず、當時怪しむところとならずと雖も、亦た以て後世の傳なきなり、と。夫れ體段の變は、世の遞降に因るものにして、之を以て、ひとり愈を責むるは、斷じて酷に失ずといふべく、駢儷を打破せし氣概、愈よ欽賞すべきなり。

韓文の特色は、字字根抵ありて、苟くもせざるに在り。黄魯直晁公武、皆之を言へり。而して、構想設思、又多く、本づくところあり、馳騁步驟、卓然として別に家を成す。要は、變化の妙、點綴の工に在り。就中、その眞は、書序の一體にして、辭義嚴正、氣焰頗る揚るところ、まことに、獨特の擅場を推すべし。蘇洵曰く、孟子の文、語約にして意深く、巉刻崭絶の言を爲さず、而かも、其鋒犯すべからず。韓子の文、長江大河、渾渾流轉、魚龍蛟龍、萬怪惶惑するが如く、而かも、抑遏蔽掩して、自ら露はれざらしむるも、人、その淵然の光、蒼然の色を望見し、亦た自ら畏避して、敢て迫り視ず、と。若し夫れ、奇辭險句、時に出て、動もすれば、佶屈聱牙に類し、揚雄と其弊を同うするものに至りても、其過や尚ほ君子、擂陷廓清の功、武事に比すれば、雄偉にして常ならずといへる李漢の言、又千古の定評たるを失はざるなり。

(二〇) 柳宗元

柳宗元、字は子厚、河東の人進士の第に登り、擧に宏辭に應じて、校書郎を授けられ藍田尉に調せられ、貞元十九年、監察御史裏行となり、王叔文・韋執誼の事を用ふるや尤も之を奇待し、尚書禮部員外郎に擢んでられしが、叔文の敗るゝに會して、永州司馬に貶せらる。宗元少にして精警絶倫、文章を爲つて雄深雅健、卓厲風發當時流輩の推仰するところとなる。すでに竄逐に罹るや、蠻瘴を涉履し、間に居て益す自ら刻苦し、その堙厄感鬱、一に之を文に寓し、讀者之が爲に悲惻す。元和十年、柳州刺史に移り、元和十四年、遂に其地に卒す。集四十五卷あり。

宗元は情の人にして、その慰安を儒教に得ざるや、轉つて、佛教を窺ひ、その思索、頗る精微、文亦た敘述に長ず。唯だ稍や方にして、なほ前人の陳語を用ひしを病むのみ。而して、其詩は峻潔にして、陶王の遺韻を傳へ、尤も含蓄に饒、元和に在りては古調に屬す。

李杜の二人と同じく、韓柳二家、同時に世に在り、その交、甚だ親しかりしに係らず、その人物、その性行、その主義、その本領、その文致、全く異なれり。韓は洋々として河の如く、柳は嶄峭、孤峰の如し。韓は大にして容れざるところなく、柳は稜々として圭角あり。韓は前後三回の貶謫を經たるも、百錬の剛、毫も挫折せず、晩年河北に使して王庭湊を叱せしに反し、柳は二王の爲に坐貶せられ、卒に窮裔に死し、材、世用と爲らず、道、世に行はれず。これを學問よりいへば、韓は保守、柳は懷疑、主義よりいへば、韓は樂天、柳は厭世。文章に就いて言へば、韓は理を論ぜむが爲に經中より出で、柳は事を記せむが爲に史中より出づ。韓はその意を說き盡し、さながら麻姑を倩うて癢を搔くに似たれども、柳は之を說破せず、讀者をして、自ら會するところあらしめむとす。韓は縱橫、柳は變化。一は大なるものにして、一は高きもの。前者は議論の奔放と氣魄の雄大とを以て勝り、後者は敘述の精微と筆致の雋潔とを以て秀づ。之を要するに、韓は詩に至るまで散文化したるに反し、柳は文に至るまで詩化したり。

次に韓柳二家の文を合評したる前人の語を擧げむか、廖道南曰く、高山大川、雄峙奔洶、その零虧湮塞を見ずと雖も、その秀挺廻紆、盡く藏すべからざるは韓の文なり。巍巖絶澗、峭奇環曲、人をして遐眺留睨せしめ、しかもその靈氣怪氣、固より克く籠罩するは柳の文なり、また平原曠野、大將指麾し、天衡地衡、自ら紀律あるは、其れ韓の變

にして、間道斜谷、驚飈掣雷方物すべからざるは、其れ柳の變ならむか、と。羅大經又曰く、韓は美玉の如く、柳は精金の如く、韓は靜女の如く、柳は名姝の如く、韓は德驥の如く、柳は天馬の如し、と。

二家の工力、殆んど相敵し、その集中、故らに相角せむとしたるものあれども、柳の山水遊記は、遂に韓に於て見るべからざるものにして、ひとり、唐の文界を重からしむるのみならず、拮屈聱牙の漢字と雖も巧に運旋すれば、精微の趣を描破し得べきことを實地に說明したるものにして、一片の雋氣、遂に他の模倣を許さず。凡そ支那文學の中、山水の形勢を叙せしもの、始に書の禹貢あり、次に酈道元の水經注あれども、柳宗元に至つて、漸く一體を確立せり。試に其例を擧ぐれば、小石潭記に潭中魚可百許、皆若空游無所依、日光下徹影布石上、怡然不動、俶爾遠逝、往來翕忽、似與游者相樂といひ、袁家渴記に每風自四山而下、振動大木、掩冉衆草、紛紅駭綠、蓊勃香氣といひ、石渠記に風搖其巖、韵動崖谷、視之既靜、其聽始遠といふ如き、いづれか、觀察の精微と筆致の奇警とを稱すべからざるものぞ。要するに、永州八記の文は、支那文學中の神品にして、宗元は能く千古たるべく、その他は、一一詳論せず。

（二一）韓柳以外の古文家

唐代の文家、他に李觀、李翺あり。觀は、李華の從子、愈の友なり、その死するや年二十九、故に未だ確然樹立するに及ばず。唐書に其文を評して曰く、觀の文を屬するや、前人に旁沿せず、時に韓愈と上下せしといふ。觀少にして夭するに及び、愈後文益す工なり、議者以へらく、觀の文、未だ極らず、愈老ひて休まず、故に卒に名を擅にす、と。陸希聲、以爲へらく、觀は辭を尙ぶ、故に辭理に勝れり、愈は質を尙ぶ、故に理辭に愈れり、愈窮老すと雖も、觀の辭に加ふる能はず、觀、愈に後れて死するも、亦た愈の質に逮ぶ能はず、と。翺は愈の姪婿、紀曉嵐曰く、才と學と、皆愈に遜り、百家を鎔鑄し、皆己より出づる如くなる能はずと雖も、而かも立言具さに根柢あり、大抵溫厚和平、俯仰度に中より、李觀劉蛟の諸人、矜心作意の態あるに似ず。蘇舜欽云ふ、その詞、韓に逮ばず、理は柳に過ぐ、と。ことに篤論なり。鄭獬、その質を尙び、工少きをいふ、貶する太だ甚し、と。

韓柳と同時に、樊宗師あり。韓門の張籍、文多からずと雖も、力を得ること、淺からず。皇甫湜は、愈の奇崛の處を得、之を來無擇に傳へ、無擇、之を孫樵に傳へ、刻意奇を求むるに至つて、却つて及ばず。唐末には劉蛻あり。五代の間は、一も聞くところなし。

(二二) 唐代の小說

有唐の詩文、連りに鉅匠を出せしと雖も、小說は、未だ一新時期を劃する能はず、然れども、斷篇零冊、固より多く、唐代叢書、龍威秘書、五朝小說等に收むるもの、無慮數十百部、その最も世に知らるゝは、開元天寶遺事にして、玄宗宮掖の遺聞を敘し、西京雜記、漢武故事と科を同うす。五代の時、太原の王仁裕、之を作るといふ。然れども、支那小說發達の考察に資すべきものは、會眞記と遊仙窟とに及ぶものあらず。會眞記は、元稹の手に成りしものにして、司馬相如の美人賦と殆んど相似て、亦た自己の閱歷を述べたるものゝ如く、其文頗る誦すべし。元の西廂記は、之を粉本とす。遊仙窟は、名を張文成に托し、或は前者に倣ひしものといひ、神仙を假りて情事を述ぶ。篇中稍や褻瀆に失するところあり、後世淫書の俑を作りしを疑ふ。然れども、文辭頗る絢爛、花月の光華、色影迷離、又玩讀すべし。

その他、李鄴侯傳、李林甫外傳、東城老父傳、高力士傳、虬髯客傳、杜子春傳、劍俠傳、梅妃傳、楊太眞外傳、長恨歌傳、紅線傳、霍小玉傳、章臺柳傳、步非烟傳、枕中記等、皆後世の雜劇傳奇を胚胎せしものにして、一讀の價値なしとせず。

(二三) 詞の發展

詞は唐に濫觴し、五代に滋衍し、兩宋に瀰漫したる、極めて多變なる支那律語の一體なり。一に塡詞と名づく、蓋し調に定格あり、字に定數あり、韵に定聲あり、止だ其間、字を塡むるが故にして、其稱、妥當なり。然れども、之を詩餘と呼び、古樂府の流別、謂ゆる詩の附屬物となすに至りては、斷じて、偏見なり。彭孫遹の詞統源流、詞の源を以て、三百篇に在りとなす、亦た未だ盡せりと爲さず。蓋し三百篇より以下、漢魏六朝に至るまで、律語の體制、多端なりと雖も、大別すれば、二に歸すべく、句格の整と不整と、即ち是れのみ。後に沈約四聲を論ずるに及び、律語の整なるものは、律絕となり、律語の不整なる者は、やがて、詞となれるなり。梁の武帝の江南弄、沈約の六憶詩の如き、聲調圓美、正に絕妙好詞を推すべく、すでに倚聲の先を爲す。然れども、普通に詞の濫觴となすものは、李白の淸平調、憶秦娥、菩薩蠻及び張志和の漁歌子を推す。その源、頗る古く、詩と並行して、發達したるを知るべし。故に汪森は曰く、古詩の樂府に於ける、近體の詩に於ける、分鑣並馳、先後あるに非ず、詩降つて詞となるといひ、詞を以て詩の餘となすは、殆んど、通論に非ず、と。王昶曰く、知らざるものは、詩の變といふ、而かも、その

實、詩の正なり、と、ともに、前言を證すべきなり。

李張の數家は、纔に風氣を開きしのみにて、なほ言ふに足らずとするも白居易には、花非花・憶江南・如夢令・長相思等あり、溫庭筠には、南歌子・荷葉杯・蕃女怨・遐方怨・訴衷情・定西番・思帝鄉・酒泉子・玉蝴蝶・女冠子・歸國遙・更漏子・河瀆神・河傳・木蘭花等あり。五代に至りて、新調愈よ多からむとす。こゝ於てか、知るを要す、若し武帝・沈約、諸家の集中に見えたる二三を以て、詞の源泉とせば、初盛二唐は、伏流千里、しばらく地底に潛みし時、之を括言すれば、詩詞の兩體、元と姉妹の因ありて然ることを。

陸放翁曰く、詩は五代殘唐に至つて、氣格卑陋、千人一律、長短句(即ち詞)ひとり精巧高麗、後世及ぶなし、と。五代以後の律語は、詩に在らずして、寧ろ詞に在り。花間集十卷、蜀の趙崇祚の編に係り、載錄するところは、溫庭筠より以下、五代の詞家、併せて十八人、凡そ五百餘首、詞の集あるこゝに掬まる。而して、其尤なるものは、南唐の李後主、綺靡艷褥を以て當行本色となす。次は馮延巳、その詞極めて清脆。他に皇甫松・韋莊・毛文錫・和凝・牛希濟・薛昭蘊等あり、宋に至れば、樂章として、之を用ひ、因つて大に進歩し、小令中調の外、長調の出づるあり、その體、悉く備はれりき。

第二　宋代文學

(一)　その學風と影響

宋の一代は、漢族の人文史上、春秋戰國と並稱すべき思想界活潑の一大時期にして、性理の學風、國世を靡かし、頗る觀るに足るべき新研究の結果を出したりき。試に前代の學術界を回顧一番せむに、漢代の學者は、各自專門の業を修め、一經を傳習し、師弟授與、舊說を墨守して、復た創見を出ざす。馬融・鄭玄・王肅の徒に至るまで、その畢生の事業は、衆說を該統し、諸經を注釋したるに過ぎず。唐に至りて、又漢注を疏解し、縯繹周詳、委曲旁引、愈よ瑣細繁冗に趨き、人をして厭倦の念を生ぜしめむとす。然れども、上世の名物度數、后世能く之を推明するを得たるは、斷じて漢唐諸儒の功といはざるべからず。この間、固より、敢て異說を立て、新學を起す者あるを得ず。揚雄・王通・韓愈の輩、自任甚だ重く、諸儒を藐視し、一意以て古道を遠紹する者と稱すと雖も、その撰著、未だ先聖に超軼し、以て後人を改通するに足るものあらず。見よや、揚雄の太玄は易に擬し、法言は論語に倣ふと稱せられ、文中子の一書、語句の末に至るまで勉

めて仲尼を學ぶあり、韓愈の原道、原性、師說等、有用の文字たること爭ふべからずとするも、實は前人の糟粕に過ぎざるを、之を要するに、周末以後は、唯だ講習を事とし、偶ま新見あれは、まことに異數のみ。さばれ、あらゆる物體は、長しへに、同一狀勢を保持するものに非ず、動あれば、必ず反動あり。宋の學者は、漢唐の煩瑣なる訓詁に反抗して起りたるものにして、その主とするところは、儒敎を文字上より解釋せずして、直に精神上より闡明せむとするに在り。顧みれば、南北兩思潮は、その源を先秦時代に發し、並流して魏晉六朝に入り、時に混同融會の形勢を促したることあり、而して是れ宋代に於ける新研究の基礎なりき。之に加ふるに、はじめて漢代に輸入せられ六朝に熾に、唐に至りて、大に勢力を奮ひたる印度思想の佛敎は、如上の思潮と合して、その幇助となり、宋儒の性理說は、此等數者調和の規畫及び批判的研究を主として開展したるものなり。

宋代學術の盛は、帝室が之を奬勵したるに始まり、隱士の優遇と朋黨の分爭とは因果互に相聯關し、却つて之を助長せしめ、その末造に至るまで、依然として變ぜず、厓山の舟中、陸秀夫が大學を講じたるが如き、最も善く個中の消息を傳へたるに非ず。凡そ、學術の盛は、國家に對して、利害兩つながら、之あるを免れず。宋人は、公明正直を貴ぶこと、その度に過ぎ、自ら守ること、甚だ堅く、少しも人に寬假せず、加ふるに藝祖、藩鎭の根本的革新をなし、兵權を收め、武斷政治を廢し、大に言論の自由を重んぜしを以て、閣僚の交迭、頗る頻繁、往々にして、好惡の標準を失し、物論洶洶、外寇適まで至るも、之を救ふ能はず、之を一概すれば、文弱にして獨善の風あり、全然個人主義の流行を見るに至り、國力の伸張に對しては、到底不利益なりき。然れども、學を勸め士を養ふこと、三百年、國祚沈淪の際に至るも、四方の義故、相繼いで絕えざりしもの、亦た名敎の餘澤に賴らずむばあらず。文治の利害、固より論じ易からざるなり。

唐の文學は、詩に在り、宋の文學は、文に在り、是れその特徵なり。蓋し宋人は、前に云へる如く、兩つながら、政治學術の上に於て、研究的精神に富み、細微なる思索に長ぜしと雖も、想像に短にして、且つ之を修養する機會に乏しく、律語の創成力は、遂に唐人に及ばず。之に加ふるに、唐が詩を以て士を取りしに反し、宋は、主として、策論を以て登科の門を開きたり。天下の士、身を立て道を行ふものと、利祿聲譽を願ふものと、その日夜經營苦心するところは、均しく策論應制の準備に在り。散文の盛なること

固より然るべきなり。而して、特に注意すべきは、宋の一代、文體の變遷上に新時期を劃することにして、更に詳言すれば、宋の前半期は、復古の氣運、漸く熟せし時にして、その後半期は、近體時文の發生を促進せしこと、是なり。そも古文辭の復古は、かつて前に述べたる如く、主として、韓柳二家に在れども、之を完成せしものは、歐蘇曾王の諸家に在り、而して、王安石は、兼ねて時文の祖と稱すべきものにして、明清以來盛に行はるゝ八股文の備を作れりき。之を要するに、宋人の文は、或る意味に於て、百代の典型を貽せしものと謂はざるべからず。

詩文兩道、之を一身に兼ぬるもの、極めて稀なると同じく、宋人は概して、律語に短なりき。蘇東坡、黃山谷、陸放翁、范石湖、楊誠齋の諸人、一代の鉅匠たること、固より論なしと雖も、唐代無名の婦豎、なほ且つ千古の絕調を殘せしに比すれば、到底相若かざるものあり、時代の遞降に伴ひたる氣運の推移は、唐人の能詩的特性を變じて、宋人の能文的特性となさしめしなり。然れども、詞の一體、實に此代に於て大成せり。蓋し宋人の詩は、自然の勢、散文化したる傾向あり、故に腐爛を避け、勉めて清新を標異せむには、懸絕甚しき體制を要せしに出でしものならむ。加ふるに、詞家の多數は、音樂上の知識に富めりき。金の北曲、元の南曲、實に此より出で、その後、雜劇傳奇となり、漢族は始めて戲曲を有することゝなり、藝苑の新生面を開きぬ。宋人の詞に於ける、律語發展の徑路上、亦た決して輕々看過すべからざるなり。

三百年の間、名家林の如しと雖も、一代文物の盛を誇るべきは、仁宗以後、哲宗以前に在り。詩文雙絕、千古稀に見る一大天才たる蘇東坡を中心として、幾多の奎星、之を圍繞し、燦たる光芒、人目を眩耀せむとするを疑ふ。然れども是れ、李杜二大詩聖の唐に於けると同じく、國運の一大轉向期にして、泰極つて將に否に赴かむとし、邵康節は、天津橋上杜鵑の聲を聞き、地氣の遷徙、天下の變の近に在るを嘆ぜしが、この豫言は、不幸にして誤らず、靖康の變、徽欽二帝北狩の後は、江南半壁の地に據りて、纔に餘喘を保つの止むを得ざるに至り、その後殆んど觀るべきものあらず。知るを要す、南北の兩宋、國勢の興廢と風氣の影響とによりて、その區別、自ら截然たるものあるを。

(二) 宋初の文

穢濁汚泥を極めたる一泓古池の水は、清泉を疏導して、之に注ぐも、容易に淨化されず、韓柳二家、才力雄傑なりと雖も、なほ全く八代文章の衰を挽回するに及ばず。宋初の文體は依然として五代衰殘の餘を承け、纖細獷纔雍正雅醇の態たるに遠し。この時に方り、駢儷の陋習を變じ、はじめて、古文を作りしものを、柳開とす。

柳開、字は仲塗、大名の人、開寶六年の進士なり。少にして、韓柳二家を慕ひ文を作るや、一に之を祖とす、然れども、體の艱澁に近きは、その短とするところなり。かつて、文を論じて曰く、古文は詞の澁、言の苦、人をして、讀み難からしむるに在るに非ず、其理を古くし、其意を高くするにあるのみ、と。王士正、開が能く言うて能く行はざるを譏る。然れども、風氣を轉移せしの功、固より大なり。紀曉嵐曰く、之を明にして、未だ融ならずと謂へば可なり、と。千古の公評たるに庶幾し。

次は穆修、字は伯長、鄆州の人、潁蔡二州文學椽に終る。その文章、師承するところを考ふるなしと雖も、天資高邁、韓柳に沿溯して、自得せしものゝ如し。其後一轉して、尹洙となり、再轉して歐陽修となる。その功、亦た尠からず。唯だ病とするは、修の文、往々にして僻論あり、蓋し、異を出し、新を標せしが爲にせしものならむと雖も、又惜むべしとす。

尹洙は、穆修に學ぶと雖も、たしかに出藍の譽を受くべきものなり。その文、古峭勁潔、柳穆二人の後を繼ぎ、尤も卓然として傳ふべし。邵伯溫の聞見錄云ふ、歐陽修、早く儷偶の文に工なり、河南に於て、洙を見るに及び、乃ち、韓退之の文を出して、之を學ばしむ、と。然らば、歐陽修、古文を以て一代を倡導せしもの、その法、一に之を洙に得たるなり。然ども、二家の文、甚だ相似ず。洙の文の簡嚴は、修の曲折抑揚と、結體、迥かに異なり。要するに、各その性の近きところを得たるのみ。錢惟演、かつて西都に守たりしとき、雙桂樓を起し、臨園驛を建て、歐陽修及び洙に命じて、記を作らしむ。修の文は、千餘言、而して洙は止だ五百字を用ひしのみ。修、その簡古に服せしといふ、この一話、偶ま前言を證すべきなり。

その他、宋朝の名臣、各作るところあり、今に其集を傳ふと雖も、未だ故習を脫する能はず、范仲淹の如き、その尤なるものにして、岳陽樓記の一篇、結構布置、頗る周密、敘景狀物、その妙を極むと雖も、その體は、居然たる駢儷の餘に出でしものなり。

(三) 宋初の詩

晩唐温李の新聲は、修辭を主とし、一時人心の好尚に投じ、且つ頗る學び易きを以て、宋初の詩人、皆之を模倣せり。而かも、楊劉錢三家の唱和に至りて、その弊、正に極まれり。楊億字は大年、建州浦城の人、天禧中、工部侍郎翰林學士に拜せられ、史館修撰を兼ぬ。劉筠、字は子儀、大名の人。錢惟演、字は希聖。三人の屬和を編叙したるものを西崑酬唱集といひ、因つて、之を呼んで、西崑體といへり。

李商隱の弊は、點鬼簿と獺祭魚とに在りしこと、かつて前に述べたるが如く、西崑の一體、世に盛行したる極、その必然的結果は、愈よ詩壇をして、萎微振はざるに至らしめたり。歐陽修、乃ち曰く、楊大年、錢劉諸公と唱和し、西崑集出てしより、時人、爭つて之に效ひ、詩體一變す。而して、先生老輩、その多く故事を用ひ、語辭にして曉り難きを患ふ、殊に知らず、是れ學者の弊なるを。子儀の新蟬、風來玉宇鳥先轉、露下金堂鶴未知と云ふ如き、故事を用ふと雖も何ぞ佳句たるに害あらむ。又、峭帆橫渡官橋柳、疊鼓驚飛海岸鷗の如き、その故事を用ひざるも、又豈に佳ならざらむや。蓋しその雄文博學、餘あり、皆施して可ならざるなく、前世の詩人と號せしもの、風雲草木の類に區々として、許渾の苦しむところと爲る如きに非ざるなり、と。この言、亦た時勢の影響を受くるを免れざるものにして、固より篤論に非ず。又假に數歩を讓り、錢劉諸人の如きものに在りては、猶ほ可なりとするも、末流餘派の輩に至りては、陋習殊に甚しきものあり。凡そ他を學ぶもの、その美處は刻苦するも猶ほ得ること難く、その缺點は無意識の中に牽纏するものなり。商隱の詩、用事の深僻、ひたすら貴ぶべしと誤想したる極、適々充實爛熟に失し、縹渺空靈の神韻、復た求むべからず。後進の徒、才力ともに薄きものは、往々にして、商隱の成句を竊み、生呑活剝、醜として愧ぢざるに至れり。中山詩話に、下の如き一條の奇聞を載す。かつて、内宴の際、優人商隱に扮するものあり、衣服敝裂、人に告げて曰く、吾、諸館職の爲に搒撻せられ、此に至れり、と。聞く者、爲に大噱せしといふ、亦た以て當時詩壇の通弊を知るべし。嚴羽、又かつて曰く、近世の諸公、乃ち奇特解會を作し、遂に文字を以て詩となし、議論を以て詩となす、夫れ豈に工ならざらむや。蓋し、一唱三歎の音に於て、歉たるところあり、且つその作、多く事を使ふを務む、字を用ふる、必ず來歷あり、韵を押す、必ず出處あり、之を讀む、反覆篇を終ふ、着到何くに在るかを知らず。その末流、甚しきものは、叫噪怒張、殊に忠厚の風に乖き、殆

んど罵詈を以て詩となす。詩、こゝに至つて一厄といふべきなり、と。元遺山の論詩絶句、又この意を承けて曰く、曲學虛荒小說欺、俳諧怒罵豈詩宜、今人舍笑古人拙、除卻雅言都不知、と。宋初の詩、殆んど言ふに足らず、その間、林逋等數家、僅に取るべし。

西崑の一體、その弊、すでに極まりしときに方りて、蘇梅二家の出づるあり、宋詩の氣運を一轉せり。蘇は豪放、梅は古淡、所長各異なりと雖とも、ともに刷格雅健、大に新意を出したるを觀るべし。宋初の詩、五季蕪野の氣の帶ぶるは、なほ初唐の諸家、六朝艶治の習を承けしが如く、梅蘇二家は、正に陳子昂、張九齡の地位に在るものにして上を承けて下を起すの一大關鍵たり。凡そ歷史は、數ば反覆するものにして、詩壇の趨勢、亦た此に漏れざるを知るべし

蘇舜欽、字は子美、景祐中の進士。後、事を以て出て、蘇州に居り、水石を買うて、自適し、官、湖洲長史に終る。古文に長じ、詩尤も妙。劉克莊かつて、その歌行を稱し、梅堯臣よりは放にして、軒昂不羈、その人と爲りの如く、蟠屈して近體を爲るに及べば、平夷妥帖を極むといへり。蘇學士集十六卷あり。梅堯臣、字は聖俞、宣城の人、詩を以て名を知らるゝこと三十年、終に一館職を得ず。晚年歐陽修等と唐書を修し、書成つて未だ奏するに及ばずして卒す。蘇東坡、かつて書を贈つて曰く、執事の名、天下に滿ち、而かも位は五品に過ぎず、その容色、溫然として怒らず、その文章、寬厚敦朴にして怨言なし、これ必ずや斯道に樂むところあらむ、軾、願くは與かり聞かむ、と。その人物の高潔なること、想ひ見るべきなり。堯臣仕進、頗る達せずと雖も、その名、中外に重し、歐陽修の雜著中、往々にして、その軼事を傳ふ。曰く、聖俞在る時、家甚だ貧、余或は其家に至り、酒を飲むに甚だ醇、常人の家、有するところに非ず。その得るところを問へば、皇親學を好む者あり、宛轉して之を致すといへり。余又聞く、皇親錢數千を以て、梅詩一篇を購ふものあり、その名、時に重きこと、かくの如し、と。又曰く、蘇子瞻學士は蜀の人なり、かつて海井監に於て、西南夷人賣るところの蠻布の衣を得たり。その文、梅聖俞春雪の詩を織り成す。この詩、聖俞の集中に在りては、未だ絶唱と爲さず、蓋し其名天下に重く、一篇一咳、夷狄に傳落し、異域の人、之を貴重すること、かくの如きのみ、と。

堯臣の詩論は、一に時弊を矯正せむが爲にせしものにして、その言娓々として、聽くべし。曰く、詩家意を率ゆと雖も、而かも、造語亦た難し。若し、意新に語工にして、前人の未だ道はざるところを得、これ善となすなり。必ず能く寫し難きの景を狀して、目

前に在るが如く、不盡の意を含み、言外に見はる、然る後に、至れりと爲す、と。又曰く詩句義理通ずと雖も、語、淺俗に涉りて笑ふべきもの、亦た其病なり、と。かくの如くして、能く西崑の陋習を翻し、雅正の音に反へすを得たりき。

歐陽修、二家の遺稿に序し、備さに一唱三嘆の意を極む。又かつて曰く。聖俞子美、名を一時に齊うす、而して、二家の詩體、特に異なれり。子美は筆力豪儁、超邁橫絕を以て奇となし、聖俞は覃思精微、深遠閑淡を以て意となし、各その長を極む。善く論ずるものと雖も、優劣する能はざるなり。余かつて、水谷夜行の詩に於て、略ぼ一二を道うて云はく、子美氣尤雄、萬竅號一噫、有時肆顚狂、醉墨灑滂霈、譬如千里馬、已發不可殺、盈前盡珠璣、一一難揀汰、梅翁事淸切、石齒漱寒瀨、作詩三十年、視我如後輩、文辭尤精新、心意雖老大、有如妖韶女、老自有餘態、近詩尤古硬、咀嚼苦難喂、又如食橄欖、眞味久愈在、蘇豪以氣轢舉世、徒驚駭、梅翁獨我知、古貨今難賣、語工非ずと雖も、粗ぼその髣髴を得たりと謂へり、然れども、之を優劣する能はざるなり、と。

文に於ては尹洙、詩に於ては梅蘇、これ宋初文界革新の一勢力にして、歐陽修に至りて、はじめて顯著なる効果を見る。次には、宋初の詞に就いて、一瞥の勞を取らむ。

(四) 宋初の詞

殘唐五代の間に創作されし詞が、宋に至りて大成せしは、なほ六朝の間漸を以て其端を開きし近體が、唐に至りてはじめて成形せしと一般、その狀勢、頗る相似たり。宋の初、大晟府を立てゝ、雅樂寮となし、日に新曲を製す。こゝに於て、小令の外、更に長調あり、周美成、柳耆卿の徒、待詔となり、舊聲を變じて新調となす。詞調の多數は、殆んど此間に成れり。そも詞の調あるは、なほ詩の律絕あるが如く、しかも一調必ずしも一體に止らず、往々にして數十の變體あり。萬紅友の詞律は、嘯餘譜を改訂せしものにして、塡詞圖譜の典據なり。その錄するところは、六百六十調、千百八十體の多きに上る。然れども、詞の體制、必ずしも之に止まらず、康熙御撰の欽定詞譜は、二百二十六調二千三百六體を算せり。その繁冗複雜、亦た想見すべし。

宋初の詞家、名あるもの、少しとせず。晏殊は、馮延己を喜び、自ら作るところ、亦た之に減ぜず。その子幾道、亦た父の風あり。黃庭堅の序、その合ふものは高唐洛神の流、その下なるものは桃葉團扇に減ぜざるをいふ。然れども、なほ五代の初態に沿ひ、新奇を出す能はず。張先は、三影の稱あれども、詞は必ずしも本色に非ず。

柳三變、字は景莊、喜んで新詞を作る。その無行を以て黜けらるゝや、名を永字を著卿と改め、又仕へて屯田員外郎に至る。藝兎雌黄、之を斥け、羈旅窮愁の辭に非ざれば、閨門淫媟の語、而かも俗を離れざるが故に、大に世に行はると稱すれども、斷じて酷に過ぐるのみならず、風流旖旎、人を移すに至りては、殆ど匹なし。傳ふるところに據れば、樂工の新腔を得るや、必ず就いて其詞を求め、凡そ井水ある處、その作を誦せざるなく、後に金主亮、又その望海潮の一闋を誦するに因りて、移兵百萬西湖上、立馬吳山第一峰の雄志を起したりといふ。而して、耆卿をして、千古ならしむるは、雨淋鈴、今宵酒醒何處、楊柳岸曉風殘月の數語に在り。まことに、清脆の極を推す。周邦彥の作精深華麗、氣格渾成、但だ音律を以て長を見るのみならず、賀方回、亦た小詞に工なり。他に閨秀詞家として、李清照あり。格力高秀、詞の正宗を以て目せらる。之と前後して、宋子京兄弟、魏夫人等皆名あり。

詩の近體が、初唐に至りて、猶ほ六朝艶冶の習に沿ふと同じく、宋初の詞、亦た花間の舊腔を傳ふ。而して、音律の拘束を離れ、一種激越の新聲を掇めしものを、蘇東坡となすげにや。宋の文界は、歐蘇二公を得て、あらゆる方面の革新をなせりき。

(五) 歐陽修

歐陽修、字は永叔、吉州廬陵の人、四歲にして孤なり。母鄭氏、賢にして、親ら之に誨へ、家貧にして紙筆を得る能はざるを以て、荻を以て地に畫いて、書を學ばしむ。稍や長じて、隣里より書を借り、讀んで之を手抄し、遂に博く群書を極め、聲名亦た隨つて起る。はじめ、韓愈の遺稿を得て、心之を慕ひ、苦志探賾、寢食を忘れ、必ず轡を並べて、之と相馳せむと欲す。後、進士に擧げられ、西京の推官に調せらるゝに及び、始めて尹洙に從つて遊び、古文を作りて、當世の事を論議し、迭に相師友し、又梅堯臣と遊び、詩歌を爲りて相唱和し、遂に文章の名を以て天下に冠たるに至る。蓋し二人に得るところ少からざるなり。官は觀文殿學士太子少師に至りて致仕し、熙寧五年、六十歲にして卒し、太子太傅を贈られ文忠と謚す。官途の經歷、略ぼ上の如く、その本領は、明に經世家たるに在り、加ふるに、醇乎たる北人的性格を有し、その人と爲り、天資剛勁、義を見て勇を爲し、機穽前に在り、之を觸發すと雖も、顧みず、放逐流離、再三に至るも、志氣自若たり。然れども、一片の雅懷、胸中頗る灑落、天分の高きこと、自ら想見するに堪ふるものあり。晩年別に六一居士と號し、自ら傳を敘して曰く、藏書一萬卷、集金石遺文一

千卷。琴一張、碁一局、常置酒一壺、以吾一翁、老此五物間、豈不爲六一乎と。加ふるに、後進を援引して、唯だ及ばざるを恐るゝ如く、蘇洵父子・曾鞏・王安石の輩、皆その聲譽を優揚し、以て世に顯はれしむ。要するに、歐陽修は、人物性行、文章德器、兼ね備はり、宛として古大臣の風あり、まことに、千古不朽の模範的政治家たるべきものあり。蘇轍かつて曰く、山に於ては、終南嵩華の高きを見、水に於ては黃河の大にして且つ深きを見、人に於ては歐陽公を見る、と。當年の聲望、亦た想ふべきに非ずや。

その學問は、精該なる經學に兼ぬるに、犀利なる史眼を以てせり。故を以て、事を論ずるや、理義透徹、而かも論斷鑿々として、據るところあり、決して、輕浮脆弱に流れず、天才自然豐約にして、度に中り、簡にして明、信にして通、物を引き、類を連ね、之を至理に折し、以て人心を服し、超然として、獨驚し、衆能く及ぶなしと稱せらる。文心すでに細、結構周匝、一點の罅漏なく、而かも、典雅雍容の趣を曲盡するところ、まことに爭ふべからざる人格の反映にして、最も學び難しと爲す。蘇洵、之を評して曰く、執事の文、紆餘委備、往復百折、而かも條達疏暢、間斷するところなく、氣盡き語極まり、急言竭論、而かも、容與閑易、艱難勞苦の態なし、と。之に次いで、東坡は曰く、大道を論ずるは韓愈に似、事を論ずるは陸贄に似、事を記するは、司馬遷に似、詞賦は李白に似たり、これ予の言に非ず、天下の公論なり、と。楊東山、亦た之を言へり。次に、その人と爲りを貶斥し、殆んど亂臣賊子に比せし執拗なる王安石も、かつて祭文を作つて曰く、豪健俊偉、怪巧瑰琦、その中に積むもの、は、浩として、江河の渟蓄するが如く、その外に發生するものは、爛として、日星の光燿の如く、その清音幽韻、凄は飄風急雨の驟かに至るが如く、その雄辨閎辭、快は輕車駿馬の奔馳するが如く、世の學者、識ると識らざるとを問ふなく、而して、其文を讀めば、其人知るべし、と。以て其値を知るべきなり。

修の文、すでに此の如く、而して、特に一言すべきは、その史筆に在り。新唐書は宋祁等との合撰に係り、其手に成りしは、本紀表志等にして、未だ敘事の妙を發揮するに及ばずと雖も、その文、簡にして明達、就中諸志論の如き、識見・文章ともに高し。五代史は、全く自撰に係り、議論敘事、兼ね備へ、精當簡切、慷慨淋漓、自ら磨滅すべからざる一點の血性あり、直に史遷の壘に逼り、漢代以後、唯一の歷史文學を推すに足る。その他、數篇の史論、ともに必傳の大文字なり。

宋代文運の開拓者たる歐陽修は、一代の文宗たると同時に、兼ねて詩壇の牛耳を

握れり。その詩は、梅堯臣に得るところ多し。修の年、堯臣より少きこと、僅に五歳、其死は、堯臣に後るゝこと十二年、この間、聲價愈よ高かりき。その文、すでに韓を學び、詩亦た韓より出で、兼ねて其源に溯つて杜を究む。近體は篇幅短きを以て、未だ才力を揮霍するに及ばず、古の一體、ひとり儁絶を推す若溪漁隱曰く、歐公詩を作る、蓋し自ら胸臆より出でむと欲し、背て前人を踏襲せず、亦た其才高きが故に、牽强の迹を見ざるのみ、と。臞翁の評に曰く、歐公は瑚璉の如く、止だ之を廟堂に施すべし、と。論者又云ふ、その詩は、春服すでに成り、春酒すでに釀し、山に登り、水に臨み、竟日歸るを忘るゝ如し、と。まことに雍々たる雅正の音、意言の外、なほ、餘地を存し、從容迫らざるは、梅蘇二家の外に在りて、拔載別に一隊を爲す所以。廬山高、明妃曲の二篇、その自負するところ、當行本色を窺ふに足るべし。

穆尹の文、梅蘇の詩を合せ、歐陽修、一たび復古の氣運を振ひ、之に次ぐもの、蘇東坡あり。その父子三人、相携へて蜀の山中より出て、三蘇の聲價、忽ち京師に高かりしは、實に修が翰林學士たりし時にして、ともに汲引の惠を負へるなりき。

(六) 蘇洵

蘇洵、字は明允、蜀の眉山の人。年二十七、始めて憤を發して、學を爲し、試に應じて、中らず、悉く曾て爲りしところの文を焚き、戸を閉ぢて、益す書を讀み、遂に六經百家の說に通じ、至和嘉靖の間、その二子軾轍を提げて、京師に至る。時に歐陽修、大名あり、乃ちその著、權書衡論以下、二十二篇を上る、士大夫、爭うて之を傳へ、一時の學者、之に倣うて文を爲る。韓琦、朝に奏し、召して舍人院に試む、洵、疾と稱して、至らず、皇帝に上る書、凡そ六千言を、草し、遂に、除せらて、秘書省校書部となり、姚闢等と、同纂して、太常因革禮一百卷を爲る、書方に成りて卒す、年五十八。帝聞いて、之を哀み、縑銀二百を賜ふ、軾之を辭して、贈官を請ひ、因つて特に光祿寺丞を贈らる。子六人、皆夭し、唯だ軾轍のみ存せり。而して、この二子、ともに相並んで千古の文名を擅にせり。

洵、蜀の地に長じ、その性は樸直、その才は橫矯、賢師友なく、獨力學をなし、一家の文を出し、二子に誨へ、古文を作らしめ、蘇氏の文脈をして、百世に絶えざらしめしもの、まことに、一代の英豪を推すべし。而して、蜀中自然の風氣を受けし結果として、その學、儒に偏せず、古しへの縱橫の術を喜び、眼光最も犀利、宛然たる豫言者的態度を持

せるは、他に匹儔を絶てる所以。かつて、書を韓魏公に上つて曰く、洵、書を著す、他の長なし、兵事を言ひ、古今の形勢を論ずるに及びては、自ら賈誼に比するに至る、と。田樞密に上る書、又之を言ふ。知るを要す、この老、嫺強粗豪、賈生を以て自ら任じたるを。

その集中、得意の作は前に擧げし權書衡論にして、自家の本領を明かにし、且つ當世の時務を識せしものなり。權書の篇目は、心術、法制、強弱、攻守、明間、孫武子、貢、六國、項藉、高祖。衡論の篇目は、遠慮、御將、任相、重遠、廣士、養才、申法、議法、兵制、田制、二書合せて二十篇、申韓以後、政治的論策の最も見るべきものなり。凡そ古代の史的事實を假り、當世を暗刺するは蘇家の慣俗、なほ李太白等諸人が、古樂府の意を翻し、自家の懷抱を述ぶると一般、その得力の處を見るに足る。之を外にして審勢、審敵の二篇あり。

洵の文、全く孟子より出で、古勁簡至、句を錬り、字を鍛ふる處、二子猶ほ及ばず、且つ譬喩に長じ、堅說横論、覇氣醇勃として、楮表の間に隱見し、波瀾横生、頗る精彩あり。曾子固曰く、明允の文、侈能く之を約に盡し、遠能く之を近に見、煩能く亂れず、肆能く流れず、江河を決して下るが如く、星辰を攀ぢて上るが如し、と。亦た決して溢美の言に非ず。洵すでに文を善くす、而して、詩は遂に所長に非ず、その作、極めて少し。

(七) 蘇軾

宋代の詩文、蘇軾を以て狀元となす。渠は曹子建以後、不世出の天才なり。名は軾、字は子瞻、景祐三年を以て生れ、幼にして穎悟、博く經史に通じ、好んで莊子、賈誼、陸贄の書を讀む。嘉祐二年、弟轍と同じく、禮部に試みらる。主司歐陽修、その刑賞忠孝論を得て、驚き喜んで曰く、老夫當に此人を放つて一頭地を出さしむべし、と。因つて、擢んで多士に冠せしむと欲せしが、すでにして、その客曾鞏の爲るところなるを疑ひ、之を第二に置く。當時場院舉子の文を爲る、奇澁を尚び、或は讀んで句を成す能はざるものあるに至る。修その弊を革めむと欲し、凡そ文の彫刻に涉るもの、皆之を黜く。こゝに於て、榜を放つに及び、平時聲名ありし劉惲輩の如き、皆選に預らず、而して、軾實に第二人たり。その弟轍、亦た選中に在り。仁宗、蘇氏兄弟の對策を得、喜んで曰く、吾子孫の爲に二宰相を得たりと。因つて、大理經事僉書鳳翔判官に除す。英宗即位、これを召して史館に直せしむ。神宗の朝、王安石と議論合はざるを以て頻りに書を上つて之を論じ、遂に外を請うて、杭州通判となり、從つて密州に知となり、又徐州、湖州に移る、すでにして、又朝に入りしが、烏臺の詩案に坐して、臺獄に下り、次いで赦されて黄州

に貶謫せられ、弟轍亦た坐して筠州に貶せらる。軾、すでに黄州に在り、室を東坡に築いて、自ら東坡居士と號し、日々山水に嘯傲す。前後赤壁の賦の成れる、正に此間に在り。その後年、汝に移され、汝より常に遷り、哲宗立つに及び、起居舍人に擢んでられ、中書舍人に遷り、尋いで翰林學士に叙せられ、侍讀を兼ね、便殿に召對す。宣仁后曰く、卿の官、遽に此に至るは、乃ち先帝の意なり。先帝、卿の文章を誦する毎に、必ず嘆じて、奇才奇才と云ふ。但だ未だ進用するに及ばざりしのみと。軾、覺えず、哭して聲を失す。后と哲宗と、亦た泣き、左右皆感涕す。しばらくして、坐を命じて、茶を賜ひ、御前の金殿燭を徹し、送つて院に還へす。然れども、程頤の徒と合はざるを以て、終に外を請ひ、龍圖閣學士を以て、杭州に知となる。後召され復た翰林に入りしが、數月にして、出でゝ潁州に知となり、移されて揚州に知とし、又入つて兵部尚書侍讀となり、禮部尚書より端明殿學士を以て、翰林侍讀を兼ぬ。時に宣仁后崩じて、哲宗政を親らす。軾、又外を乞ひ、兩學士を以て定州に知たり。紹興の初、蘇黨意を得、元祐君子の黨概ね皆斥けらるるに及び、亦た瓊州に貶せられ、徽宗即位、永州に徙され、赦されて還るや、幾もなくして、常州に卒す。實に建中靖國元年なり。年六十六。高宗の時、資政殿學士を贈り、又太師を贈り、謚して文忠といふ。

軾、人と爲り、大節氣慨あり、議論直論曾つて己を枉げて流俗に阿らず、操守頗る堅し。然れども、遂に道學の陋習に陷らず、之に加ふるに、襟懷坦然、一片の至情、藹然として親むべきものあり、能く人の善に與みして、兄弟交友の誼に厚し。李公擇・王定國・王晉卿・孫莘老・黄魯直・秦少游・晁補之・張文潛・趙德麟・陳履常の諸人、皆之に從遊し、終始間なく、且つ各詞名を後世に傳へたり。朝に在りては、徐君猷・孟亨之・詹範・周彦質・孫叔靜・張中の如き、尤も之を景慕し、その行止出處を同うし、遂に謂ゆる蜀黨を結ぶに至る。林下の交游、また頗る多く、或は患難に從ひ、死に至りて、なほ悔ゆざるものあり。その人、すでに一世に高く、名聲亦た頗る隆、片言瑣事、亦た乃ち江湖に流傳し、葉に銘し笠を借るの類に至るまで、百世に艶稱せらる、亦た以て當日の重望を想見すべし。

その學問は、極めて該博、三教の書、一も渉獵せざるなく、且つ蜀人の特質として、兼ねて其父の遺風として、種族的に、遺傳的に、鬼谷縱横の術數を交へたり。王安石、科擧の法を定め、專ら策論を以て人を取らむとするや、軾、その弊を極論し、實學經術を以て士を取るべきを切言せり。而して、自己の所長は、實に策論に在り。唯だその利害を

知れるを以て、己の好むところを强ゐざるなり。蜀人の性格は、驃逸險奇にして、矛盾せる、南北兩方の特長を兼ぬるを常とし、李白の如き、その適切なる代表者なりき。故を以て軾の人と爲り、その半面は、到底時事を離る能はず、その炬眼は、當時政界の趨勢を洞視して、之に對する大經綸を公言するを憚らず。然れども、他の半面には、出世間的願望あり、その黄に貶せられ、嶺南に謫せらるゝや、瘴烟蠻雨の境に在りて、能く安心立命を得、死生患難の際に談笑し、曾て病まず。その儋耳に在るや、乃ち云ふ、「門を杜ぢて屏居し、寢飯の外、更に一事なく、胸中廓然として實に荆棘なし。」と。一種の靈慧、能く矛盾せる兩極の特性を統率し、長しへに物外に超然たるを得たりしものゝ、すべての方面に超絶的たらむと欲するが故のみ。詩文雙絶、書畫亦た一家をなすもの、豈に故なしとせむや。

天才すでに傷拔、人物すでに高潔、識力すでに超邁、眼は古今を空うし、氣は宇宙を兼ぬ。故に其言に發するところ、一として奇警ならざるはなく、且つ根柢の確固なる、終に搖動すべからざるものあり。昔人、軾の詩文、短章零句、なほ且つ必ず一篇の警策あるを稱せしもの、まことに故ありと爲すべし。要するに、その人格、頗る偉大、趣味は、

あくまで多面的にして、いづれも、その極に到達せり。是れ千古の神才たる所以にして、全く天授なり。かくの如き內的基礎あり、之を筆端に表彰する手段、即ち文章の技工に至りては、さすがに、其父を學びて、出藍の譽を得たるもの、到底尋常家數の比に非ず。かつて其姪に與へて、作文の法を論じて曰く、凡そ文字は、少小の時、須らく氣象崢嶸、采色絢爛たらしむべし。漸く老ゆれば、漸く熟し、乃ち平淡に造る。その實、是れ平淡ならず、絢爛の極なり。汝、只だ爺伯而今の平淡を見、一向只だ此樣を學ぶ、何ぞ敢て舊日應舉の時の文字、高下抑揚、龍蛇捉へて住まらざる如きを見、當に且つ此を學ばざる、と。その自得せる修辭の工夫、略ぼ個中に窺ひ見るべく、謂ゆる「新意を法度の中に出し、妙理を豪放の外に寄する」もの、坡文の百代に雄視する所以なるを知るべし。蓋し坡文は、古人の所長を集めて、大成したるものなり。その少時、莊周、賈誼、陸贄の文を好みしこと、かつて前に述べたるが如し。而して、その飄忽變化は莊子に類し、その俊逸雅健は賈誼に似、その圓轉周到は陸贄と相若く。その他、古代鉅匠の長は、期せずして、坡文中、適切の場合に應じて、類似を發見し得べし。然れども、單に類似するのみならば、應聲蟲の屬、必ずしも貴ぶに足らずと雖も、その妙は、各家の特色を一身に兼

ね、之を同化し、巧に運旋したるに在り。これ文學史上、特絶の地位を占むる所以にして、支那の散文は、こゝに至りて、正に其變を極盡したりといふも可なり。坡文を評するもの、古往今來、殆んど算するに堪へずと雖も、その自評の語、最も肯綮に中れるに若かず。曰く、吾が文は萬斛の泉源の如く、地を擇ばずして皆出づべし。平地に在りては、滔滔汩汩、一日千里と雖も難なし。その山石と曲折するに及べば、物に隨ひ、形を賦し、而かも知るべからざるなり。知るべきところの、ものは、常に當に行くべきところに行き、常に止らざるべからざるところに止る、かくの如きのみ。その他、工と雖も、吾亦た知る能はざるなり、と。東坡の文、ひとり姿致體制を曲盡せしのみならず、題目に於ても、敘記論策以下、備らざるなく、深廣内外、兼ね到れり。王安石は畢生の政敵なれども、常に其文を激賞し、時に人を介して、一字の師となりしことあり、唐宋の作家、紛として雲の如しと雖も、搆想の奇、規度の大を併有するもの、唯だ斯公あるのみ。

偉人の活動は、無限の進程を趁ふものにして、坡文は老後に至りて、愈よ精錬を極めたり。その仕途に於けるや、一生を擧げて、黨禍の渦中に投ぜられ、起伏昇沈、しばらくも止まず、然れども、一片の志氣大節、凛然として存し、百錬の剛、終に挫折せず、萬里

投荒の後、文心愈よ活、その謂ゆる海外文字、晩年の作と雖も、毫も衰颯の態なく、筆意最も雄健、流宕を變じて勁拔となし、暢達を變じて簡錬となし、たとへば健鶻空を擊ち、老氣秋に横ふの概あり、黄庭堅、「東坡嶺外の詩文、之を讀めば人の耳目をして聰明ならしむ、清風外より來る如きなり」といへるは、その文境を評したるものにして、沈德潛、「天粟を雨らし、鬼夜哭するに庶幾し」といへるは詞筆直に化工を欺くをいへるなり。その才藻、なほ或は庶幾すべし、精思と力量とに至りては、遂に及ぶべからず。

軾は宋朝第一の文豪たり、而して、詩壇に於ける位地は、むしろ、之に駕するものあり。その文に於て、學殖の横溢したる如く、詩に於ても、才氣の殊に縱横なるを見るべく、議論英爽、筆鋒精鋭、向ふところ敵なし。唯だ、その往々にして理路に渉り、言筌に落ちしは、時勢の感化に外ならず、之に加ふるに、材料多きに過ぎ、時に充實繁冗を避けざるは、腹笥の宏富、偶ま累を爲せしに非ざるか。要するに、竟に是れ宋人の詩、唯だ雋絶雅健、骨力風韵、並び勝るは、その百代に雄視する所以なり。東坡かつて自ら其詩を評して云ふ、我詩雖云拙、心平聲相和、と。意を用ひずして、偶然之を得、喜笑怒罵、皆詩となりて、終に聲韵の和を失はざる、まことに自評に違はず。今試に古人の評語五六を

擧ぐれば、蘇轍は、その功力を評して、精深華妙といひ、黄魯直は、その雄大を評して、大國の楚、五湖三江を呑むが如しといひ、蔡絛は、その宏放を評し、日月と光を爭ふといひ、敖陶孫は、その渾涵汪洋を評して、天漢を屈注し、滄海を倒通し、變幻百怪、終に渾雅に歸すといひ、陳後山は、その傳統を評して、詩、老杜に至つて極まる、蘇黄復た之を振うて正統墜ちずといひ、乾隆御批、之を總括し、前の曹謝陶謝、後の李杜韓白、學ばざるところなく、亦た工ならざるところなし、同時に歐陽王黄、猶ほ俱に遜謝す、洵なるかな、千古に獨立す、一代一人の詩に非ざるなり」と。近世の沈德潛は曰く、蘇子瞻、胸に洪爐あり、金銀鉛錫、皆鎔鑄に歸す、その筆の超曠、天馬羈を脱するに等しく、飛僊遊戲、窮極變幻、而して適まま意中出さむと欲するところの如し、韓文公後、又一境界を開闢するなり、と。趙甌北、又曰く、文を以て、詩を爲る、昌黎より始まり、東坡に至り、益す大に厥辭を放ち、別に生面を開いて、一代の大觀を爲す、今試に平心之を讀むに、大概才思横溢、觸處春を生ず、胸中書卷繁宏、又以てその左旋右抽に供するに足り、意の如くならざるなし、その尤も及ぶべからざるもの、天生の健筆一枝、爽は哀梨の如く、快は并剪の如く、必ず達するの隱ありて、顯し難きの情なし、これ李杜の後に繼いで、一大家たる所以なり。而して、その李杜に若かざる處、亦た此に在り、蓋し李詩は、高雲の空に遊ぶが如く、杜詩は喬嶽の天に矗するが如く、蘇詩は流水の地を行くが如く、詩を讀むもの、此處に於て、眼を着くれば、三家の眞を得べし、と。

如上諸家の評、東坡の詩を贊するに於て、更に一字の加ふべきなきが如し、然れども、東坡天縱の才、古人規矩の、間に屑々たらざるを以て、世の字歩句趨、唯だ古作者の準繩を失はむを懼るゝの徒は、之を以て、詩體を破壞するものとなし、之を嘗議するもの、亦た少からず、東坡同時の人にして、張舜民、楊時の如き、その雅道を失するを論じ、嚴羽は、東坡が、一に己の意を以て、之を出し、古を師とせざるを以て、詩の大厄となし、又詩を以て、世を欺くものといへり。而して、元遺山に至りては、只知詩到蘇黄盡、滄海横流却是誰といひ、蘇門果有忠臣在、肯放坡詩百態新といひ、その門下を併せて、痛罵を極め、延いて宋詩をして、半文錢の價値なきに至らしめむとす。今、之を熟思するに、張楊輩は、識力ともに卑く、正に是れ、夜光の珠、暗中に投ずるとき、匹夫劍を按じて、之を見ると一般。嚴羽は、詩を以て別才となし、理に渉るを排するもの、その主奉するところ、異なるが故に、柄鑿固より相容れず。若し夫れ、遺山に至りては、自ら才能を衒

ひ、快を一時に取り、名を後世に傳へむが爲の狡獪手段に外ならず。坡詩、たとひ李杜に及ばざるも、なほ韓愈に遜らざるは、今日の定論なり。韓の詩、大はあり、然れども、險怪晦澁を病む、終に蘇詩の暢達自在なるに如かず。若し坡詩の特長を求むれば、譬喩の妙、第一なるべく、禪を借りて詼となすもの、又之に次ぐべし。

詩文すでに雙絶、而して軾の塡詞に於けるや、實に北派の先、大江東去、水調歌頭の數闋、千古の絶調たり。然れども、其詩に於けると同じく、これも亦た別派の變調なり。陳後山曰く、東坡は敎坊雷大使の舞の如く、天下の變を極むと雖も、要するに本色に非ず、と。王漁洋又曰く、蘇公自ら云ふ、吾、醉後草書を作る、酒氣拂々、十指の間より出づるを覺ゆ、と。黄魯直亦た云ふ、東坡の書、海上風濤の氣を挾む、と。坡の詞を讀む、當に是の如きの觀を爲すべく、瑣々として、柳七と錙銖を較ぶ、乃ち髯公の笑ふところとなる無からむやと。彭孫遹、一語を以て之を評して曰く、長公麗にして壯、と。

軾の子三人、邁、迨、過といひ、皆文を善くす。就中、過は、その白眉にして、その著、斜川集あり。詩文ともに妙、又書を善くし、小坡の目に負かず、最も傳ふべきなり。

(八) 蘇轍

蘇轍、字は子由、明允の次子にして、子瞻の弟なり、年十九、父兄に隨ひ、京師に至る。兄軾と友于の情、尤も厚く、同じく進士の第に登り、商州軍事推官となる。神宗の朝、王安石の青苗を論ずるに當り、怒に觸れて、他職に徙され、後、軾が詩案を以て罪を得るに坐し、謫せられて筠州の鹽酒稅を監し、移つて績溪縣に知たり。哲宗即位、召し入れて右司諫となし、起居郎中書舍人より戶部侍郎に進み、軾に代りて、翰林學士となり、尋いて、吏部尚書を權し、契丹に使して還るに因り、御史中丞となり、屢ば大議に與かり、尙書右丞に拜し、門下侍郎に進む。紹聖の初、事を言ふを以て、落職して、汝州に知となり、其後、袁化雷循等の諸州に徙る。徽宗の朝、又永岳二州に徙され、すでにして、太中大夫に復して、祠を奉ぜしむ。蔡京國に當るに及び、又秩を降して、祠を罷め、許州に居り、再び太中大夫に復して、仕を致し、室を許に築いて、潁濱遺老と號す。卒するとき、七十四、端明殿學士を追贈せらる。

蘇氏の兄弟二人、その兄の豪放豁達なるに對して、その弟は、沈着にして細心なりき。今夫れ子を視ること、親に如かず。老泉の先見、實に能く之を知れり。その名二子說

に曰く、軾や、吾汝の外飾せざるを慢るゝなり。轍は、善く禍福の間に居るものなり。轍や、吾免るゝを知ると、東坡又云はく、念子似先君、木訥剛且厚、と。これが故に、轍も亦たゞ能ば黨禍の陷中に展轉したれども、委蛇從容、高齡を以て、天命を全うするを得たり。人格の異、實に此の如く、その文に見はるゝもの、亦た自ら差なき能はず。軾は縱橫馳突、才氣を以て勝ち、轍は渟蓄淵涵、法度を以て勝る。二蘇の文、なほ李杜の詩の如く、李郭の兵の如く、流動變化の神趣に至りては、後者固より前者に讓らざるを得ざるものあり。

轍は、深沈恬淡以て其性となすものなりと雖も、名節を枉げざるに至りては、まことに、坡老の弟たるに負かず。加ふるに、均しく家學を承け、力を子史に得たるを以て、その所長は、居然として論策に在り。識力卓拔、文章銳雋、決して、その父兄に讓らず。就中その文致委曲明暢、譬喻層出、長技を擅にしたるは傳家の訣にして、理を言ふの精該着實は、むしろ父兄の上に在り、人情世故に透徹するものに非ざれば、遂に能はず。三蘇の稱、固より宜なりといふべし。

(九) 曾王二家

歐蘇と相並んで、宋代の文章を重からしむるものを、曾王二家と爲す。この二人、褒貶今に定らずと雖も、曾の溫雅、王の精悍、ともに是れ大家たるを失はず。

曾鞏、字は子固、建昌南豐の人、孝友を以て聞こゆ。嘉祐二年の進士、官は中書舍人に至る。元豐類藁五十卷あり。鞏は儒士にして、才氣に乏しく、文を作るや、典雅餘あつて精彩足らず、唯だ學術醇正なるを以て、後人棄てず、明清諸家、皆之を宗とす。近世方望溪一輩、謂ゆる桐城派の諸人、皆かくの如し。凡そ才氣短なるもの、多く光華偉麗の文を避け、沈靜溫恭に趨き、その極、庸熟爛腐に流る。南豐の文、遂に到れるものに非ず。

王安石、字は介甫、臨川の人、少にして讀書を好み、一たび目を過ぐれば、終身忘れず、文を屬し、筆を動かすこと、飛ぶが如し。曾鞏、之を歐陽修に薦き、修爲に譽を延き、進士の第に上らしむ。後、志を得るに及び、修を譏斥し、又鞏と相異にす。神宗かつて安石を鞏に問ふ、鞏云ふ、文學行義、揚雄に減ぜざるも、吝なるが故に及ばざるなり、と。帝云ふ、安石富貴を輕んず、何の吝かある、鞏云ふ、爲すことあるに勇にして、過を改むるに吝なるのみ、と。帝の朝、擢でられて、參知政事となり、その黨、呂惠卿等を擧げ、新法を施行

し、屢ば大獄を起し、朝野騷然たり。然れども、その後昇沈數回志ざすところ、終に行はれざるを以て、外を求め、元豐三年、僕射觀文殿大學士を以て卒す、年六十八。安石の人と爲りに就いては、是非の論、未だ決せず。然れども、要するに、險辣敏捷なる政治家にして、學識經驗、ともに備はり、法理家的頭腦と理財家的手腕とを併有せしもの、謂ゆる新法も、亦た決して苛法酷令に非ず、その規畫、大に觀るべきものあり。たゞ惜しむべきは、その意志、強に過ぎて、執拗固僻に近く、且つ人と爲り、狹量にして他を容るゝ能はず、恩讎必ず報ゐ、動もすれば殘虐に流るゝに在り。故を以て、その黨與は、悉卿一輩の小人にして、唯だ其意を迎合するを勉め、之をして、怨を買ひ、終に滿朝の名臣と天下の人民とに誤解せられ、拭ふべからざる姦邪の汚名を竹帛に貽すに至らしむ。凡そ政治家たるものは、德望と雅量とを欠くべからず、安石の一生の如き、まことに、萬世の般鑑たるべきなり。

紀曉嵐、かつて安石の文を評して曰く、菁華具に在り、その波瀾法度、實に自ら不朽に傳ふるに足れり。朱子の楚辭後語に謂ふ、安石位を宰相に致し、毒を四海に流す、而して、その言、生平の行事、心術と、略ぼ毫髮の肖たるなし、夫子予に於て之を改むの嘆ある所以、これ誠に千古の定評、と。然れども、是れ人格に對する好惡の情を以て推及せし僻見のみ。君子は人を以て言を廢せず、況んや、安石の人と爲り、前に述べたる如く、必ずしも、奸邪の賊となす能はざる者あるに於てをや、安石の文、一種の特色あり。拗折峭深、一片精悍の氣を含むは、他人に於て見る能はざるところ。その仁宗に上つて事を言ふ書の如き、無慮數千言、無數の見解、無數の話頭、口を衝いて出て、議論愈よ多端にして、文心愈よ整齊、固より尋常家數の比に非ず、以て豹の一斑を知るべし。その詩に於けるや、亦た然り。唐子西、かつて地幡三楚大、天入五湖低の一聯を擧げ、杜甫の句法を得たるを稱す。かつて自ら曰く、力去陳言誇末俗、可憐無補費精神、と。故に晚年に至れば、意を用ふること、益す苦、詩律尤も精嚴、造語用字、間、髮を容れず。然かも、意と言と會し、言、意に隨つて遣り、渾然天成、殆んど牽率排比の處を見ず、小詩また雅麗精絕、流俗を脫去す。黃山谷曰く、之を諷味する每に、便ち沉鹽、牙頰の間に生ずるを覺ゆ、と。詩文雙絕、さきに蘇軾あり、而して、之と旗鼓相當るに庶幾きもの、唯だ安石あるのみ。善いかな、この二人、政治上の敵たるに拘はらず、文字上に於ては、互に深く推引し、各自の長所を認め、終に相厄する無かりしや。

（一〇）蘇門及び其他の諸家

蘇家の文脈は、之を其子に傳へ、詩統は之を門下の諸秀才に傳へたり。然れども、遂に相及ばざるもの、偶ま以て東坡天縱の才、到底他の摸倣を容れざるを知るべし。黄庭堅・張耒・晁補之・秦觀、世に蘇門の四學士と稱し、之に陳師道・李薦を加へて、六君子となす。この諸人、或は文章を以て知らるると雖も、ともに詩詞を以て重きをなすが如く、就中、黄庭堅、最も傑出し、今に至るまで、並稱して蘇黄といふ。

黄庭堅、字は魯直、號は山谷、一に涪翁といふ、江西の人。進士に擧げられて、北京に教授するや、蘇軾國子監たり、その詩文を見、萬物の表に獨立するを嘆じ、薦めて曰く、瑰奇の文は當世に絶妙に、孝友の行は古人に追配すべし、と。仍つて著作佐郎に遷り、神宗實錄を撰し、起居舍人に擢んでられ、紹聖の初、鄂州に知となりしが、章淳・蔡京に惡まれ、しきりに貶謫せられ、晩に宜州に移つて卒す。詩詞に工に、又行書に妙なり。

庭堅は謂ゆる、江西詩派の祖なり。呂居仁、かつて江西詩派の圖を作り、山谷より以下、二十五人を列し、以て法嗣となして、謂へらく、その源派、皆山谷より出づ、と。その序數百言。然れども、選擇公ならず、議論審ならず、黨同伐異、宋人の通弊たるを知る。故に

苕溪漁隱、之を論じて曰く、豫章自ら機杼を出し、別に一家を成す、清新奇巧、これその所長、若し抑揚反覆、盡く衆體を兼ねたりといはゞ非なり、と。

山谷の詩、生幻捶鍊自ら一家をなす。但だ勉めて尋常の語を避けむと欲し、音節の和諧と風調の圓美と、その好むところにあらず、故に峭拔拗深の極、僻に入るを顧みず。東坡かつて曰く、黄魯直の詩文は、蝤蛑珧柱の如く、格韵高絶、盤餐盡く廢す、然れども、多食すべからず、多食すれば、風を發し、氣を動かす、と。苕溪漁隱、之を以て一時名を爭ふの詞となせども、語に分寸あり、正に其病に中れり。陳後山曰く、魯直杜を學び、奇を求むるに過ぐ、坡の物に遇うて奇なるに如かざるなり、と。林艾軒又曰く、丈夫客を見れば大踏歩し、便ち出でゝ去る、若し女子なれば、即ち許多の粧裹ありこれ坡谷の別なりと。ともに、蘇黄の相異なるを辨ぜしなり。元遺山曰く、古雅難將子美親、精純全失義山眞、と。沈德潛曰く、江西派、黄魯直太だ生、陳無巳太だ直、皆杜を學んで、未だ其戴を嗜はざるもの、然れども、神理未だ浹からず、風骨猶ほ存せり、と。偶ま以て得失を見るべし。その詞、亦た峭拔、偶然興到、造語高妙の處、尤も傳ふべしとなす。

張耒はじめ文に長す、東坡その汪洋冲澹を稱し、一唱三嘆の音ありといへり。晩年

詩を好み、平淡は白居易に效ひ、樂府は張籍に效へり。晁補之、古文を作れば波瀾放濶、蘇氏父子と馳騁すべく、諸體の詩、風骨遒上、張秦と並び驚せ、亦た未だ後先を決する能はずと稱せらる。秦觀は、少年の時策論を作り、神鋒雋利なり。その後、詩詞兼ね長ず。敖陶孫の評に謂ふ、詩を觀れば、時女春に步し、終に婉弱を傷む如し、と。呂本中、以爲へらく、その過嶺以後の詩は、高古嚴重、自ら一家を爲す、と。蓋し早く新穎を標し、晚に浮華を洗ひしものか。その詞を作るや、格は稍や蘇黃に遜ると雖も、情韵兼勝の處、むしろ其上に在り。南北の間に出入す。陳師道は、山谷と同じく、杜甫を學べり。論者曰く、庭堅の杜を學ぶや、脫穎して出で、師道の杜を學ぶや、沈思して入る。寧ろ拙なるも巧なる母れ、寧ろ撲なるも華なる母れといふもの、中聲に非ずと雖も、之を高格といはざる能はず、と。その文、亦た簡嚴密栗。李薦、特に文に長じ、才辯脫橫、蘇の本體を去る、最も近く、東坡亦た之を賞せりといふ。

歐蘇の當時、文運極めて盛。學者皆詞章を善くす。賢相は司馬光の如き、經學は孫復李覯、劉敞、劉攽の如き、皆名文人口に膾炙する者あり。その詳は、一一こゝに具せず。

（一一）南宋の詞

靖康の變に次いで、南渡の厄あり。天步日に艱難なるも、奸臣國命を執り、宗社の運、終に回復せられず、加ふるに、理學の盛行は、文藝の發達を害し、隱士曲儒、徒に性命を談じ、草澤の英雄、復た起つものなく、北宋雄健の氣象、忽ち索然たり。歐蘇會王、相並びて文柄を握りし奎運の盛、今や一夢に歸し、寂寞の極、殆んど言ふに足るものなし。唯だ詞は、なほ發達の餘地あるが故に、しきりに名家を出して、一時の盛をなせり。

詞の體、大約二あり。一は婉約、一は豪放。婉約なるものは、その氣象の恢宏を欲す。一は紅牙白版、兒女を泣かしむべく、一は銅絃鐵撥、鬼神を哭せしむべし。前者は花間草堂の舊に沿ふものにして、正宗を以て目せられ、一に南派と呼び、後者は蘇黃が音律の拘束を離れて新に唱へ出でしものにして、變體を以て目せられ、一に北派と呼ばる。その變遷、亦た漢代樂府と頗る相似たり。

南宋詞家の盛、固より北宋に軼す。張孝祥は、詩文皆東坡を追慕し、詞も亦た駸々として之に近く、筆酣にして興健なるや、頃刻にして成るも、一字として來歷なきはなく、念奴嬌に、盡吸西江、細斟北斗、萬象爲賓客、叩舷獨笑、不知今夕何夕といふが如き、最

も誦すべし。范成大・陸游、詩を善くし、偶ま之に及び、又傳ふべきものあり。

辛棄疾、稼軒と號す。その詞に於けるや、蘇黄以後、稀に觀るところ。紀曉嵐曰く、その詞源、蘇軾より出て、しかも才氣横溢、奇恣となり、遂に宋人中に於て、別に門庭を開く、と。然れども、亦た必ずしも北派に躊躇するものに非ず。劉後村曰く、公の作る處、大聲は鞺鞳、小聲は鏗鍧、六合を横絶し、萬古を掃空す。その濃麗綿密なるもの、亦た小晏秦郎の下に在らず、と。彭孫遹又曰く、稼軒の詞、激揚奮厲を以て工となす。實叙分桃葉渡の一曲に至りては、昵狎温柔、魂銷え意盡く、才人の伎倆眞に測る可らず、と。知るべし、區々南北の別、その間ふ處に非ず。婀娜豪健、兩つながら之を兼ね、詞壇に於て、前古無比の奇勳をなせしを。その客劉過號は龍洲、稼軒と頗る相似て、やゝ粗率なれども、骨力の遒上、氣格の深厚、むしろ過ぎたる者あり。洵に一時の瑜亮たるべし。陶九成曰く、改之の造詞、膽逸にして、思致あり、と。その作沁園春の如き、千古の絶調たるに庶幾し。

辛劉二家北派を以て目せらる。而して、南派中の作家に至りては、之に比して、愈よ多し。姜夔號は白石、人と爲り、材藝多く、善く笙を吹き、書に妙に、詩も亦た觀るべく、而かも詞に於て尤も傳ふべし。黄叔暘曰く、白石の詞、極めて精妙清眞に減ぜず、その高處、美成も及ぶ能はざるものあり、と。張叔夏曰く、詞は清空を要して、質實を要せず。姜白石は、野雲孤飛、去留跡なきが如し、と。暗香疏影揚州慢惜紅衣等、皆誦すべし。史達祖、號は梅溪、韓侂胄の堂史となり、その敗るゝや、坐して黥せらる。其人取るに足らずと雖も、詞才獨り、群を超ゆ。姜白石、奇秀清逸、李長吉の韵ありとなす。張甫曰く、史生の作、情詞ともに到り、綃を泉底に織り、塵を眼中に去り、瓌奇警邁、清新閑婉の長あり。しかも詭蕩汙淫の失なく、清眞に分鏹し、方回を平睨すべし、と。高觀國號は竹屋、梅溪と並稱せられ、しかも、骨力あるところ、挺然自ら異なり。吳文英號は夢窓、南派の名手なり。尹惟曉曰く、詞を吾が宋に求むるに、前に清眞あり、後に夢窓あり、これ煥の言に非ず、天下の公言なり、と。張叔夏曰く、吳夢窓は、七寶樓臺、人の眼目を眩する如く、折碎下し來れば片段を成さず、と。然れども、詩の中晩に於ける如く、意象すでに盡きて、專ら措辭に向ひ、屬對の妙語、新創の好字、僅に以て工となす。詞、亦た此に極まる。

宋の詞は、唐の詩に比すべく、風氣盛なるとき、無名の婦豎、亦た千古の佳作あり。後世、法を此に取るもの、固より然り。元明の間は、復た射鵰の手を出さず。なほ宋元の詩に於けると一般、律語の變遷、古今同軌、千歲なほ一すべきのみ。

(一二) 南宋の文

王安石、一たび科舉の法を革め、專ら經學を尙びてより、風雅殆んど廢し、加ふるに、濂洛の理學、大に行はれ、諸儒の語錄を作るや、多く俗語を用ひてより、延いて、高文典策に及び、鄙俚拙陋を免れず。これに由つて、南渡の文章、國運とともに衰ふ。然れども仍ほ李綱の雅健、胡銓の嚴正あり。銓の「高宗に上る封事」、忠憤に發し、剴切人を動す。古今彈劾の文章、その右に出づるものなし。朱熹曰く。胡澹菴の此書、日月と光を爭ふべく、中興の奏議、これを第一となす、と。謝枋得曰く、肝膽忠義、心術明白、思慮深長、其文を讀んで其人を想見するに、眞に三代以上の人物、と。乾道淳熙の間、蘇文盛に行はれ、學子翕然として、之に傚ひ、乾淳體と號す。元祐の盛に及ばずと雖も、文士を出すこと、頗る多く、王呂陳葉の數輩最も名あり。

王十朋、梅溪と號す、その文、專ら理致を尙び、浮虛靡麗の詞をなす、蓋し典雅を以て勝ると雖も、氣格漸く下れり。呂祖謙、東萊と號す、朱熹頗る其學の雜なるを病み、文の博辯閎肆、又その約を守る能はざるを尤む、然れども、博く群書を觀、語に根柢あるもの、終に拐腹高談するに勝る。著はすところの左氏博議、尤も才思の橫溢を見るべし。

陳亮は、龍川と號し、朱熹と時を同うす。朱は道學を以て一世を風靡し、陳は事功を以て自ら期す。朱の學は、陳、終に及ばず、陳の文、朱又決して企て及ぶべからず。その文、雄驚豪雋、かつて書を朱熹に與へて曰く、義理の精微を研究し、古今の同異を辨析し、心を秒忽に原ね、理を分寸に較べ、積累を以て功となし、涵養を以て主となし、睟面盎背、亮、諸儒に於て誠に愧づるあり、堂堂の陣、正正の旗、雨風雲雷、交も發して並び至り、龍蛇虎豹、變見して出沒し、一世の智勇を推倒し、萬古の心胸を開拓するに至りては、自ら謂へらく、やゝ一日の長あり、と。その言ふところ、何ぞ其れ偉なる。まことに、南渡以後唯一の大家なり。朱熹の詩文に於けるや、固より本色に非ずと雖も、深人淺語なく、その文、平正明暢、語錄粗鄙の態なく、亦た以て傳ふるに足る。

葉適は、水心と號す。その才は雄、その學は博、その文、藻思英發、具さに典則あり、かつて曰く、文章世敎に關するに足らざれば、工と雖も、益なきなり、と。居然たる因襲の見と雖も、亦た以て、その操守を窺ふに足るべし。

(一三)、南宋の詩

文は宋人の特技にして、南渡以後の變、略ぼ上に述べたるが如く、詩に至りては、更に甚しきものあり、之を業とするもの、固より少きに非ず、然れども、風氣の推移、格力愈よ卑く、蕪穢荒陋に赴くを免れず、尤袤、號は梁溪、楊萬里、號は誠齋、范成大、號は石湖、陸游、號は放翁、相並んで世に四家と稱せらる、同時に蕭東夫、號を千巖といふものあり、之と名を等うす、誠齋かつて人に寄せて、尤蕭范陸四詩翁、此後誰當第一功の句あり、陸放翁は、南宋に於ける唯一の詩豪にして特に詳論するを値するを以て、次章に讓り、こゝには、他の諸家に就いて略述せむ。

諸家の詩は、先づ之をその互評の語に見るに如かず、楊誠齋、かつて千巖摘藁に叙して曰く、余かつて近世の詩人を論ずるに、范石湖の清新、尤梁溪の平淡、陸放翁の敷腴、蕭千巖の工緻、皆余の畏るゝところの者なり、と、姜百石は、壙詞を以て同時に名あるもの、詩藁の自序に曰く、尤延之先生、余の爲に言ふ、近世の士人、喜んで江西を宗とす、溫潤范至能の如きものあるか、痛快楊廷秀の如きものあるか、高古蕭東夫の如き、俊逸陸務觀の如き、これ皆自ら機軸を出す、亟に觀るべきものあり、と、之を要するに、如上の諸家は、大抵江西の餘派にして、多少の特色ありと雖も、たとへば、李杜の後、大曆の十才子あるが如く、洪纖の別、遂に消去すべからず、而して、放翁ひとり、其雄を稱するは、韓白の二家、中唐の盛をなせしが如し。

蕭千巖の詩集、佚すること、すでに久しく、尤袤は、唯だ梁溪遺藁一卷を剩すのみ、而して所長は律詩に在り、范石湖、才調の富健は誠齋に及ばず、而かも、誠齋の粗豪なく氣象の廣博は、放翁に及ばず、而かも、放翁の窠臼なし。大抵、早年は晩唐に沿溯し、後年は蘇黃の遺法を規取し、變ずるに婉媚を以てす、田園の詩、今に稱せらる、誠齋は、居然として、江西の末派に沿ひ、更に古に溯る能はず、往々にして俚語を交へ、固より粗厲頹唐を免れずと雖も、才思健拔、包孕宏富、要するに、群材を籠罩するに足る、亦た以て鐵中の錚々となすべし、當時一般の詩風、動もすれば、邵康節擊壤集の餘風を承け、談理を先として、感興を沒し、唯だ自在に事を論じ、斬新に事を叙するを尚ぶの極、その弊、竟に油腔滑調を以て、自ら喜ぶに至り、朱文公をして、今人の詩は、村裏の雜劇の如しと痛嘆するに至らしむ、この間、ひとり放翁あり、聊か人意を强うするに足る。その他、永嘉の四靈及び江湖派の如きは、詩壇の小起伏、こゝに詳論せず。

(一四) 詩論の勃興

南渡の後、詩運の振はざること、前に述べたるが如く、因つて、その救濟方法として、詩論の流行を觀るに至れり。顧みれば、六朝の間、劉勰、鍾嶸ありしも、亦た同一の趨勢に逢着したるが爲にして、唐代久しく之を絶ちし所以は、その必要を認めざるが故のみ。古しへ稱す、詩話興つて詩亡ぶと。然れども、詩話固より詩を衰へしむるに非ず、詩の衰へたるとき、詩話偶ま出づるのみ。かの本末の辨を誤るもの、古來何ぞ其れ多きの甚しきや。

當時の詩論中、最も觀るべきものを嚴羽の滄浪詩話となす。羽、字は儀卿、詩を以て時に名ありと雖も、實は詩論を以て重きを爲すものに外ならず。詩話中、篇を分つこと五、詩辯、詩體、詩法、詩評、考證、是れなり。就中詩辯の一篇、その旨を窺ふに至る。曰く、詩を論ずるは禪を論ずる如し。大抵禪道惟だ妙悟に在り、詩道亦た妙悟に在り、と。又曰く、詩の極致一あり、曰く神に入る。詩にして、神に入れば、至れり、盡せり。惟だ李杜諸人、之を得たるのみ。他人之を得る、蓋し寡きなり、と。又曰く、詩に別材あり、書に關するに非ざるなり。詩に別趣あり、理に關するに非ざるなり。然れども、多く書を讀み、理を窮むるに非ざれば、其至を極むる能はず。謂ゆる理路に涉らず、言筌に落ちざるものは上なり。詩は情性を吟咏す。盛唐諸人、惟だ興趣に在り。羚羊角を掛け、跡の求むべきなし。故にその妙處は、透徹玲瓏、湊泊すべからず、空中の音、相中の色、水中の月、鏡中の象の如く、言盡くるあつて意窮なし、と。その本領は、當時に流行せし道學者流の勃窣理窟を排除し、天然の興趣を發揮せむが爲に、盛唐を以て歸宿となすに在り。故に單獨に之を考ふれば、多少の異議なき能はずと雖も、歷史的意義を尋繹するものは、決して嚴羽を以て、妄人となさゞるべきなり。紀曉嵐曰く、胡應麟の詩藪、比して達磨の西來となし、馮班は、嚴氏糾繆を作つて、之を攻む。實は、羽、詩教極壞の時に當り、講學家は膚淺粗疎、江湖派は雕繪拙碎、因つて盛唐の興象を標擧して、弊を救ひ、偏を補ふ、尊んで極則となすものは非、斥けて繆戾となすもの、亦た非なり、と。而して、嚴羽の斯論は元明の間、久しく行はれず。近清の王漁洋を得て、はじめて神韵說を確立せしめきゝ。その詩壇に於ける影響感化、豈に少々とせむや。

嚴羽と同じく、盛唐を鼓吹し、新に詩教を刱めしものを周弼となす。弼、字は伯弼、文璞の子なり。文璞、詞を以て名あり。而して、圖繪寶鑑補遺に云ふ、弼は汝陽の詩人にし

て、墨竹を善くす、と。范晞文の對牀夜語に曰く、周伯弼、唐詩を以て自ら鳴る、と。後人或は一無名子書賈の輩となす、之を誣ゆる、甚しといふべし。著すところ、端平詩雋あり。而して、その選に係る三體詩專ら律絕の詩法を說き、時弊を救ふに唐詩の韵致風趣を以てせむとす。故に律に於ては、四實を先とし、絕に於ては實接を先とす。晞文曰く、四實は、中四句皆景物にして、實なるを謂ふなり。華麗典重の中に於て、雍容寬厚の態あり、これ其妙なり。昧者之を爲せば、堆積窒塞して、意味に寡からむ。この論、一たび出てゝ、後學に補なしとせず。有識高見卓として時習に薰染されざるもの、往々こゝに於て解悟す。間ま實に過ぎて句未だ飛健せざるもの、或は窒塞の譏を起すあらむ。然れども、鵠を刻して成らず、尙ほ鶩に類する、豈に空疎輕薄の爲に勝らざらむ。稍や探討を加へしむれば、何ぞ古人の我に同じからざるを患へむ、と。故に紀曉嵐、その選の未だ可ならざるを言ふと雖も、以て一說に備ふべきものとなし、且つ曰く、蓋し以て江湖の末派、油腔滑調の弊を救ふ。滄浪詩話と、各一義を明かにし、均しく謂ゆる爲すある者の言なり、と。元の方回、序を製して、之を誚ると雖も、實は事を解せざるものなり。之に次いで、蔡蒙齋の聯珠詩格、專ら字法を說き、相並んで今に傳ふ。

（一五）陸游

江湖卑拙の風、油腔滑調を以て、自ら悅ぶときに方り、獨り唐賢を規撫し、嚴羽、周弼の所說と、期せずして契合し、仍つて、宋詩を重からしめしものを陸游となす。字は務觀、越州山陰の人、二帝北狩の前年、宣和七年十月、淮上の舟中に生る。性忠孝、才氣超絕、尤も詩に長ず。淳熙二年歲、五十一、范成大、來つて、蜀に帥たり、辟して、參議官となす。成大もとより詩を善くす。こゝに於て、文字の交を訂し、禮法に拘はらず、人その頹放を譏るものあり、因つて自ら放翁と號す。七年、山陰に遷る、白髮蕭然たり、官は太中大夫寶謨閣待制に至り、渭南伯に封ぜらる、食邑八百戶、嘉定二年、家に卒す、年八十五。その遺詩、萬首に上る。

放翁の性、固より忠厚、南渡の後に生れて、社稷衰替の狀を目睹し、居常國讎を報ずるを以て、念となし、時に筆を投じて、戎軒を事とせしことあり。臨終の詩に、王師北定中原日、家祭無忘告乃翁といふが如き、以て其志を觀るべし。その一意時事に感慨するは、頗る杜甫に類似し、又かつて天未喪斯文、杜老乃獨出、陵遲至元白、固已可憤嫉といへる如き、直に杜詩を究めて、之に私淑せしを知るべし。その詩、凡そ三變、初は雅正、

に向ひ、中は宏肆に變じ、晩に恬淡となる、境地自ら然るのみ。

その妙は、精錬に在り。趙甌北曰く、放翁の工夫精到、語を出す自然に老潔、他人數言了する能はざるもの、只だ一二語を用ひて、之を了す。これ、その錬句前に在りて、句下に在らず、觀者並に其錬の迹を見ず、乃ち眞錬の文なり、と。故に最も律詩に長じ、短古之に次ぐ。趙甌北、その律を評して曰く使事必ず切、屬對必ず工、意として搜らざるなく、而かも、纖巧に落ちず、語として、新ならざるなく、而かも、塗澤を事とせず、實に古來詩家未だ見ざるところなり、と。又その古體を評して曰く、意は筆先に在り、力は紙背に造る、麗語あつて險語なく、艶詞あつて淫詞なし、看れば、華藻に似て實は雅潔、看れば奔放に似て實は謹嚴、と。而して、沈德潛、專らその弊處を論じて曰く、劍南原と老杜に本づき、殊に獨造の境地あり、但だ古體は粗に近く、近體は杜の沈雄騰踔に遜るのみ、と。要するに、才情の清新は、宋人の特色、思力の深厚は、遂に唐賢に及ばず。

乾隆御選の唐宋詩醇、蘇陸を以て李杜韓白の後を承けしむ。まことに、公平の見を推すべし。その佳作の如き、一一擧げず。特に近體に至りては、衆美拾ふに暇あらざればなり。

（一六）宋末の諸家

南渡の後、孝宗の世、ひとり至治と稱せらる。理宗に至りては、復た論ずるに堪へず。理宗は、元と小人の擁立するところ、その蒙古と合して金を亡ぼすや、意滿ち氣驕り、太平の天子を以て、自ら居り、唯だ周張程朱の理學を崇尚して、右文の譽を期するのみ、顧廻瀾の之を評して、理宗の理は文なるのみといへるもの、眞に痛切なるを覺ゆ。こゝに於て、國運の衰替は、いつしか自ら文運に及ぼし、衰颯の氣、搖曳するところ、僅に一二を除くの外、幾んど特記するに足るものなし。

放翁以後の詩人、方秋崖、ひとり稱すべし。名は岳、字は巨山、累遷して、吏部侍郎に至りしが、前には史嵩之の嗾論を以て罷められ、後には、丁大全の嗾論を以て罷められて郡に下り、賈似道の劾を以て、兩たび邵武軍に調せられ、抗壞を以て身を終る。之を評するものは曰く、詩、清新を主とし、鑱琢に工なり。故に刻意妙に入れば、逸韵橫生、嶽瀆の觀、少しと雖も、その光怪、實とするに足る、と。その天才尤も駿厲、殊に盧字を運旋するの手段に至りては、長しへに一派の祖たるに庶幾く、醉矣行に、吾婦曰、君醉耶、吾姪曰、非醉也、謂吾醉者固不然、非醉亦非知吾者、花影滿身扶不起、此紙不知何等語、明朝

早與醒者傳、笑倒渠儂吾醉矣といひ、感懷に「得見古人千載上、已忘今我一渥邊」「不知我者謂爲拙、是有命焉那用求」「悔不可追身是膽、怒何堪觸腹生鱗」といふが如き、以て一斑を窺ふに足るべし。

眞山民は、宋末の隱士、自ら眞德秀の後といゝ、その節至高、しかも命に安んじ、天を知り、一も怨尤の語なく、志操識量、及ぶべからざるが如し。その詩源、晩唐に出て、宋人に在りては、別調に屬す。「煙碧柳生色、燒青草返魂」「飛花游蕩子、古木老成人」「風蟬聲不定、水鳥影同飛」「泉石定非騎馬路、功名不上釣魚鉤」「水禽與我共明月、蘆葉爲誰吟晩風」「小窓半夜青燈雨、幽樹一庭黃葉秋」の數聯、皆愛誦すべし。

文天祥謝枋得の諸公、宋代文學の殿後たるに足る。農田餘話、天祥を稱し、獨り忠義一時に冠たるのみならず、亦た斯文間氣の發見なりといひしもの、決して虛語に非ず。天祥最も詩を善くし、正氣歌の外、戎馬患難の際に成れるもの、悲壯感慨、誦すべきもの多し。謝枋得は、生を捨てゝ節を完うす、天祥と塗を殊にして、歸を同うするもの、その郤聘の一書、彼の士、鄉塾の童豎、今に至りて、皆能く記誦すといふ。その他の文、亦た光明磊落、卓爾不群と稱せらる。

(一七) 小說戲曲の氣運

宋人は、その特質として、閑文字を弄すること、極めて少しと雖も、宋史藝文志に、小說類、三百五十九部、一千八百六十六卷といひ、その大半は、實に宋人の手に出て、藝文志補に、四十五家三百三十八卷といへば、量に於ては、決して貧ならず。その中、夷堅志、青瑣高議、西溪叢語、北夢瑣言、太平廣記揮麈錄、貴耳集等、尤も名あり。然れども、居然として、史外の零聞軼事を采錄せしものにして、固より、嚴正の意義に於ける小說に非ず、而して、稍や注意を値するものを、宣和遺事となすその書、元と稱して史の足らざるを補ふといへども、實は彈詞の一種にして、南渡の前、人主驕奢、奸臣專橫の狀を描きて、自ら一篇の好敍事詩をなし、就中二帝北狩の一段の如き、最も悽愴を極む。後に詳論すべき施耐菴の水滸傳は、蓋し材を此に取りしものなり。小說の萌芽は、此の如く、戲曲も、亦た均しく此間に胚胎せり。

宋の一代は、支那文化の最高頂にして、社會教育の普及、この時に過ぐるはあらず。されば、民間の學藝、亦た長足の進歩をなし、當時詞客の製作は、容易に民衆に解せられ、當時の樂章たりし詞の如きも、士女の玩好に適したりき。こゝに於てか、詞を利用

して、一種の原始的戲曲を構成せしものあり、趙德鄰の元微之崔鶯鶯商調蝶戀花の如き、即ち是れなり。今試にその理由を揣摩するに、詞は元と一種の抒情詩なれども、その入神の處は、決して婦豎輩の解知すべきに非ず、而して、その嗜好に適したるは、事實の上に構成されし說話體に在り。これより先、白家の長恨歌の世に流傳せしが如き、明かに之を證す。されば是れ、疑もなく、時世の要求を滿たさむが爲のみ。

元微之の會眞記、世に行はるゝこと、すでに久し。德鄰の斯作、原文を稍や平易に改作し、且つ處々に蝶戀花の詞を挿入せしものにして、さながら鳴物入の講談を聽くが如く、その趣向、極めて斬新、詞も亦た元明以後の腔調に入らず、尤も愛誦すべし。而して、其序を讀めば、この體、明かに德鄰の創意に成りしを知るべし。

散文律語の兩體を巧に參錯して音律の調諧を圖りし原始的戲曲は、かくの如くして成れり。北宋の連廂、南宋の鼓子調等、皆この屬にして、ともに舞臺の裝置を借り、其異なるによりて、別名あり。後世の彈詞、盲詞、諢詞は蓋し其遺といふ而して、金には、絃索調あり、元には雜劇、傳奇あり、遂に支那劇を完成するに至り、詞も亦た變じて南北兩曲となりぬ。但だ連廂、鼓子調等の曲本、今傳ふるものなく、その詳、知るべからず。

第四期　近世文學

第一　金元文學

(一)　朔漠文運の消長

金元文學は、漢族以外の異人種統轄の下に發生したるものなり。金の興隆より元の滅亡に至るまで、凡そ二百四十餘年。二朝の興替は、宋の中葉にあれども、其源に溯れば、ともに遼の餘澤を受け、仍つて、直に五代の末に接す。故に括言すれば、殘唐の奎運、南には宋となり、北には遼金となりしものにして、唯だ時代に就いて言ふとき、遲速の別あり、而して、兩者相合して、元の文學を形成せしなり。

遼は、蒙古族の一派にして、古の契丹なり。はじめ、太祖、松漠より起り、兵を以て四方を經略し、未だ禮文の事に暇あらず、その後、太宗汴に入るに及び、晉の圖書禮器を取つて北歸し、制度始めて修舉す。景宗より修宗に至るの間は、その極盛期にして、科目を以て、人を取り、學儒の美風、漸く、然れども、塞外自然の風氣、剛强にして、三面敵に隣り、歲時蒐獮を以て務となし、典章文物、なほ闕如たり。遼史文學傳、載するところ、蕭韓

呼蘇、王鼎、耶律昭、劉輝、耶律孟簡、耶律谷欲の徒ありと雖も、未だ觀るに足らざるなり。

金は、ツングス族にして、もと女眞と稱し、完顏阿骨打に及び、自ら帝と稱し、國を大金と號す、太祖是れなり。太宗に至りて、遼を亡ぼし、宋を破り、徽欽二帝を虜にし、大に中國を削侵せり。これより先、遼の舊人を得て、文書を司らしめ、又選擧の法を立て、漸次文化に向ひしが、こゝに至りて、經籍圖書と中原の士人とを得、又宋の使者を拘留し、その文物技能を移植するを務め、奎運大に振へり。之を要するに、金の文學は、遼の遺文と宋の德教とを以て、其源となし、興國の氣運に乘じて、忽ち長足の進歩を爲せしものなり。熙宗の時、孔子を祭つて、北面弟子の禮を執り、世宗・章宗に及びて、禮樂正に修り、庠序日に盛にして、士は科第より、宰輔に上るものあり、儒學專門の名家、未だ多からざりしと雖も、朝廷の典章、隣國の書命に至るまで、觀るべきもの、少からず。文運の隆、こゝに極まる。金史文藝傳、載するところ、文學の士、彬々として觀るべし。而して、一代の詩豪、元好問を出すと同時に、胡元の勁敵に抗する能はず、その社稷、不幸にして覆滅の否運に臨みぬ。

元は、遼と同種、蒙古族の一派なり。その建國は、宋の寧宗の時に在り、文學も、亦た之を金元より承く。然れども、傳播發達の比較的遲緩なりしは、自國特有の文字あり、漢族の文化を移植すること急ならざりしに因る。世祖忽必烈に及び、宋を滅して、中國を併呑し、その版圖の大、史上稱に見るところ、亞細亞の東部より起り、歐羅巴に及べり。すでに漢族の領土を統轄するや、新字頒の詔を發し、その人文を革新せむとしたりしが、遂に廣く行はるゝに及ばず。之を一概すれば、善く漢族從來の文物を保存せり。勿論宋代に發達したる思索的學問は、この間に於て、萎微甚だ振はざりしと雖も、異人種の侵入は、中國因襲の習慣風俗を打破するに、頗る有効にして、文學に對する承嗣的觀念の外に立ちて、新に小說戲曲等、輕文學の發生を促したりき。實際的傾向を有する漢族の間に於て、這般文學の勃興を見たるは、まことに空谷の跫音にして、文學史上に於いて、特書大筆すべき緊要事項なり。若し元の國祚にして、さばかり短からざりせば、漢族は、その統治の下に在りて、根柢より、その風俗習慣を刷新し、有力なる一國民となりて、進取的氣象を促進し、世界の文化に對して、偉大なる貢獻をなせしやも、亦た知るべからず。凡そ、大なる國家の滅亡は、偉人の夭死と同じく、まことに痛惜すべきなり。

(二) 金朝の諸家

金史文藝傳に云ふ、韓昉・吳激は楚材にして、之を晉用す、亦た一代の文となすに足る。蔡珪・馬定國の該博、楊伯仁の敏贍、麻九疇の英儁、宋九嘉の邁往、三李の卓犖、純甫は道を知り、汾は氣に任じ、獻能は尤も純孝を以て稱せらる、王庭筠・黨懷英・元好問、自ら名を異代に知らすに足れり。王競・劉從益・王若虛の吏治、文はその長ずるところを掩はず、蔡松年は、文藝の中に於て、爵位の最も重きを推す、と。

韓昉は、遼の遺臣、善く文を屬し、最も詔冊に長ず、要するに、廟堂瑚璉の器なり。吳激は、元と宋人、金に抑留せられしもの、詩に長じ、樂府に精しく、造語清婉、哀んで傷らずと稱せらる。蔡松年、偶ま之と所長を同うし、世に吳蔡と稱せらる。黨懷英は、一代學者の宗にして、その題春雲出岫圖の短古は、東坡の江上愁心千疊山と相並んで神韵の饒なるを見るべし。之に次いで、李純甫・楊雲翼・趙秉文・雷淵等あり、その傳、一一述べず。

元好問は、金の遺臣にして、其朝の詩を集錄して中州集を撰せり。その人、二百四十の多きに至る。蓋し金詩は晩唐を學び、一種の氣骨を以て、之を矯正せしものにして、悲壯感慨の趣、宋元二朝の上に在り。而して、最も稱すべきは、好問その人に外ならず。

(三) 元好問

元好問、字は裕之、遺山を號す。太原定襄の人、その系、拓跋魏に出で、その父德は、實に金の文學を重からしめし者にして、遺山の素は家學に在り。年十四、陵川の郝晉卿に從つて學び、經傳百家を淹貫し、六歲にして業成り、太行を下り、大河を渡り、箕山・琴臺の詩を作る。時に趙秉文、禮部に官して、重名あり、之を見て、以爲へらく、少陵以來、この作なし、と。書を以て、之を招く。こゝに於て、好問の名、京師に震ひ、稱して元才子といふ。正大年間、鄧州南陽令に辟せられ、轉じて、內卿令となり、尙書都督掾となり、天興の初、翰林に入り、官は尙書省左司員外郎に至る。金亡びて仕へず、著作を以て、自ら任ず。乃ち亭を家に搆へ、名づけて野史亭といひ、金源君臣言行錄を作り、他に壬辰雜編・中州集等の撰あり。郝經之を稱して曰く、汴梁亡びて、故老皆盡く、先生遂に一代の宗匠となり、文章を以て天下に獨步すること三十年、天下功德を銘するもの、盡く其門に趣く、と。卒する時、年六十八。

遺山詩文、ともに妙。金史本傳に云ふ、文を爲る、繩尺あり、衆體を備へ、その詩、奇麗にして雕劌を絕ち、巧縟にして綺麗を謝し、五言は高古沈鬱、七言樂府、古題を用ひずし

て、特に新意を出す、と。紀曉嵐、又曰く、好問才雄にして學贍、その趣皆興象深遠、風格遒上、文亦た纖尺嚴密、根抵盤深なり、と。然れども、詩名特に重し。

これを唐宋の諸大家に比すれば、固より相及ばずと雖も、その血脈境遇、ともに朔北に承け、且つ時恰も社稷の覆亡に際したるを以て、悲壯激越、最も感愴に富む。趙甌北、かつて之を評して曰く、才甚だ大ならず、書卷亦た甚だ多からず、之を蘇陸に較ぶれば、自ら大小の別あり。然れども、正に惟れ才大ならず、書多からず、而かも專ら精思銳筆を以て、精錬して之を出す。故にその廉悍沈摯の處は、やゝ蘇陸に勝れり。蓋し雲朔に生長し、その天稟本と豪健英傑の氣多く、又金源の亡國に値ひ、宗社邱墟の感を以て、發して慷慨悲歌を爲す、工を求めずして、自ら工を爲すものあり。これ固より地之を爲し、時之を爲す、と。遺山の詩、大要實に此の如し。

遺山の所長は、古體特に樂府、歌行に在り。同時の李冶曰く、樂府は清雄頓挫、俗を用ひて雅と爲し、故を變じて新と爲し、前聖不傳の妙を得たり、と。郝經曰く、その歌謠跌宕、幽并の氣を挾み、一世を高視す。五言を以て、雅に工を爲し、奇を出し、長句雜言に於て、新聲を揄揚し、以て怨思を寫す、と。沈德潛、又曰く、七言古詩、氣王神行、平蕪一望、時に常に峰巒高く揷み、濤瀾地を動かすの概を得たり、又東坡後の一能手なり、と。趙甌北は、之を蘇陸に比して曰く、蘇陸の古體、行墨の間、尚ほ排偶多し、一は以てその辨博を肆にし、一は以てその藻繪を侈る、固より才人の能事なり。遺山は專ら單行を以てし、絕えて偶句なく、構思窘渉、十步九折、愈よ折れて、意愈よ深く、味愈よ僕、蘇陸と雖も、及ばざるなり、と。

近體に至りては、やゝ遜色あり。その律詩は、歌ふべく、泣くべく、少陵の遺響と稱すと雖も、要するに、是れ地と時とに因りて、偶ま得たるものにして、思力の深厚を欠き、且つ複句の多き、殊に甚しく、その才、甚だ大ならざるの誚、こゝに於て、愈よ見るべし。

遺山に次いで、附記すべきもの、郝經あり。經は遺山の師、郝晉卿の孫。元初に在りて、名を擅にし、遺山と壎篪相和せり。元の憲宗の釣魚山に殂するや、世祖に勸め、急に北に旋つて即位せしめ、後、宋に使し、賈似道の爲に眞州に拘へらるゝこと數年、遂に臣節を屈せず、その人。固より儁偉、その詩、遺山と略ぼ規を同うし、時に甲乙を辨すべからざるものあり、遺山をして、名場誰與子爭先といひ、擇腸正有五千卷、下筆須論二百年といふに至らしむ。その俊邁の詞章、亦た一代の絕品なり。

(四) 詞曲の關係

北宋の連廂南宋の鼓子調に次いで、金には絃索調あり、專ら琵琶を彈じ、一の故事を語り、仍つて曲と白とを併用す。こゝに於て、支那の戲曲、漸く完成に近からむとす。然れども、その曲本、傳ふるもの少きを以て、こゝに詳論せず。元に至りては、雜劇あり。前の數者と異にして、全篇殆んど律語を以て成り、その間の接續として、時文を倩ひ來る。而して、その律語は、即ち曲にして、詞と異なり。詳言すれば、詞より變化して、一種の規律を存すべき約束を有するものなり。されば、詩の詞に於ける、曲の詞に於ける、恰も相似たりといふべく、その連鎖として、兩者に共通の調ある如き、明かに之を證す。曲の種類體式等は專門的に過ぐるを以て、しばらく省畧に從ふ。

何故に、雜劇は元に盛なりしか。北方思潮繫縛の解除は、その遠因なれども、なほ他に一層直接なる人爲の機械的刺擊あるが如し。減晉叔曰く、或は謂ふ、元の士を取るや、塡詞の科ある、今の括帖の如し。然れども、給を風簷寸晷の下に取る、故に一時の名士馬致遠喬孟符の輩と雖も、第四折に至りては、往々疆弩の末なり、と。沈德符曰く、元人未だ南宋滅びざる以前、雜劇を以て士を試む、と。吳梅村、亦た此說を信ぜり。されば

この事、元史選擧志に見えず、又他に確證なく、必ずしも憑信を値せずと雖も、元人の之を好むこと、さながら食色に於けるが如く、後人をして、此說あるに至らしめしものと爲すは可なり。蓋し、元人は、その初、朔漠荒寒の區に在りて、穹廬の活を爲せしものゝ、その中國に入るや、昔日勤苦の反動として、自然の勢、豪奢華美となり、耳目の娛樂を主とし、その必要上、唱曲作劇を促がせしものならむ。之を要するに、異人種侵入の勢力、舊來の因襲を破壞し、人性自然の美的情操を煥發したる結果、こゝに至りしものと爲すこと、最も妥穩の見ならむと思はる。然れども、その體式の漸を以て進歩せしを忘るべからず。

雜劇の體裁、固より一定し、必ず皆四折より成る。この外、楔子或は有り、或は無し、また大抵通篇の首に在れども、時に折の間に在ることあり。各折長短一ならず、白曲を合せて、一折三千言內外を普通とし、一折を通じて一韵、且つ第一折の破題は、仙呂點絳唇の調を以て起ること、最も多しと爲す。

雜劇は一變して傳奇となり、こゝに、はじめて南北二派の新聲を確立せしめき。雜劇と傳奇とは、極めて緊密なる關係を有し、子母の如く、姉妹の如しとはいへ、その間、

截然たる區別あり。雜劇は、前にも言ひし如く、四折一韵到底なれども、傳奇は時として數十折の多きに上り、韵脚復た數ば換る。その局面の結構布置、自ら異なき能はず。前者は、出場の人多からず、之を演ずるの時、短しと雖も、後者は、やゝ複雜なり。然れども、固より原始的の者なるを以て、常に場に上ぼす能はず、明清の作に係るもの、全く「讀む戲曲」に外ならざるなり。

北曲に西廂あり、南曲に琵琶あり、さながら雙璧の如く、元の文學、之が爲に重し。今、少しく岐路に入るの感あれども、南北二曲の起原に就いて、一言するところ無くむばあらず。南北二曲は、居然として、風土の異に本づくものなり。王世貞曰く、曲は詞の變、金元中國に入りてより、用ふるところの胡樂嘈雜、凄緊緩急の間、詞按ずる能はず、乃ち更に新聲を爲つて媚ぶ。但し大江以北、漸く胡語に染み、時々採入し、沈約の四聲、遂に其一を闕く、東南の士、未だ盡く會せず、顧曲の周郎、逢掖の間、又稀に之を辨識す、王應稍や復た新體を變じ、號して南曲となす。高則誠、遂に前後を掩ふ。大抵北は勁切雄麗を主とし、南は清峭柔遠を高しとす。才情に本づくと雖も、俚俗と諧はむことを務む。之を譬ふれば、同一師承して、漸く分敷するもの、俱に國臣にして文武科を異にするものなり、と。これ南北兩方、聲音の異に就いて立論せしなり。何元朗曰く、北人の曲は、九宮を以て之を統べ、九宮の外、別に宮、高平、盤涉の三調を道くあり。南人の歌は、亦た南九宮あり。然れども、南歌或は多く絲竹と協はず、豈に謂ゆる土氣偏詖、鐘律平和を得ざるものか、と。これ音律の異同を云ふなり。之に次いで、李笠翁は曰く、北曲には北曲の字あり、南曲には南曲の字あり。南音には自ら呼んて我となし、人を呼んて儞となす。北音には人を呼んて儂となし、自ら呼んて俺となし、咱となすの類の如き、是れなり。北字は粗豪に近きを以て剛勁の口に入り易く、南音は悉く嬌媚多く、窈窕の人を施すに便なりと。これ用字の差を言ふなり。要するに、その別、全く音律宮商に在り、百世の下、土を異にせる予輩に在りては、遂に十分の鑑識を爲す能はざるなり。

支那戲曲の變遷を最も明白に表示したるものを、西廂記となす。唐の元稹の會眞記は、一變して宋の趙德鄰の商調蝶戀花となり、再變して金の董解元の絃索西廂となり、三變して元の王實甫の西廂記となる。その比較、頗る興味あり。又西廂と傳梅香とを對比すれば、內容頗る相似たるが故に、傳奇雜劇の差異を知るの便あらむ。

(五) 雜劇

元の雜劇、甚だ多く、群英編するところ、五百五十六本、元五百三十五本、無名氏一百七本、娼夫十一本と稱せらる。その作者名目、ともに考ふべし。而して、その特に佳なるものは、采擇して、元曲百種に在り、世なほ稀に之を傳ふ。

雜劇の內容は、これを一概して、古代史的事實の斷片、若しくは逸話瑣聞の類にして、多少の技工を着け潤色を加へたるものなり。馬致遠の漢宮秋、戚夫人、王實甫の陸續懷橘、于公高門、關漢卿の狄梁公、王皇后救周勃、綠珠墜樓、侯正卿の燕子樓等、唯だ名目を一瞥して、容易に、その內容を推知すべきなり。現存せる雜劇に就いて、其尤を拔き、之を細評するは、固より至難の業、且つ餘白なきを以て、すべて省畧に從ふ。

雜劇の重んずるところは、知音善歌に在り、故に甚だ所作に乏し。然れども、その詞章に至りては、燦然として、人目を眩せしむるものあり、元人の絕技、正に此に極まる。李笠翁曰く、歷朝文字の盛なる、その名、各歸するところあり、漢の文、唐の詩、宋の文、元の曲、これ世人口頭の語なり。漢書、史記、千古磨せず尙し。唐は、詩人濟々、宋は文士蹌々たるあり、宜なり、その文壇に鼎足して、三代後の三代たるや、元の天下を有するや、ひとり、政刑禮樂、一も宗とすべきなきのみに非ず、即ち語言文字の末、圖書翰墨の微も、亦た概言多し。詞曲を崇尙し、琵琶、西廂及び元人百種の諸書を得て、後代に傳ふるに非ざらしめば、當日の元も、亦た五代金遼と與に同じく其れ泯滅せむ、焉ぞ能く三朝の驥尾に附して、學士文人の齒頰に掛らむや。これに由つて、之を觀れば、塡詞は末技に非ず、乃ち史傳詩文と源を同うして、派を異にすべきものなり、と。

涵虛子詞品に、元の雜劇家の詞を評せし辭あり、曰く、馬東籬は朝陽鳳鳴の如く、張小山は瑤天笙鶴の如く、白仁甫は鵬の九霄を搏つが如く、李壽卿は洞天春曉の如く、喬夢符は神鰲波を皷するが如く、費唐臣は三峽の波濤の如く、王實甫は花間の美人の如く、張鳴善は彩鳳羽を刷するが如く、關漢卿は瓊筵醉客の如く、鄭德輝は九尺の珠玉の如く、白無咎は太華孤峰の如し、已上十二人を首等とす。王世貞の藝苑巵言に、雜劇の名句を抽出して略評を附せし語あり、煩を厭うてこゝに擧げず。

元曲百種中、情文兼ね到るに庶幾きものを求むれば、喬孟符の揚州夢、金錢記、楊顯之の瀟湘雨、酷寒亭、馬致遠の漢宮秋、關漢卿の望江亭、竇娥怨、救風塵等あり。

(六) 西廂記

西廂記は、王實甫の作と稱す。實甫、その人、固より考ふべからず、且つ異說亦た少からず。明の隆萬以前は、專ら關漢卿となし、或はその孰れか後先なるを知らずと雖も、二人の手によりて合撰されしといふものあり。然れども、之を王實甫となすは、涵虛子の太和正音譜に本づくものにして、たとひ、的確の證なきも、最も普通の說なるを以て、姑らく、之に從ふに如かず。

西廂記は、唐の元稹の手に成りし會眞記を潤色して、四套十六折となせしものなり。然れども、王實甫の前、すでに多少の先驅者ありしを忘るべからず。前に云ひし如く、宋には趙德鄰の商調蝶戀花の詞あり、金には董解元の絃索西廂あり。然れども、王實甫に至りては、鐵を點じて金となすの活手段を以て、黃絹幼婦の新曲を作り、筆々入神の妙あり、後人十襲して措かず。張生の風流、鶯鶯の嬌名、こゝに至りて、千古に重し。蓋し傳奇の體、實甫に剏まりしや否や、詳ならずと雖も、この作あるは、元代一般俗文學の上に於て、又實甫一人の上に於て、その進境として觀るべきに庶幾し。

今日坊間に流布する西廂記は、金聖嘆の改訂を經たるものにして、その字句舊と異なるもの、少からず。別に李卓吾の評點せし一本あり。これ其古なり。西廂を讀むもの、兩書を併觀せざるべからず。而して、古今の名家にして、西廂を刻し、批し、釋したるもの、無慮數十人。この書、世に行はるゝこと、すでに久しく且つ盛なるを知るべし。

西廂脚色の大體は、會眞記より出でゝ、甚しき差異を認めずと雖も結局の着想、ひとり異なり。西洛の人、張珙、字を君瑞といふもの、應試の爲に都に上らむとし、その途中、河中府の普救寺に遊び、一個の秀麗を見る。この佳人、崔相國の女にして名を鶯鶯といひ、芳紀正に十九、すでに從兄鄭恒に許嫁せしもの、今や父の喪に丁り、母とともに故里博陵に安葬せむとし、兵寇に遇ひ、途阻りて進む能はざるに因り、此寺に假寓し、鄭恒を招致し、相扶けて必ず其鄕に歸らむとするなり。張生一見、情に堪へず、乃ち策を出し、請うて寺中の一室を借り、便宜を窺うて、必ず相近かむとす。鶯鶯の侍女を紅娘といひ、聰慧快活、張生之に賴つて意を通ぜむとし、而かも、却つて翻弄せられて止む。鶯鶯夜ごとに、花園に香を燒く。張生諜して、之を知り、因つて應酬の吟あり。但だ崔氏閨門治まり、加ふるに、鶯鶯すでに許嫁の夫あり、張生煩悶すと雖も、之を奈かむともするなし。時に一片の飛警は、ゆくりなくも、張生に好機を與へ、賊將孫飛虎といい

ふもの鶯鶯の美を聞き、兵を率ゐて、之を掠めむとし、寺門を圍むことあり。崔家の夫人、大に之を患ひ善く賊を退くるものには、女を與へむことを約し、張生自ら進んで策ありと稱し、因つて飛虎に三日を約し、書を修し、援をその友蒲關の守將杜確に乞ひ、崔家の厄を除くを得たり。然れども、夫人の言は、一時の權謀にして固より其意あるに非ず、二人をして、強ゐて兄妹たらしめ、直に之を瞞過し去らむとす。張生悶甚しく、いつしか、病を得て、命縷の如し。鶯鶯之を憐み、遂に一夕の歡會を諾す。佳人才子、こに至りて、遺憾なきなり。夫人之を知つて、その女と侍女紅娘とを拷責すれども、終に及ばず。こゝに於て、夫人張生を招き、三代白衣の婿を招かざるを告げ、早く朝に上り、官を得て還るべきを命ず。張生乃ち辭して出て、草橋店の一夜、旅魂凄然、忽ち鶯夢を感じ、曲、こゝに終る。

これを概言すれば、西廂の曲たるや、正に一部の情史、男女離合の情緒を描寫せし者なれども、脚色の單調にして、變化に乏しきは姑らく言はず、終に人情の幾微を闡き、運命の究極に接觸せず、之を戲曲としては、頗る幼稚なるの誚を免れず、たゞ稱すべきは、人物の割合に善く活動せしこと、是れのみ。鶯鶯は深閨の處女、才色雙絶、氣稟自ら高く、凜として秋霜の如きものあり。然れども、さすがに、一片の柔性あり、亦た善く情を解せり。之に對して、反映の妙を觀るべきは、その侍女紅娘にして、その輕佻を脫せざるところ、其生の卑賤なるを知るべく、而かも、幾分の俠氣を帶び男子を翻弄しつゝも、同情を寄するに吝ならざる如き、最も作者の手腕を見るに足る。崔家の夫人は、純然たる高貴の未亡人、家門を誇り、名聲を重んじ、その經驗を恃み、却つて事を破るに至る。而して、鶯鶯に比照すれば、母子性格の類似、終に爭ふべからず。三個の女性は、かくの如く、殆んど遺憾なきまで、巧妙に描かれ、之に次いで、惠明の如き、固より主要なる人物に非ざれども、俠僧の面目、さながら活くるが如し。ひとり、張生に至りては、性格甚だ高からず、宛然たる一個の蕩子、殆んど取るに足らず、之を鶯鶯に配するは、駿馬癡漢を乘するが如く、大に不倫なるやの嫌あり、聊か惜むべきなり。

西廂は十六折、驚艶に始まりて、驚夢に終る。故に後更に四折を續撰せしものあり。鶯鶯許嫁の夫鄭恒を拉し來り、之をして、張生と相爭はしめ、後に鄭亡びて張存し、鶯鶯と偕老するに終らしむ。然れども、かくの如きは、常套の構想にして、却つて平凡化せしものに過きず。之に加ふるに、脚色拙陋、文辭亦た庸劣、人物性格の一致を欠けろ

もの、遂に狗尾續貂の誚を免れざるなり。

西廂の意匠結構は、必ずしも、激賞を値せざれども、その文辭に至りては、正に天下の妙を極めしもの、李卓吾は、之を化工となし、極力讃辭を、着けて曰く、意ふに、宇宙の內、本と自ら此の如く喜ぶべきの人あり、化工の物に於ける如く、その工巧、自ら不可思儀のみ、と。之に次いて、金聖嘆は曰く、左傳の文、莊生その駘宕あり、孟子その奇峭あり、國策その匝綴あり、太史公その巋嵲あり、夫れ莊生・孟子・國策・太史公、又何ぞ多く道ふに足らむ、吾ひとり思はざりき、西廂は傳奇、而して、亦た其法を用ふ、と。又西廂を讀むものに教へて、必ず地を掃つて之を讀むべしといひ、必ず香を焚いて之を讀むべしといひ、必ず雪に對して之を讀むべしといひ、必ず花に對して之を讀むべしといひ、必ず一日一夜の力を盡し一氣之を讀むべしといひ、必ず半月一月の力を展べて精切に之を讀むべしといひ、必ず美人と並坐して之を讀むべしといひ、必ず道人と對坐して之を讀むべしといへる如き、その詞章の空靈神妙を影寫せしものに外ならず、あゝ人間豈に容易に花團錦簇、這般の大文章あるを得むや。

(七) 琵琶記

琵琶記は、高則誠の作。則誠の傳は、幸に考ふるを得べし。名は明、崇儒里に居る。性聰敏、少より博學を以て稱せらる。一日歎じて曰く、人一經に專ならずして、第を取る、博と雖も、奚を爲さむ、と。乃ち自ら奮つて春秋を讀み、聖人の大義を識り、文を屬するや、筆を執つて立どころに就る。一時の名公卿、皆慕うて與に交る。乙酉、進士の第に登り、處州錄事を授けられ、數ば權貴に忤ひ、病を謝して去り、福建行省都事に任ず、道、慶元を經るや、方氏竊據、强ゐて幕下に留め、力辭すれども從はず、病に臥して卒す、著すところ柔克齋集二十卷あり。弟誠、字は則明、亦た文あり。明の時、高氏の兩難と號す。則誠の集、今存否を知らず。盟宗、吉かつて趙孟頫の韵に次せし岳王墳の一律を激賞せり。曰く、莫向中原唱黍離、英雄生死繫安危、內庭不下頒師詔、絕漠全收大將旗、父子一門甘伏節、山河千里竟分支、孤臣尙有埋身地、二帝遊魂更可悲、と。筆、意の至るところに隨ひ、絕えて次韵の痕迹を見ず、虬龍の片甲、また珍愛すべし。

琵琶記は、則誠の名を千古ならしむる傑作たること、固より論なし。但だ涵虛子の詞品、元の作家を評隲するや、一語も之に及ぶものあらず。或は其才當時未だ世に知

られざりしが故ならむといふものあり。然れども、私見を以てすれば、則誠は元末の人にして、時、明初に及ぶ。而して、詞品の選、特に元代を限りしが故に非ざるかたとひ、之をして當時に名なからしむるも、何ぞ關せむ。則誠たるもの、蓋し時樣に趁くを欲せず、自ら一新機軸を出せしもの、愈よ多とすべきのみ。

琵琶記の作は、作者の友王四が舊妻を棄て、婚を權門に結びしを諷せむが爲に作りしものといふ。然れども、王世貞は、唐人の小說に基づくものとなせり。牛丞相僧孺の子繁、蔡生と文字の友たり、蔡の才あるを以て女弟を嫁せしめむとす、蔡に妻趙氏あり、力辭する能はず、後、牛氏趙とともに處り、能く卑順、自ら將ね、蔡遂に歷仕して、節度副使に至る。これ琵琶記の由つて來るところ、不幸にして、原本傳はらざるのみ。

蔡生、名字詳ならず、故に假りに之を漢末の蔡邕に托す、深意あるに非ず、邕、名節や缺くと雖も、才學一時に重く、貧時蔬を賣り、且つ至孝の名あり、この處、兩者頗る相似たるが故ならむのみ。假設の蔡邕、學識ともに高く、その妻を趙五娘といふ、美にして慧、一家團欒の樂、想見するに堪へたり。邕、之に安んじ、絕えて富貴を欲せず。隣家の張太公、之に勸め、强ゐて、京に上り、試に應ぜしむ。邕、意を決して、家を辭し、科場の三試を經、第一の秀才、狀元郎の榮を荷ひ、すでに美官を授かる。然れども、未だ家を迎ふるに及ばず。故園の茅屋、爺孃饑寒に泣き、幸に孝順の媳婦趙五娘の爲に慰められ、纔に其日を送れり。すでにして、天子邕の人物才學、ともに凡ならざるを愛し、牛丞相に命じ、其女を嫁せしむ。こゝに於て、邕、猛然として、家を思ひ、功名榮華、兩つながら之を去り、官を辭して歸臥せむとす。牛丞相權勢あり、乃ち邕をして、去官辭婚、共に之を得ざらしむ。牛氏の女、賢なり、之を知つて、悶、禁せず。次いて邕、陳情の表を上り、切に請ふところありしが、終に許されず。この間、故山の地、餓莩路に滿ち、趙五娘、義倉に穀を請ひしかも、歸路之を奪はれ、將に古井に投ぜむとせしが、良人の依囑を想起し、舅姑の依恃なきを悲み、僅に其意を繇し、張太公の食を給するに因り、三個幸に一縷の生命を繼ぎ得たり。幾もなくして、姑先づ死し、舅亦た病篤く、因つて五娘を改嫁せしめむとす。五娘强ゐて辭す。しばらくして舅終に死し、之を葬るの費なし、乃ち自ら烏雲を剪り、以て錢に代へむと欲せしも、時凶にして、人の之を買ふものなし。張太公、又來りて之を救ひ、墳塋わづかに築き成すを得たり。こゝに於て、五娘乃ち意を決し、別を張太公に告げ、行々琵琶を彈し、長安の古道に上つて、其夫を尋ねむとし、關山萬里備さに、

苦楚を極むすでにして、都に入り、牛氏の女の爲に救はれ、終に其夫と相見る。この間、變化曲折、頗る多し。邕、すでに新舊二妻あり、而かも、閨門能く治まる。乃ち牛丞相に請ひ、二妻を拉して、故里に歸爽し、張太公に見え、一門の孝義、始めて全し、然にして、天子の詔敕あり、邕は、中郎將を授けられ、妻趙氏は陳留郡夫人に、牛氏は河南郡夫人に封ぜられ、父母皆贈位を辱うす、これを琵琶一篇の梗概となす。

琵琶は西廂と異にして、專ら趙五娘の節義を傳するを主としその妙言ふべからず。而して、蔡邕の意志薄弱にして精神氣魄なき、さながら、西廂の張生と相似たるものあり、兩者の正色、全く同一の模型に出でたるも、一奇なり。毛聲山の琵琶を評する、なほ金聖嘆の西廂に於けるが如く、之を激賞して、その口を極め、必ず西廂より重からしめむとす。曰く、王實甫の西廂は、是れ色を好んで淫せざるものか、高東嘉の琵琶は其れ怨悱して亂れざるものか、西廂は風に近くして、琵琶は雅に進む。琵琶の西廂に勝るや、二あり。一に曰く、情勝る。一に曰く、文勝る。西廂の情は、佳人才子花前月下私期密約の情にして、琵琶の情は、孝子賢妻敦倫重誼纏綿悱惻の情なり、これ琵琶の情西廂に勝るところなり。西廂は妙文なり、琵琶も妙文なり、然れども、西廂の文中には往々にして、方言上の語を雜用す、而して、琵琶に至りては、莫し。これ琵琶の文、西廂に勝る所以なり、と。然れども、この論は、全く迂腐なる儒教的見地より來り、眞正の文學的批判に非ざること、言を俟たず。但だ李笠翁の如き、頗る之に慊らざるが如く、因つて、その瑕疵を列擧し、且つ曰く、これ等の詞曲、幸にして元人より出づ、若し我輩より出でしめば、群口之を訕り、身を何の地に置くかを識らず、予敢て古を讎とするに非ず、すでに詞曲の爲に言を立つ、必ず人をして、法を取るを知らしむ。若し世俗の見に狃れ、事々元人に法るべしといへば、吾恐らくは、未だ其瑜を得ずして、先づ瑕あらむ。人或は之を非らば、元人を擧げて、口を藉らむ。焉ぞ知らむ、聖人千慮、必ず一失あり、聖人の事、猶ほ盡く法るべからざるものあり、況んや其他をや、と。

公平なる見を以てすれば、琵琶の意匠は、西廂に比して、はるかに複雜多端、而して、その文は、たとひ清雅冷艶なるも、西廂の婉麗豐贍に及ばざること遠し。故に湯若士は曰く、琵琶は、すべて性情上より工夫を着く、幷に巧曲の詞情を以て長とせず、と。陳眉公又曰く、西廂は一幅着色の牡丹、琵琶は一幅水墨の梅花、西廂は一幅艶粧の美人、琵琶は、一個白衣の大士、と。二書各長短あり、而かも、ともに千古たるを妨げざるなり。

(八) 水滸傳と三國志

西廂・琵琶すでに元の戲曲を代表すとすれば、水滸・三國、元の小說を代表し得べし。この四書、當時すでに四大奇書の目あり、後に金瓶梅・西遊記の出づるに及び、水滸・三國に配して、支那四大小說といへり、二書の價値、決して少々ならず。

水滸傳の作者に就いては、異說頗る多し。之を羅貫中となすものあり、之を施耐菴となすものあり、兩者合作とするものあり。その第一、これを羅貫中となすものは、王圻の續文獻通考に本づく、曰く水滸傳は羅貫の著、字は本中、杭州の人、小說數十種を編撰す。而して水滸傳は奸盜・脫騙・機械甚だ詳、然れども、變詐百端、人の心術を壞る、說者謂ふ、子孫三世皆啞なりと、天道好還の報かくの如し、と。之に由つて、考ふれば、普通謂ふところの羅貫中は、實に羅貫の誤なり。その第二、これを施耐菴となすものは、胡應麟の莊嶽委譚に拠り、その第三は、金聖嘆等、清朝評家に出て、之を耐菴に歸するに就いては、異言なしと雖も、七十回以後を斷ち、後人の續撰となせり、菽園贅談に曰く、たゞ小說家の言、筆に信して揮洒し、失檢なくむばあらず、聖嘆從つて潤色し、之を耐菴の古本に托し、遂に洋洋たる大觀を覺ゆ。何物の羅貫中、强起干預、妄に續貂を行ひ、

七十回以前、その竄亂を被るもの、亦た復た少からず、實に水滸の一大厄なり。毅然として忠義の名を以て群盜を褒するに至りては、更に耐菴の料るに及ばざりしところ、後人貫中を譏らずして、耐菴を譏る、曷ぞ聖嘆批するところの本を取つて之を觀ざる。これ事の小なる者なりと雖も、然かも、實に人心風俗の大に關係す、余故に言に已む能はず、と。又曰く、水滸の主腦は收結三十六人に在り、故に梁山泊惡夢に驚くを以て、戛然として止む。意は著書に在り、故に止むべくして、止む。群盜に在らず、故に空に憑つて起るもの、亦た端なくして止む、謂ゆる不了を以て之を了するなり。これは是れ著書の體例、人に示すに破綻を以てするに非ず。後の察せざるもの、紛紛蛇足、幾何か讀者をして齒冷かならざらしめむ、と。

予の私見を以てすれば、本書はその全部を擧げて疑もなく、施耐菴の作なるべく第二說、蓋し眞なるべし。今世に傳ふるもの、百二十回本と七十回本とあり。なほ他に古本あれども取らず。百廿回本は、李卓吾の忠義水滸傳にして、七十回本は、金聖嘆の評するところなり。聖嘆の古を評する、往々にして原文を改竄することあり、殊に本書に於けるや、前に云ひし如く、全く後半を刪除し、その妄、最も甚し。西廂・水滸、ともに

李卓吾の校刻に係るものを以て正本となすべし

本書の內容は、宋末盜群の事蹟にして、その一半は、正史に見えたる實錄より出て、宋史の徽宗本紀、侯蒙傳、張叔夜傳に散見するものは、實に本書の骨子に外ならず。曰く、宋江起つて盜をなし、三十六人を以て、河朔に橫行し轉じて十郡を掠む、官軍敢て其鋒に攖ることなし。知亳州侯蒙、上書して言ふ、江の才、必ず大に人に過ぎたる者あらむ、之を赦して、方臘を討ち、以て自ら贖はしむるに如かず、と。帝、蒙に命じて、東平府に知たらしむ、未だ赴かずして卒す。又張叔夜に命じて、海州に知たらしむ、江、將に海州に至らむとす。叔夜間者をして、向ふところを覘はしむ。江、徑に海濱に赴き、鉅舟十餘を刼して、鹵獲を載す。叔夜兵士を募つて、千人を得、伏を近城に設け、輕兵を出して、海に距ぎ、之を誘つて戰ひ、先づ壯卒を海旁に匿し、兵の合するを伺ひ、火を擧げて、其舟を焚く。賊之を聞いて皆鬪志なく、伏兵之に乘じ、その副賊を擒にす、江乃ち降る、と。然れども、宋史の記事は、簡單にして、未だ十分に、その材料を給するに足らず。而して本書の構想に對し、直接の關係あるものを宣和遺事となす。

胡應麟が莊嶽委譚中の一節は、本書著作の動機を說明して、下の言を爲せり。曰く

余偶ま一小說の序を閱するに、施某かつて市肆に入り、故書を閱し、種々敝楮の中に於て、宋の張叔夜が兩賊を招撫する檄文一通を得たり、その中、一百八人の由つて起りし顚末を載す。因つて之を潤色して、この編をなせり、と。叔夜の檄文、多少の材料を供給せしは、蓋し實ならむ、然れども、宣和遺事に至りては、更に大なるものあり、その兩書の內容を比較して、容易に推知すべく、斷じて、復た疑ふべからず。宣和遺事には、宋江等、群盜の總員數を三十六、となし、その間事實の起伏、頗る複雜にして、波瀾に富めり。その結末に曰く、宋江、三十六將を統率し、往いて東嶽に朝し、金爐の心願を賽取す、朝廷奈何ともせず、ぜひなく、榜を出して、宋江等を招諭す。こゝに元帥、姓は張、名は叔夜といふものあり、これ世代將門の子、前み來りて、宋江を招誘し、かの三十六人と宋朝に歸順せしむ。各武功を受け、大天誥勅、諸路の巡檢使に分注して去らしむ。これに因つて、三路の寇、悉く平定するを得たり。後に宋江を遣し、方臘を攻めて功あり、節度に封ぜらる、と。

施耐菴は、遺事中に載する他の事實をも援引して巧に換骨脫胎をなせり。李獅々の事に關するものの如き、即ち是れなり。又他書をも合せて撝撫せし形跡あり、高俅

の事に關するもの、即ち是れなり。王阮亭の居易錄に曰く、稗官小說、盡く虛妄の說のみに非ず、施耐菴の水滸傳、その載するところ、三十六人の姓名の如き、龔聖予の贊に見えたるのみに非ず、首篇高俅の出身を叙せしは、宋俅の著、揮麈後錄に載するところと、一一吻合す、とな。ほ仔細に穿鑿すれば、この類、極めて多かるべし。

遺事載するところ、群盜三十六人、水滸は之を衍して、その三倍百八人の多きに上れり。百八の數たるや、屢ば佛典に見え、最も因緣に富む、故に作者之を採りしならむ。然れども、その主とするところは、實に天罡三十六員に在り、他の地煞七十二員は、要するに、附隷にして、その描寫も、亦た頗る省略に從へる跡あり。相傳ふ、施耐菴、水滸傳を撰ぶとき、空に憑つて三十六人を壁に畫き、老少男女、その狀を一にせず、每日之に對し、毫を吮ひ、務めて刻畫して、致を盡さむことを求む、故に能く一人は一人の精神あり、脉絡貫透、形神俱に化す、とその用意、頗る到れるを知るべし。

水滸の一書、大抵、殺人放火等、凶猛暴惡の事蹟を以て滿たさるゝと雖も、その間、亦た多少の風流情事あり、殊に映照の妙を極む。宋江の閻婆惜に於ける、武松兄弟の潘金蓮に於ける、楊雄石秀の潘巧雲に於ける如き、是れなり。全篇を通じて、結構の大、最も誇るに足るべく、其失として、往々類似の意匠を反覆し、時に才思の窘、掩ふべからざるものあれども、三十六員を主とし、首尾貫徹、その人物を描破し、巧に之を躍動せしめし手腕に至りては、まことに化工の神筆たるに庶幾し。之に加ふるにその文辭は、雄渾にして爽利、駿厲にして踔厲、最も稱すべきなり。金聖嘆曰く、莊周、馬遷、杜甫、その妙、彼の如きは、復た具さに論ぜず。かの施耐菴の書の如き、而かも、亦た必ず心盡き氣絶えて、而、猶ほ死人の如く、而して後に、その才、前後繚繞して、始めて書を成すを得るに至る。夫れ而して後、古人の書を作る、眞に苟且に非ざる者なるを知らむ、と。聖嘆の言常に此の如しと雖も、之を此に見る、必ずしも、所好に阿るの語に非ず。水滸傳に續ぐもの、水滸後傳あり、一は雁宕山樵に出で、一は天華翁に出づ。之を評するものは曰く、一は李俊國を海島に立て、花榮、徐寧の子、共に成業を佐け、高宗の却上金鰲背上行の讖に應ず。なほ忠君愛國の旨を失はず。一は宋江楊公に轉世し、盧俊義王麗に轉世し、一片邪淫の談、文詞乖謬、尙ほ狗尾にも若かざるなり、と。

三國志を以て、水滸・西廂に伍せしむるは、到底不倫なり。莊嶽委譚に云ふ、施某すでに水滸傳を作る、その門人羅某、之に傚つて三國志の演義を作る、甚だ淺鄙にして笑

ふべし、と。この書、果して羅貫に出でしや否や、固より詳ならず、且つ眞本の存否、その論、未だ決せず。然れども、意匠文辭、ともに淺陋なるは、殆んど爭ふべからず。要するに、陳壽の原本を竊取したるものにして、その創意に出でしもの、却つて盡く醜なり。この書に見えたる諸葛亮は、忠良の循臣に非ずして、權謀に富みたる一個の策士、人をして、大に敬慕の念を減ぜしむ。その文詞、零碎的に稍や佳なるものあれども、渾成圓熟の妙に乏し。謝肇淛の五雜俎に、之を評して、「俚にして味なし、何となれば、事太だ實なれば、腐に近く、以て里巷の小兒を悅ばしむべきも、士君子の爲に道ふに足らざるなり」といへるもの、決して苛酷ならず。ひとり、坊本卷首の讀法には、之を推賞して措かず。その列國志に勝るとなすは、なほ可なれども、西遊水滸に勝るといふに至りては、その偏見、亦た甚し。この評語、相傳へて、金聖嘆に出づと稱すと雖も、斷じて信すべからず。おもふに、坊賈の輩、之を僞撰し、名を聖嘆に托せしものならむ。聖嘆の言、時に矛盾あるも、かくの如き妄をなさゞるや、必せり。若し夫れ、本書の續撰たる續三國志、後三國志に至りては、愈よ觀るに足らず。

(九) 元代の諸家

元は軟文學に於て其富を誇るべきも、史筆論策等の硬文學に於ては、頗る貧なりき。この中間を位地を占むべき詩は、詞曲と相鄰るの故を以て、纖麗に失し、金詩の悲壯と全く異なれり。括言すれば、詩は、宋に於て散文化し、元に於て詞曲化したるなり。

元の詩人はじめに趙孟頫あり、これに次いで虞集楊載范椿揭傒斯あり。北人には、薩都剌あり、而して、楊維楨、實に一代の殿をなせり。

趙孟頫、字は子昂、宋の宗族にして、節を改めて元に仕へしもの、その人、固より鄙むべきも、その才藝の美、一世に冠たり。詩文清遠奇逸、又書畫を善くす。楊載曰く、孟頫の才、頗る書畫の爲に掩はれ、その書畫を知るものは文章を知らず、その文章を知るものは、その經濟の學を知らず、と。岳王墳の一聯、南渡君臣輕社稷、中原父老望旌旗、慷慨悲愴を極むと雖も、遂に殉國の忠臣たる能はず、まことに嘆惜すべきなり。

虞集、字は伯生、道園と號す。性孝友にして、學問博洽。平生の文、稿を存するもの、十の二三に過ぎずと稱すれども、醇正該博、頗る稱すべく、その詩に至りては、捷利俊爽を以て推さる。楊載、字は仲弘、はじめ趙孟頫に知られて、其名をなせり。かつて曰く、詩は

當に材を漢魏に取り、音節は唐を宗となすべし、と。故に雍雅瞻正を極むと雖も、峻骨英氣に乏し。紀曉嵐曰く、その詩清思は范椁に及ばず、秀韻は揭傒斯に及ばず、權奇飛動は虞集に及ばず、而かも風規雅瞻、三人の間に位置して、亦た終に怍色なし、と。范椁、字は亨父、人物すでに高く、其詩に見はるゝもの、自ら遠情宕志あり。揭傒斯、字は曼碩、その詩清麗婉轉、而かも神骨秀削、體裁尤も備はれり。薩都剌、字は天錫、本と色目の人、その祖以來、雁門に居る、詩文ともに秀絶。虞集、その情に長じて、流麗清婉なるを稱す。予は、こゝに至りて、元代一般の好尚、纖麗華美を主とし、殆んど地理的影響と人種的特性とを欺くに足りしを疑ふ。楊維楨は、次章別に論ずるところあり。

元の儒家には、許衡・吳澄ありとも、に文を善くせり。衡は明白質樸にして、唯だ遠意を主とせしも、澄は詞華典雅、篤實は前者に及ばざれども、工緻はるかに過ぎたり。衡の講友に姚樞あり、その從子に姚燧あり、その學、衡より出でゝ、文は却つて過ぐること遠く、延祐以前、一時の覇權を握れり。劉因は曠世の高士、詩文を善くし、辭章適健、適かに許吳の上に在り、而かも、醇正亦た之に減ぜず、最も稱すべしとなす。その他の道學者流は、論ずるに足らず。

（一〇）楊維楨

元末に楊維楨あるは、なほ金末に元遺山あるが如し。維楨、字は廉夫、紹興山陰の人少にして穎悟、學を好み、日に書數千言を記す。その父宏、爲に樓を鐵崖山中に起し、繞らし植ゆるに梅樹百株を以てし、新古書冊を聚むる數萬卷、維楨をして、之を讀ましめ、その或は怠らむを恐るゝや、梯を徹し、轆轤を以て、食を傳へて之を督勵す。維楨亦た發憤し、凡そ五年にして、經史百家に精通し、自ら號して鐵崖といふ。泰定四年、進士に第し、官に拜せられしも、狷直を以て之を罷む。至正の初、朝廷遼金宋三史を修むるや、與るを得ず。維楨、正統辨千言を作る。司徒歐陽玄、之を讀み、嘆じて曰く、百年の後、公論此に定まらむ、と。すでにして、四海兵起るや、遂に浙西山水の間に浪跡し、徒つて松江の上に居り、聲價愈よ高し。明興りて天下大に定るや、詔して遺佚の士を徵し、禮樂の書を修纂して、郡國に頒示す。維楨召されて、京師に至る。謝して曰く、老婦將に就木せむとす、而かも、再び嫁を理むるものあらむや、と。明年有司敦迫す。維楨已むを得ず、老寡婦謠一首を賦し、進御して曰く、皇帝吾が能くするところを竭さしめ、吾が能くせざるところを强ゐざれば可なり。然らざれば、海を踏んで、死するあらむのみ、と。太

祖之を許し、安車を賜うて至らしむ。留ること百餘日、修纂するところの敘例、略ぼ成りしを以て、骸骨を乞ひ、白衣山に歸るを求め、幾もなくして、肺を病んで卒す。著すところ、四書一貫錄・五經鈐鍵・春秋透天・關禮經約・君子義・歷代史鉞・補正三史綱目・富春人物志以下、數下卷あり、然れども詩文集の外、今傳ふるもの少し。

宋濂、かつて之を稱して曰く、商敦周彝、を觀るが如く、雲霄文を成し、寒芒橫逸、人の目睛を奪ふ、とその文、すでに此の如く、詩に至りては、更に長技を見る。その宗とするところは、唐の李賀・李商隱にして、才情雙絕、典麗の中に、一味の雋致を添へしところまことに千古の檀場なり。就中、樂府竹枝の類に至りては、太白・飛卿の後、別に一軍を張るに足るものあり。當時號して鐵崖體といふ。張雨かつて之を稱して曰く、少陵二李の間に出入して、曠世金石の聲あり、と。之を一概して、清麗芊眠、情文斐亶、而かも骨力あり、唯だ時弊を矯むるに急なるや、往々にして、誕怪晦澁に陷ることあり、之を批議するもの、文妖を以て目するに至る。要するに、一代の名家、その別調を出せしところ、愈よ多とすべきなり。若し夫れ、同游諸士に至りては、蘇葭玉に倚るもの、特に詳論を値せず。詩、こゝに於て變じ、時、乃ち明代に入る。

第二　明代文學

(一)　復古の氣運

明の太祖朱元璋、金陵に即位し、次いで元を破り、四方を經略し、統一の業、はじめて成り、中原の四百州は、再び漢族の手に歸しぬ。その元に勝つて歸るや、圖書を收めて、之を金陵に致し、詔して四方の遺書を求め、秘書監丞を設け、尋いで、改めて翰林典籍といひ、之を掌らしむ。而して、科擧士を取るや、經義を以て先と爲せり。かくの如きは、固より、奎運の隆を謀るものに似たりと雖も、太祖刻薄の志よりいへば、天下の俊才を羈束し、風雲の志を抱くことなからしめむと欲せしものにして、その究極、四海を愚にするの手段に外ならず。但だ表面上、必然の結果として、一代を擧げて、文物典章、斐然として觀るべきものあり。而して、謂ゆる八股文、亦た此間に出でぬ。

かつて述べたる如く、八股文の源は、宋の王安石・熙寧中、詩賦を罷め、經義を以て進士を試みたるに搬り、その後、多少の變遷なき能はず。而して八股の目は、實に憲宗の時に起れり。股は對偶の意、蓋し是より以前、經義の文は、傳注を敷演するに過ぎず、或

は對し、或は散じ、未だ定式あらず、こゝに至りて、前後各四股を講じ、遂に此稱を來たすに至りしが、その後又變じ、一正一反、一虛一實、體裁大に革れり。然れども、その間、亦た自ら通則あり、要は、破題、承題、原起、大結等を以て章句と稱する者なり。八股文、すでに受驗の科目にして、之を學ぶもの多く、能手亦た少からずと雖も、要するに、庶爛の經義を反覆するのみ、その內容の文學趣味に乏しきこと、言を俟たず。加ふるに、その形式に於ても、千篇一律、陳々相仍る、遂に予が論述の對象となすに足らず。

ひとり八股文といはむや、古文に於て、亦た然るものあり明代を通じて、鑄型的擬古的にして、氣骨峻嶒たる詞章は、遂に之を求むべからず。實は言ふべき或者を有せざりしに因るや必せり。宋代文章の盛なるや、一方に於ては、哲學的思索の之に伴ふあり。元より以後は、然らず。明に至りて、愈よ甚し。永樂中、五經四書大全の勅撰ありし後、程朱の學、一世を風靡し、思想界は、全く統一されたり。その除外例としては、ひとり王守仁あるのみ。要するに、明人は思力に短く、文章亦た光芒氣焰を缺く、而して、詩は、宋元以後、振はざること久しく、明人の力、亦た奈かむともするなきなり。

明の世を閲する二百七十餘年、固より短しと爲さず。文人詩客、亦た必ずしも尠からず。國初に當りては、宋濂、王禕、方孝孺等、文柄を握れり。而して、その本づくところは、實に元季の虞、柳、黃、吳に在り。師友講貫、以て之を致せるなり。詩壇に於ては、秀てゝ未だ實らざりし曠世の逸才たる高青邱を中堅とし、前には劉基あり、相並んで吳中四傑の稱を擅にせしもの、楊基、張羽、徐賁あり。元紀の餘風を存し、未だ隆時の正軌を極めずと雖も、亦た一時の盛を推すに足る。永樂以還、詩文ともに體臺閣を崇び、骫骳振はず、弘治正德の間、李東陽先づ出で、詩文兩道を分つて、氣運の先聲をなし、李夢陽、何景明等、謂ゆる前七子の徒、相繼いで起り、口を極めて、復古を唱道し、文は西京以下、詩は中唐以下、ともに一切唾棄して取らず、天下翕然として之に向ひ、明の詩文、こゝに忽ち一大變を經たり。嘉靖の時に及び、王愼中、唐順之の輩、之に反抗し、文は歐曾を宗とし、詩は初唐に倣ひしが、李攀龍、王世貞等、謂ゆる後七子の徒、復た李何の舊に遵ひ、更に之を驅つて、極端に至らしめ、文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐、之を表面よりいへば、菁英彬々、大雅の章たるに似たりと雖も、氣力骨節、ともに之を缺けり。その後、この弊を矯正せむが爲に、歸有光は司馬歐陽を以て自ら命じ、徐渭、湯顯祖、袁宏道、鍾惺等の輩、亦た各一時に鳴りしも、その極、或は激に失す。次いで錢謙益、艾南英の北宋を矩獲

するあり、張溥陳子龍の東漢を奉守するあり、而して、遂に宗社の革命に際せり。

之を要するに明代の文學は、全く復古的なり、前後兩七子の復古は、自ら標榜するところ、固より言を俟たず、之に反抗したるもの、亦た唯だ時代の先後を異にするに過ぎずして、均しく是れ復古なり。宋代の思想界の活潑なるに反し、明の思想界は、萎微殊に甚しく、文學上の影響、殊に彰明較著、やがて這般の氣運を促進せしなり。

腐爛の思想を載するに、擬古の詞章を以てす、人をして、殆んど辟易せしむ。明の文學、その量に於ては、頗る宏富なりと雖も、摸擬剽竊、その一半を占め、或は竊書の甚しきに至らむとす。清初の顧炎武は、明の遺臣、氣骨文章を以て、稱せられしもの、かつて、前朝文學の衰を慨し、覺えず、激語を着けて曰く、有明一代の人の著すところの書、竊盜に非ざるはなきのみ、とやゝ酷なりと雖も、必ずしも、中らざるに非ず。

詩文すでに取るに足らず、塡詞亦た見るべきものなく、或は聲律を誤るものさへあり。ひとり、小說戲曲等の軟文學に至りては、元朝一時の盛、强弩の餘勢を留め、他に比して、はるかに稱賞すべき傑作を出しぬ。西遊・金瓶は、小說の尤なるものにして、湯顯祖の作に係る玉茗堂四夢は、亦た不朽の佳作たるに庶幾し。

(二) 明初の諸家

明初の宋濂は、同代を通じて唯一の大家を推すべきものなり、而して、詩に於て、同一の地位を占め得べき高青邱は、之と略ぼ時を同うして、やゝ後輩に屬せり。予は、こゝに便宜上、この兩者の間に伍すべきものを一括して、略述を試みむとす。濂の外、王褘・劉基・方孝孺の諸家あり、ともに詩文兼達の名を庶幾すべきものなり。

宋濂、字は景濂、潛溪と號す、元末に翰林編修となり、明初復た徵されて、翰林學士承旨となり、洪武十三年に卒し、文憲と謚す。學問太だ醇正、その文は、元季吳萊・柳貫・黃溍の諸人に學びしも、自ら機軸を出し、敷腴朗暢を以て主となし、深博典贍、蔚然として開國の氣象あり。唯だ語漫にして格弱きは、一代風氣の然らしむるところ、その詩は、文に比して、大に遜色あり、嚴整妥切なれども、稍や平易、猶ほ元り調を襲へ

王褘、字は子充、宋濂と同じく、黃溍の門に學び、大體の趨向、頗る相似たり。明の太祖、かつて宋濂に謂つて曰く、浙東の人才、唯だ卿と王褘とのみ。才思の雄は、卿、褘に及ばず、學問の博きは、褘、卿に若かず、と。その文、醇朴にして、宏肆、詩も亦た切實にして純雅なり。褘すでに才思に長ず、故に時に濂に勝るものあり、朱彝尊曰く、子充の文、元人冗

沓の習を脱去し、體製明潔、當に景濂の右に在るべく、詩も亦た然り、と。

劉基、字は伯溫、青田の人、元の進士に擧げられ官に拜せしも、志を得ずして罷め歸る。その後、太祖金陵を下すに及び、佐命の功を論じて、誠意伯に封ぜられ、洪武の初、御史中丞に至る。然れども、性疾惡甚しきを以て、竟に胡惟庸の爲に毒殺せらる。正德中、文成と追諡す。基の文、雄奇なれども、神鋒太だ豁露せり。詩名固より更に高く、宋濂の文に於けると同じく、臺閣の重臣を以て、一代の先驅となりしものなり。故に楊維新は曰く、子房詞章を見ず、玄齡僅に符檄を辨ず、公は勳業邦を造り、文章世に名づく、千古の人豪と謂ふべし、と。沈德潛、その所長を論じて曰く、元季の詩、すべて都華を尙ぶ文成ひとり高格を標し、時に韓杜に追逐せむと欲す。故に超然として獨り勝る。允に一代の冠たり。樂府は古詩よりも高く、古詩は近體よりも高く、五言近體、又七言より高し、と。朱彝尊又曰く樂府の辭、唐より以前、詩人多く之に擬し、宋に至りて掃除殆んど盡く、元季の楊廉夫、李季和の輩、交も相唱答す、然れども、多く新題を構へて、古體となす、惟だ劉誠意、銳氣古を摹し、作るところ、特に多く、遂に明三百年の風氣を開く。その五言古詩は、專ら韋左司に倣ひ、その神詣を要するに、與に相伯仲す、と。

方孝孺は、文天祥、謝枋得に追隨すべき名節の士なり。字は希直、寧海侯城の人、宋濂に從つて學ぶ、同門の士、能く其右に出づるものなし。濂、かつて詩を贈り、其中に云ふあり、以茲稽古力、可敵戡定勳、濡毫寫雄顯、勢足移峨岷、瀉泄渾沌竅、出入造化神、盡抽神奇秘、不墮臭腐塵、所以自出之、愈見光景新、振古著作家、後先各繽紛、豈知萬牛毛、難媲一角麟、と。建文中、文學博士となる。建安四年、燕王棣の師、京師を陷るに當りて、執へらる。乃ち筆札を授けて、詔書を草せしむ。孝孺筆を地に投じて曰く、死せば死せむのみ、詔は草すべからず、と。燕王大に怒り、之を市に磔し、宗族坐して死するもの八百四十七人、殘後又その文字を嚴禁す、然れども、遜志齋集、その門人王稌、之を藏せしに因り、今に世に傳ふ。孝孺すでに烈丈夫、その文、光焰あり、氣魄あり、神氣流動、而して、本色は昌明博大に在り、而かも、開闔自如、小韓の名ありと雖ども、實は大蘇と相埒す。若し强ゐて其失を求むれば、奔流激湍、一瀉千里、紆溯潆洄の致に乏しきこと、是れのみ。詩は餘技に過ぎざれども、渾朴醇正、談詩絕句、その本領を見るべく、就中、五言は、選體に熟精す。要するに、詩文ともに東坡の所業に倣はむとせしもの、惜いかな、その死するや、未だ知命に及ばず、老成の域に達せずして止みき。

(三) 高啓

高啓字は季迪、呉郡長洲の人、少にして警敏力學、詩に工なり。はじめ、呉淞江上の青邱に居り、歌詠終日、以て自適し、因つて青邱子歌を作る。最も櫂略を好み、人聽を聳かし、偶然以て天下人なしとなす。洪武の初、召して翰林國史編修官を授けられ、元史を修するに與かり、その後、戸部侍郎に擢んでらる。後官を辭するに及び、金を賜うて還さる。こゝに於て、復た江上に在り、青邱市里の墟に遨遊し、鋭志少しも衰へず。傳へて云ふ、これより先、啓、かつて宮女の圖に題して曰く、女奴扶醉踏蒼苔、明月西園侍宴回、小犬隔花空吠影、夜深宮禁有雞來、と。又畫犬に題して曰く、莫向瑤階吠人影、羊車半夜出深宮、と。並に諷刺するところあり、太祖之を銜みて、未だ發せず、適ま江夏の知府魏觀、府治を改修するを以て讒を得、而して、その上梁文は、啓の作るところなり。帝、因つて怒を發し、之を市に腰斬す、時に年三十九。謂ゆる上梁文、今佚して傳らず。後人諱んで存せざるを以て、その詳、考ふに由なしと雖も、要するに、文字奇禍を得しは、斷じて疑ふべからず。張羽の槎史赴臺の詩は、實に啓の爲に作り、その中、遊者固云樂、子去不復還、平生五千卷、寧救此日艱、天網恒恢恢、康莊徧榛菅、の句あり、以て證となすべし。

啓、才思駿發、文には鳧藻集あり、氣を尚び、辨難攻擊の體多し。詞には、扣舷集あり。然れども、その絶技は、實に詩の一邊に在り。吹臺・笙鳴・江館・凰臺・青邱・南樓・姑蘇・勝壬の諸集は、自ら手訂せしものにして、後人之を合せて大全集となせり。又金檀の施注せし青邱詩集あり、最も善本と稱す。その詩、凡そ二千首、寧ろ多しといふべし。傳ふるところに因れば、弱冠を踰ゆるや、日に五首を課し、久うして精ならざるを恐れ、日に二首、後に一首、知るべし、終生吟哦を廢すること無かりしを。

趙甌北の青邱を論ずる、極めて公平妥當の見を推すべし。曰く、詩は南宋の末年に至りて、纖薄すでに極まる。故に元明兩代の詩人、又轉じて唐を學ぶ、これ亦た風氣循環往復自然の勢なり。元末明初、楊鐵崖、目して巨擘となす、然れども、險怪は昌谷に傚ひ、妖麗は溫李に仿ふ、之を以て、自ら一家を成すとすれば究むべきも、康莊大道に非ず、當時王常宗すでに文妖を以て之を目す、未だ後生の爲に法を取る可らざるなり。惟だ高青邱、才氣超邁、音節響亮、唐人を宗派して、自ら新意を出し、一たび涉爭すれば、博大昌明の氣象あり、亦た有明一代の文運を開く、論者推して開國の詩人第一となす、信に虛ならざるなり。李志光、高太史傳を作つて謂ふ、その詩、上は建安を窺ひ、下は

開元に逮ぶ、大曆以後に至りては、之を貶とす、と。これ亦た確論に非ず、今、悉く之を閲するに、五古五律は、漢魏六朝及び初盛唐に脫胎し、七古七律は、參するに中唐を以てし、七絕は、併せて晩唐に及ぶ要するに、その英爽、人に絕つ、故に唐を學んで、唐の圍するところとならず。從來唐を學ぶもの、李何の輩、その面貌を襲うて、その聲調を倣ふ、而して神理索然、優孟の衣冠なり。鍾譚等、又一字一句に從ひ冷僻を標擧し、以て昧外の味を得たりと爲す、幽獨君の鬼語なり。ひとり青邱は、天半の朱霞、下界に照映するが如く、今に至るも、猶ほ光景常に新なり、その天分、及ぶべからざればなり、と。

青邱の、唐代名家に於ける、體に從ひ、その形似を認むべし。杜を學びしものあり、韓を學びしものあり、白を學びしものあり、李商隱を學びしものあり、溫飛卿を學びしものあり、萬有を挫籠して、常師なきを見るべし。而して、その高きものは、往々にして、李白に逼り、天分の異常なること、こゝに於て、愈よ知るべし。李白の詩、未だ能く之を學びしものあらず、惟だ青邱之と相上下し、惟だ形似するのみならず、且つ神似するものあり、趙甌北、又曰く、司馬子徽、青蓮の仙風道骨あるをいふ、而して青邱の陶蘧先生に贈るや、亦た云ふ謂予有仙契、泥滓非久淪、と。蓋し二人實に皆出塵の才あり、故に相契神識の間に在るのみと。謝玄懿、青邱の詩を總評して曰く、李迪の詩、情に緣つて事に隨ひ、物に因つて形を賦し、縱横百出、開闔變化、その體製雅醇なれば、冠裳委蛇、佩玉して長裾するなり、その思致清遠なれば、秋空素鶴、廻翔下らむと欲して、輕雲霽月の連娟するなり。その文采の縟麗なるは、春花翹英、蜀錦新に濯ふが如く、その才氣の俊逸なるは、泰華秋隼の孤騫、崑崙の八駿、風を追ひ、電を躡んで、馳する如きなり、と。形容刻劃を極むと雖も、青邱の詩、固より之に當るに足れり。

然れども、亦た必ずしも其失なくむばあらず。沈德潛曰く、侍郎の詩、上は漢魏盛唐より、下は宋元諸家に至るまで、其間に出入せざるなく、一時大作手を推す、特に才調餘あり、蹊徑未だ化せず、故に元風を一變するも、未だ能く直に大雅を追ふ能はず、と。紀曉嵐曰く、啓、天才高逸、明一代詩人の上に在り、凡そ古調を摹擬する、眞に逼らざるはなし、惟だ殞折太だ速にして、未だ鎔鑄變化、自ら一家を爲す能はず。故に古人の體を備有して、啓、何の體を爲すと名づく能はず、これ天實に之を限る、啓の過に非ずと。要するに、青邱は未だ自己の特色を作するに及はず、摸擬を事としたる修業の中途に於て、早く挫折せしもの、予が曩に秀てゝ實らずといひしもの、即ち此故のみ。

(四) 青邱同時の諸家

青邱同時の諸家、固より少からず。而して、他の三傑、尤も重しとなす。楊基、字は孟載、その先は蜀人、吳に居り、用薦して官に入り、仕へて山西按察使に至り、讒を被り、職を奪はれ、供徒して工所に卒す。眉菴集あり。その詩、纖麗纖蔚、但だ未だ元人の習を脫せず、その高きもの、纖に之を晚唐に得たるものなり。徐子元云ふ、孟載は天機雲錦、自然に美麗、ひとり時に纖巧を出すや、高の冲雅に及ばずと。

次は張羽、字は來儀、潯陽の人、兵阻むに由り、吳興に居る、明初徵して太常司丞に擢んでられ、翰林院同掌文淵閣事を兼ね、事を以て嶺外に竄せられ、未だ半道ならずして、召し還され、その免れざるを知るや、龍江に投じて死す。靜居集あり。その五言、杜韋を學びて神理あれども、微に嚮轎を嫌ふ。近體亦た長ずるところに非ず。歌行の一體、音節諧暢、律詩は清圓渾脫、彫繢を事とせず、常に徐揚二人を凌ぎ、青邱と並馳すべし。

次は徐賁、字は幼文、その先は蜀人、徒つて吳に居る、洪武の初、官を授けられ、仕へて河南布政使に至り、尋いて獄に下つて死せり。北郭集あり。その詩、體裁精密、情喩幽深、而かも風韻凄朗、顧玄言評して楚客の叢蘭、湘君の芳杜、每に惆悵多しとなせり。

吳中の四傑、均しくその終を克くせず、まことに嘆惜に堪へたり。張企翔曰く、國初高楊張徐を以て、唐の四傑に比す。故老言ふ、惟だ文才の似たるのみならずして、その終るところも、亦た相遠からずと。眉菴・盈川・令終に一の如し。太史の斃るゝ、賓王に同じ。北郭は海に溺れず、僅に首領を全うすと雖も、而かも首丘に非ず。來儀は、龍江に投ず、又照鄰と異なるなし。噫、亦た異なりと。四傑の外、傳ふべきものを袁凱・張以寧となす、ともに北郭十才子の中に算せられしものなり。

袁凱、字は景文、華亭の人、洪武中、徵して御史に拜せられ、病を以て免じて歸る。その詩、渾厚にして含蓄あり。沈德潛曰く、李獻吉謂ふ、海叟、子美を師法すと。何仲默謂ふ、歌行杜の體を得たりと。鄙意平直を傷み、未だ變化を極めず。七言斷句は、李庶子・劉賓客の間に在り、青邱孟載、俱に未だ及ばざるなり、と。

張以寧、字は志道、古田の人、元の季、翰林承旨となり、明に仕へて、侍讀學士となり、安南に使し、途にして卒せり。以寧はじめ虞集・黃溍・歐陽玄・揭傒斯以後の文家と稱せられ、その後、詩名亦た高し。その詩、沈鬱雄健なるものは、漢魏を追ふべく、清婉俊逸なるものは、盛唐に配するに足ると稱せらる。紀曉嵐曰く、才氣は高啓・楊基・張羽に及ばざ

るも、而かも法律謹嚴、字句熨貼、長篇短什、並に首尾溫麗、三人に於て、又別に一格を爲す、以て人に勝るなしと雖も、而かも亦た敗るべからざるに立つ、と。

明初の詩派、凡そ五處に於て、其源を發せり、胡元瑞曰く、吳の詩派は高季迪に昉り、越の詩派は劉伯溫に昉り、閩の詩派は林子羽に昉り、嶺南の詩派は孫仲衍に昉り、江右の詩派は劉子高に昉る、と。伯溫季迪、すでに之を述ぶ、仍つて他の三家に及ばむ。

劉崧、字は子高、奉和の人、明初人材を以て擧げられ、歷仕して國子司業に至る。その詩詞、彩鮮媚、音格未だ高からず。朱竹垞曰く、子高、句腹字琢、頗る苦心を具ふ、惜むらくは、その體弱にして、方程に局し、展拓する能はず、唐に於ては、大曆の才子に近く、宋に於ては永嘉の四靈に類し、元に於ては、最も薩天錫に肖たり、と。

孫蕡、字は仲衍、南海の人、洪武中、蘇州府經歷に任じ、後、黨禍に死す。王佐、黃哲等と嶺南五先生の稱あり、その詩、清圓流麗、明珠盤を走るが如く、氣象雄渾、興喩深致あり。

林鴻、字は子羽、福清の人、明初、薦を以て將樂訓導を授けられ、後、禮部員外郎に拜せらる。高棅、陳亮と同時にして、閩中十子と稱す、而して、鴻、その巨擘たり。その詩、唐人を宗法し、尺步を繩趨す、實に七子の俑を作りしものなり。

(五) 臺閣體

永樂宣德の間は、明室の守成時代にして、國初に於ける峻嶸磊砢の氣風、漸く變じて儒雅となり、悠揚となり、その詩に於けるや、遂に臺閣體を確立せしめき。

解縉、字は大紳、吉水の人、洪武二十年の進士、一たび、御史となりて、河州衞史に謫せられしが、旋つて、命を翰林に待ち、永樂の初、侍讀學士となり、年を踰えて、翰林學士に進み、出でゝ廣東參議となる。後、高煦の譖するところとなりて、獄に下つて死す。その詩、當時に在りて、豪脫放逸を以て稱せられ、才名烜赫、海內を傾動す。而かも、篇什合存するもの少し。之に次ぐものは、楊士奇、楊榮、楊溥にして、英宗の初世、三楊と稱せらる。その傳は、こゝに詳述せず、この諸人、久しく館閣に在りて、朝廷の高文大册、多く其手に出で、述作亦た自ら典型あり、唯だ天下を擧げて、之を崇奉するや、形摸拘泥、萬喙一音、興象存せず、仍つて眞詩の亡を致す。その罪、之を掬めしものに在らずして、之を學びしものに在ること、辯を俟たず。曾鞏、郭登の輩、即ち是れなり。明詩別裁の序に於て、沈德潛が、永樂以還、體臺閣を崇び、骫骳振はず、といひ、蔣重光が、永樂以還、體臺閣を尙ぶ、收むところ、略に從ふ、膚浮を防ぐなり、といへるもの、以て公論あるを知るべし。